
あの坂道の上で

てらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの坂道の上で

【Nコード】

N30121

【作者名】

てらい

【あらすじ】

俺たちが子供のころに交わした約束。そんなことはとっくの昔に忘れていつしか二人は疎遠になっていた。やはり幼馴染が仲が良いのはマンガやアニメだけ。俺たちはあの約束を忘れたまま大人になっていくのだ・・・そう思っていた。

いつもの1日

「ねえトモくん。」

「ん〜？」

「おっきくなったらさ、けっこんしようね。」

「かんがえとく。」

「でねっ、こどもは10にんほしいなあ。」

「・・・・・・」

「っておもったんだけど、さすがにたいへんだから4にんでいいや」

「4にんもたいへんだとおもうよ・・・・」

『・・・・・・・・・』

（???）

『・・・・・・・・・ピピピ・・・・・・・・・ピピピ』

（はあ、もうそんな時間なのか。）

そんなことを考えながら、現実に戻ってこようと必死に頭を回転させる。

ふと目が覚めた。窓の隙間から朝の日差しが顔を照らしている。

『ピピピピ・ピピピピ・ピピピピ』

がしつと頭の上にある目覚まし時計をつかみ、この耳障りな音を消した。時刻はちょうど六時を指している。

（ずいぶん懐かしい夢を見たなあ。セリフは結構違った気がするけど。）

そう思いながら昨夜に用意しておいた教科書をカバンの中に詰め込み、一階へと降りて行った。

「あ、おはよう。」

「ん、おはよう・・・」

などと力の抜けた声で親とあいさつを交わし、その後はもくもくと朝食をとった。

六時半、着替えも終わりそろそろ学校へ行くのにちょうど良い時間になっていた。

なぜこんなにも早く学校へ行くのかというと、朝練があるからである。俺は陸上部に所属している。で、この陸上部ってのはかなり力を入れていて毎朝7時から朝練があるのだ。

（さすがに2年目だからもう慣れたが、六時起床は結構厳しいなあ。）

ふうとため息をついて家を出る。

学校へは自転車で行く。片道15分くらいで着くのでだいぶ時間に余裕がある。自転車をひっぱり出してきて、いざ行こうとした時、

「ガチャ」

という音が隣の家からした。

『あっ』

二人の声が重なった。

「おはよう」と俺があいさつする。すると向こうも「おはよう」と返してきた。

交わしたした言葉はそれだけだった。

俺はあいさつを済まし、学校へ向かった。

彼女は小野坂優希。おのさかゆうき俺の幼馴染で、さっきの夢で結婚しようと言っていた子だ。

彼女は合唱部に所属しており、その合唱部も7時から朝練があるのだ。なのでいつもこの時間に顔を合わせている。

小学校低学年までは仲が良かったと思うが、いつの間にか話すことも遊ぶことも無くなっていた。たまたま高校も一緒になったがこの関係はずっと平行線のままである。

そういえば俺の自己紹介がまだだったな。一応しとくか・・・
えー、俺の名前は藤井友喜^{ふじいともき}。高校2年生、陸上部所属、ごく一般的
な青年だと自分では思っている。好きな食べ物はカレー、嫌いな食
べ物特になし。・・・こんなところかな。

俺の家は山を削ったところに建っているのでかなりアップダウンが
激しい。学校へ行くには坂を下り、上り、又下り、そこから5分く
らい自転車をこいでやっと着く。時間的には問題ないのだがこの上
り坂はかなりきつい。こんな道を通るのは俺くらいだ。普通は回り
道をして行くのだが、10分のロスが生まれてしまう。朝の10分
はかなりでかいので我慢するしかないだろう。

（練習の一環だと思えば大丈夫・・・なわけ無いっての！）
などと文句を言っても何も変わらないのでしぶしぶ自転車をこぐ。

心臓破りの坂を上りきり下り坂で息を整える。下り坂が終わり自転
車をこぎ直そうとした時。

「藤井くーん、おはよう。」

と少し離れた所から元気な声が聞こえてきた。少し背の高い女の子
が手を振りながら近づいてきた。

「よう柊、おはよう。」

と俺は返した。

彼女は柊彩音^{ひいらぎあやね}。陸上部のマネージャーである。中学の時から知り
合いで中学時代もマネージャーをしていて、いろいろお世話になっ
ている。ちなみに小野坂優希の親友である。

「いいよなあ、この坂を上り下りしなくていいってのは。」

彼女の家はこの坂道をちょうど下りきったところにある。近所とい
えば近所なのだが、この山の壁はでかい。

「もう毎回そんなことばっか言ってえ、練習の一環だと思えば大丈
夫だよっ！」

「・・・・・・・・」

まあ実際この坂のおかげで結構体は鍛えられている。このおかげだけというわけでは無いが、実際県でトップを争うレベルで全国も狙えるくらいである。

（決して自慢では無い、決して・・・）

「そういえばさあ、優希と仲直りした？」

いつものように聞いてきた。毎回同じことを聞いてくるが、もう慣れてしまった。

「仲直りも何も元々ケンカなんかしてないって。」

「でもさあ普通幼馴染ってもっと仲いいでしょ。悪口とか言い合っ
ても実は以心伝心ができてるみたいな。」

「なんだよそれ。そういうのはマンガとかアニメだけだって。」
とあきれながら言う。

「ええ、でもさあ友達みたいに話したり遊んだりするでしょ普通。
藤井君たち見てるとき、何かお互い避けあってるみたいなんだもん。」

「避けあってるねえ・・・別にそんなつもりはないんだけど。」

（・・・・・・・・）

「そういえばさ、彩夏ちゃんは一緒じゃないの？」
と話をそらして聞いた。

「え？ああ、あの子なら置いてきたわよ。」

彩夏ちゃんというのは俺の1こ下の後輩で柊の妹である。又後で出てくると思うので、その時に紹介するとしよう。

「置いてきたって・・・」

「だってあの子支度するの遅いんだもの。待ってたら遅刻しちゃうわ。」

とかなんとか柊の愚痴を聞きながら学校へ向かった。

今日は柊と一緒に歩いてきたので予定より5分ほど遅れた。練習といっても体を少し動かす程度なので、準備には10分もあれば十分

だろう。

・・・そろそろ7時になる。まだ柊妹は来ない。

「遅いな彩夏ちゃん。」

「まったく、何やってるのかしらあの子。」

とその時。

「すいませ〜ん！遅れちゃいました〜！」

と息を切らしながら彩夏ちゃんがグラウンドにやってきた。

この子が柊彩夏^{ひいらぎあやか}。柊の妹である。柊と比べ背はそこまで高くはない。

しかし、彼女の陸上のセンスはかなりのものである。高校から始めたそうだが、呑み込みが早くフォームもかなり綺麗である。実は高校に入るまで彩夏ちゃんのこととは知らなかった。柊から引きこりの妹がいるとは聞いていたが・・・

（今度の記録会が楽しみだなあ〜）

などと思っていると、

「もうっ、だから今日の準備は昨日じゅうにやりなさいって言ったのよ。」

「だからって置いてくことないじゃんか〜。ぶつぶつ・・・」

柊姉妹の口喧嘩が始ってしまった。

（はあ〜、何やってんだか）

「はいはい、もう集合してもいいわよね？」

と佐藤キャプテンが割って入った。うちのキャプテンは女の人である。少し珍しいと思うが、まとめるのが上手な人のほうがキャプテンに向いているということ、佐藤キャプテンが選ばれたのである。「え〜、再来週の土曜日に記録会があります。わかっていると思うけど調整は無しだからね。記録会は練習のつもりでやるように。で、一年生は大会の雰囲気慣れといてね。県の大会は記録会なんて比じゃないくらい緊張するんだから。」

俺は去年のことを思い出していた。

（そういえば高校総体の前に国体の予選があったな。社会人や大学生も参加する大会だ。空気がピリピリしていて、その場にいるだけ

で気が滅入りそうだった。」

「それじゃ、練習始めます!」

そのキャプテンの言葉を合図に、

『お願いしまゝす!』

と一斉に挨拶した。

『お疲れ様でした!』

ふうと息をつき時計を見る。時刻は8時20分。朝のホームルームまで15分ほど時間がある。この間に着替えを済ませて各自教室へと赴く。

「じゃあ藤井君、先に行ってるね。」

「おう」

実は柊とは同じクラスなのである。ついでに言うと小野坂も同じクラスだ。

着替え終わり自分の教室へと向かう。

「藤井センパイ、お疲れ様です。」

言うだけ言って柊妹は走り去って行った。

(なんか忙しい子だな)

自分の教室に入り窓際の一番後ろへと向かう。クラス替えが終わりしばらくは出席番号順に座るのが一般的だが、うちの担任は

「出席番号順だと不公平だろ」

と言ってくじ引きで席を決めた。まさかの出来事だったがこの特等席を獲得できたのでラッキーである。

「ガタッ」

隣の席に小野坂が座った。何の因果か俺の隣の席は小野坂なのだ。今まで小、中学校と同じクラスになったことがあるのは小学校の時の1回だけで隣の席になることも無かった。だが高校に入り2年連続で同じクラスになったのだ。そして今年ついに隣の席になってし

まった。別に嫌っているわけではないが、何んともなく気まずい。

「優希、おはよっ」

「あつ、彩音おはよう」

先に来ていた柊が小野坂に声をかけていた。チラッと柊がこっちを見たが特に何も言わなかった。

そうこうしているうちに先生が教室に入ってきてホームルームが始った。

「今週末からゴールデンウィークだがあまり羽目を外すなよお。」
あと宿題も結構出ていると思うのでしっかりやるように。」

（そういえばもうそんな時期か。この一カ月は早かったなあ。）

ホームルームが終わり教室の中がザワついてきた。

「はあゝ」

また一週間授業があるのかと思うとため息が出る。

『キーンコーンカーンコーン』

4限目の数学が終わった。やっと昼食にありつける。ほとんどの人が弁当なのだが、この学校には購買がありそこで買って食べる人も結構いる。俺はいつも弁当ですましている。

『ガヤガヤ』

おしゃべりを楽しみながら食べる人や、一人でもくもくと食べる人もいる。俺はどちらかというの後者である。この特等席で静かに食べるのが良いのだ。

「おい友喜い、いるかあゝ。」

はあゝ、うるさいのが来た。

この男は西山晃^{にしやまあきら}。高一の時に同じクラスになりそれ以降何かと付きまとってくる。親友では無いが一応友達である。サッカー部に所属していて自称次期エース候補らしい。しかしこいつの練習風景を見ていると、結構な腕前だと素人が見てもわかるので案外本当なのかもしれない。

「何だよ自分の教室で食えよ。」

「まあまあいいじゃないか、俺とお前のなかだろ。」

ちなみに俺のクラスは1組でこいつのクラスは5組である。わざわざ4組分またいでここで食うのだ。とかなんとか言いながら毎回一緒に食べている俺である。

「じゃあな。」

「おう」

食べるだけ食べて晃は帰って行った。

（ふうそろそろ5限目が始まるな・・・なんで数学が2限連続であるんだよ。）

愚痴りながら教科書を用意した。

『キンコンカンコン』

「んっはあく、やっと終わった」

伸びをしながら授業に対する不満を言う。

（全然理解できなかった・・・高校に入ってから数学のレベルってかなりあがったよなあ。）

まあ今日の授業は無事に終わったので部活に行くことにした。

「ふっ、ふっ、ふっ」

ここは校舎と校舎をつなぐ渡り廊下である。東側は俺たちのクラスがある校舎である。そして西側は音楽室やら科学室などそういう移動教室で使う教室がある校舎である。西校舎は文化部がよく使っている。そして下駄箱が東校舎にあるので文化部の人たちが帰るときはこの渡り廊下を通って行くのである。でもって俺たち陸上部はなぜかこんなところで筋トレをしている。この大人数で一斉に筋トレをしているのだ、俺たちも文化部の人たちも気まずいことこの上ない。

「はっ、はっ、はっ」

「あつ優希、お疲れえ」

ふいに柊が言った。よくよく考えれば小野坂も文学部なのでこの渡り廊下を通るに決まっていたのだ。しかし俺は反射的に振り返ってしまい小野坂と目が合ってしまった。

「お疲れ」

と言わざるを得なかった。

「お疲れ」

小野坂も気まずそうに返してきた。

「・・・・・・」

「何でそこでこんな空気になるの」

とあきれ顔で柊に突っ込まれてしまった。何でもなにもなってしまうものはなってしまうのである。

『お疲れ様でした！』

（ふう〜やっと終わった。そういえば今日は見たいテレビがあったな。早く帰ろうっと。）

自転車置き場で自転車のカギを捜しながらそう思っていたら、

「藤井センパ〜イ！お疲れさまで〜す！」

と言って柊妹が走り去って行った。

（今朝もこんな感じだったよな・・・元気だなあ。）

なかなかカギが見つからない。

（あつれえ〜どこにしまったかなあ）

4、5分間必死になって探した結果、カバンの底にある下敷きの裏に隠れているのを発見した。

「あれ？藤井君まだいたの？」

後ろから柊の声がした。

「ああ、ちよっと自転車のカギを捜してて。」

「ふうん、で、見つかったの？」

「今ちようど見つけたところ。」

手に持っているカギを見せながら言った。

「そっか、じゃあ一緒に帰ろ。」

「ああ、いいぜ。」

というわけで柊と一緒に帰ることになった。

帰り道の途中で

「そういえば藤井君、今年もあれやるらしいよ。」

「？、あれって？」

「来年度入学希望者のパンフレットの写真。」

（ああそういえば去年そんなことしてたなあ。）

この学校のパンフレットの裏には、部活動における成績優秀者の写真がでかでかと載るのだ。去年は確か佐藤キャプテンが載ってたよな。

（しかしあれは恥ずかしいよなあ。）

知っている人は知っているとと思うが陸上競技のユニフォームかなりきわどいのだ。試合のときは皆が同じような格好をしているので何ともないのだが、学校であれを着るとかなり恥ずかしい。

「でねっ、今年の候補者はまたまた佐藤キャプテンらしいの。」

「へえそうなんだ。でもそんな情報どこから仕入れたんだ？」

「生徒会に知り合いがいてね、その子から聞きだしたんだ。」

「ふうん。」

「それから藤井君も候補者みたいだって。」

「へえ………はあっ!？」

サラっと言われたので危うく聞き逃すところだった。

「がんばってね。」

満面の笑みでそう言って柊は去って行ってしまった。

（……おーいどうすんだよ。）

しばらくその場で固まっていたが、どうしようもないので家に帰ることにした。

いつもの1日(後書き)

どうも初めて投稿させていただけてらいと申します。ちゃんと書けているか不安ですが読んでくれるとありがたいです。よろしくお願
いします。

GWの1日

『・・・ピピピ・・・ピピピ・・・ピピピピ』

(んゝうるさい！)

『バコッ』

このうっとうしい音の元凶をぶっ叩いて止めた。

(休みの日くらい静かに寝かせてくれよぉ。)

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・ガバッ』

一度起きたら目が冴えてしまった。慣れというものは怖い。一度この時間に起きると自動的に目が覚めるようになってしまったようだ。とりあえず居間に行くとしよう。

『トントントン』

規則正しい包丁の音が台所から聞こえてきた。

「あ、おはよう」

「おはよう」

日曜日だというのにこんなに朝早くから朝食を作っている。うちの親もこの六時起きに慣れてしまったようだ。何だか申し訳ない。

朝食を食べ終わり自分の部屋でゴロゴロしていた。

(12時まで結構時間あるな。どうしよう・・・。)

今日は小野坂、柊、西山の4人で遊ぶことになっている。なぜこのような組み合わせなのかというと、おとといの5月1日にさかのぼる。

5月1日昼休み教室にて

「ねぇ藤井君？今度の試合のことで聞きたいことがあるんだけど。」

「おう、何だ？」

教室の片隅で昼飯を食っている俺に柊が訪ねてきた。隣にはなぜか小野坂がいる。別にこの二人が一緒にお昼を食べているのは不思議ではないのだが、なぜこのタイミングで柊は話しかけてきたのだろう。

「うん、あのさ・・・」

「友喜いゝ！いるかあゝ！」

バッドなタイミング入ってくる西山晃。

「・・・なんだよ？」

「今度のゴールデンウィークどっか遊びに行こうぜ！」

「いやゴールデンウィークはずっと部活だって。」

「さすがに日曜日は休みだろ？」

「まあそうだけど・・・」

「じゃあ、日曜12時半駅前に集合な！」

帰り際柊と小野坂を見て

「2人も来る？」

「えっ？あのお・・・」

戸惑う二人。それもそうだろう、お互い顔は知っていても友達というわけではないのだから、突然誘われても困る。

「よしっ、じゃあ決定ね。」

いやまだ答えてないですよ。というか今の返答でよく「行く」と捉えたな。

「じゃあなあゝ。次、移動教室だから帰るわ。」

勝手に決めて、勝手に去って行く西山晃であった。

別に俺に断る理由もなく、柊はなぜか乗り気であった。小野坂はそうでもなかったが、柊が行くとなれば一緒についてくるだろう。

というわけで昼までのこの時間をどう過ごすか考えていた自分である。

（そういえばやりかけのゲームがあったな。それでもするか。）
テレビの横に積んであるゲームの山から探し出し起動した。このゲ

ームは設定や話の流れは良かったのだが、システムが手抜きといていいほどダメなRPGなのである。俺はRPGは基本話が良ければだいたい最後までクリアするのだが、これはロード時間が長いということで諦めてしまった。

メニュー画面を開くのに5秒もかかってしまう。しかもメニューを開いた後アイテム画面やステータス画面にいくのにも数秒かかるのだ。RPGというのはメニュー画面を開いて閉じてを結構繰り返すので、ここに時間をかけるとかなり萎える。

さらに戦闘システムもビミョーで、これなら普通のコマンドバトルで良かったのではないかと思うものである。

（まあ今日は時間もあるしのんびりやるかあ。）

「ふう、そろそろいい時間だな。」

昼飯を食べ終えて、ふと時計を見る。11時50分、駅までは自転車で20分ほどで着く。

（少し早く行って向こうで待つか・・・）

「じゃあ、行ってきます。」

「はい、行ってらっしゃい。」

駅へ行くためにはとりあえず学校へと向かわなければならぬ。といってもあの心臓破りの坂道を上る必要はなく、回り道を使っていくルートを通って行く。途中でこの道は二股に分かれていて右へ行くと学校、左へ行くと駅前へと続いている。今日の目的地は駅前なので左へと曲がる。後はこの道を延々と進んでいくだけだ。

駅が近づくにつれ、少しづつ道が広くなっていき道沿いに色々な店が出てきた。駅の近くというのはどんなどころでも栄えているのだろう。ここは結構田舎なのだが駅前はそれなりに都会っぽく見える。

駅の駐輪場に自転車を置き、待ち合わせ場所で皆を待つ。

「・・・・・・」

数分後最初に来たのは終だった。

「藤井君、おはよ！」

「おう、おはよう。・・・あれっ彩夏ちゃん？」

「おはようございます、藤井センパイ！」
「ぺこっとお辞儀する柊妹。」

「せっかくだから連れてきちゃった。」

別に4人でなければならぬことはないのでは問題ないだろう。

「ああ、全然問題ないぜ。」

「よろしくお願いしま〜す！」

柊姉妹が来て間もなく小野坂がやってきた。

「優希っ、おはよ。」

「おはよう彩音、彩夏ちゃんもおはよう。」

「はい！おはようございます。」

一通り挨拶を終えたが、俺と小野坂の間には気まずい空気が流れている。いつものことなので柊も気にしていなかったが、この状況が初めての彩夏ちゃんは少し戸惑っている。

（なんだか悪いことをしている気分だ・・・）

12時30分、言いだした本人西山晃がまだ来ない。

「ったく、地元のやつが何で一番遅いんだよ。」

地元であると時間にルーズになってしまうのは何となくわかるが、言いだしっぺなのだからもう少し早く来てほしいものだ。

「へえ〜、西山君ってこの辺りに住んでるんだ。」

と柊が言った。

「ああそっか、皆知らないよな。あいつの家、地味に金持ちなんだよ。」

一応この都会っぽいところに住むにはそれなりにお金が必要なのだ。親がどっかの会社の課長だとかなんとか、昔言っていた記憶がある。

「いいなあ〜こんなところに住んでるなんて。」

「だよ、私たちがここに来るとなると結構時間かかるからね。い

つでも買い物したり、お茶したりできるっていいよね。」

「だよねえ。」

柊と小野坂が羨ましそうに話している。

駅前は俺たちの高校だけでなく、他の近くの高校生たちも放課後によく寄り道をしている。しかし柊も小野坂も部活しており、帰りに寄って行こうというのがなかなかできないのだろう。

「彩夏ちゃんもよくここに来たりするの？」

会話に入ろうとしない彩夏ちゃんに訪ねた。

「あつ、いえアタシはあんまりそういうの興味ないんで。アタシ結構インドア派なんですよお。」

「そ、そうなんだ。」

（インドア派って・・・）

普段の彼女を見ていると思いつきアウトドア派な気がするのだが。

12時45分

「おーい！」

西山晃がやつと来た。

「わりいわりい、ちよつと準備に時間がかかった。」

「なんだよ、準備って？」

「んゝまあ、いろいろだよ」

晃の頭には寝癖がついている。

「ふゝん寝坊か。」

「な、何言ってるんだよ、んなわけないだろ。俺は今日のために色々プランを考えてたんだよ。」

「で、そのプランって？」

「えっ？えゝつと・・・」

晃は必死に考えている。数秒後。

「よしっ、カラオケに行こう。」

まあ、よくあるパターンだ。俺たちに反対する奴はいなかったので、カラオケに行くことになった。

「あれっ？その子って・・・？」

晃が柊妹を指さして聞いてきた。二人が初対面であることを忘れていた。

「ああ、彼女は柊の妹なんだ。」

「はじめまして、柊彩夏です。よろしくお願いします。」

ペコッと頭を下げる柊妹。

「お、おう、よろしくな彩夏ちゃん。そっかそっか、柊さんには妹がいたのかぁ・・・。」

うんうんと頷く晃。何に納得しているのかよく分からなかったが、とりあえずカラオケへと向かうことにした。

駅前には大きなビルが建っている。このビルには1階に食料品と食べ物屋さん、2階に衣服や靴など、3階に電子機器、4階にゲームセンター、5階に映画館、と色々詰め込んだビルなのである。俺たちは4階のゲームセンターに向かった。ここのゲームセンターの横にカラオケがあるのだ。

「じゃあこの4時間のコースで。」

「わかりました。では403のお部屋へどうぞ。」

と言ってマイクやらなんやらを渡された。部屋について見てみると結構広かった。

「へえ、案外広いじゃん。」

「あっ見て彩音これってたぶん最新のやつだよ。」

「えっホント？」

柊と小野坂は機械をピコピコいじっている。

「おっしゃー！トップバッターは俺だぜ！」

さっそく晃が曲を入れて歌い始めた。機械いじりをしていた二人も席に着き晃の歌を聴き始めた。部屋中には何とも不思議な歌声が響き渡っている。晃とは何度かカラオケに行ったことがあるが、こいつのは歌というより騒音である。人間ここまで下手に歌うことがで

きるとは思わなかった。

「ふう〜、やっぱ叫ぶとすっきりするな。」

（カラオケで叫ぶなよ・・・）

晃が歌い終わりマイクを置く。皆、呆然としている。初めてこの歌で無い歌を聴けばそうなるだろう。

『♪〜』

次の曲が流れ始めた。

「あっ、次私だ。」

柊がマイクを取って歌い始める。聴いたことがあるような曲が流れている。しかし他の3人は聴いたことも無いような素振りを見せている。

（何だっけこれ。どこで聞いたんだ？）

サビの部分でふとある映像が頭に浮かんできた。

（こ、これはまさか・・・）

柊が歌い終わり皆に聞こえないように聞いてみた。

「柊ってもしかしてアニメ好き？」

「え？ 藤井君今のわかったんだあ〜」

と嬉しそうに聞いてきた。そうこの曲はアニソンなのである。しかもこれはゴールデンでは無く深夜にやっているアニメなので、アニメに興味があればまず聴くことも無いだろう。なので他の3人も聴いたことが無かったのだ。そして俺がこの曲を知っているということはこのアニメを知っているというのである。皆には言っていないが俺は結構アニメを見る人である。

「まさかこんな身近に仲間がいるとは・・・」

「だよねえ〜、私カラオケ行った時いつもポカンとされるからつまらなかったんだよねえ〜。」

（普通アニソンは分からないだろ・・・）

「あっ次優希の番だよ。」

「うん。」

柊から小野坂へとマイクが渡る。合唱部の歌声は練習中によく聞こえてくるが、小野坂自身の歌声を聴くのは初めてである。いや子供のころに何回か聴いたことがあった。将来は歌手になると何度も聞かされていたのを思い出した。

『♪～♪～』

(う、うまい。)

小野坂の歌声がこんなにもきれいだとは知らなかった。彼女の歌声はとてもやさしく、つい聴き惚れてしまった。

「ほお～さすが合唱部エース、ほれぼれする歌声だよ。」

小野坂が歌い終わり柊が絶賛していた。

「ありがとう彩音。でも私なんかまだまだだよ。」

「いやいや小野坂さんの歌は最高だった。俺が保障してやる。」

いやお前に保障されても困る。しかし晃ではないが本当に小野坂の歌は最高だった。これなら本当に夢を叶えてしまうかもしれない。

「あっ次アタシの番ですう。」

そう言ってマイクを片手に彩夏ちゃんが立ち上がった。

(まさか彩夏ちゃんもアニソンなんてこと無いよな・・・)

「すう～・・・」

彩夏ちゃんは思いつきり息を吸い込んだ。そして・・・

「うおるうああ～!!!!」

部屋中に爆音が響き思わず耳をふさいでしまった。彼女の声とは思えない声が鳴り響く。

(うわっ！体中が振動してる。もしかして彩夏ちゃんも音痴・・・?)

いや音痴ではない。これはいわゆるヘヴィメタである。まさか彩夏ちゃんがヘヴィメタ好きとは思わなかった。人は外見で判断できないということを身をもって知った。

「ふう、やっぱりカラオケはすっきりしますね。」

と笑顔で語る柊妹。俺と小野坂は目が点になっている。

「この子ね、こういう歌大好きなの。」

「そ、そうなんだ・・・。」

柊は聴きなれているのか、平然としている。

「いやあ、最高。彩夏ちゃんの声が胸の奥に響いてきたよ。」

「そ、そうですか。ありがとうございます。」

いやお前と一緒にするな。若干似ている感はあるが彩夏ちゃんのと晃のは全くの別物である。

その後俺たちは4時間延々と歌い続けた。俺と柊は皆がついて来られない領域（アニメ界）で勝手に盛り上がっていた。小野坂も柊妹も晃もある意味ついていけないレベルであり、ただの自己満足大会になっていた。

「いや、久々に盛り上がったぜ。」

「わが道突き進むって感じだったけどな。」

会計を済ませ外に出る。

「ん、まだ5時かあ。夕飯にはまだ早いよねえ、どうしようかな？」

「私は特に希望は・・・。」

「そっか、私も特に何がしたいって訳でもないし・・・。」

柊と小野坂は特に希望はないようだ。

「こういうときのゲーセンだ。友喜、久々にあれやろうぜ。」

と晃の指さす方には、少し前に流行った格ゲーがある。とは言ってもその人気は今も健在で格ゲー界では最もメジャーなゲームである。

「おう、いいぜ。」

『チャリン』

100円玉を入れてゲームを起動する。

「負けた方がおごりな。」

「了解。」

このゲームはキャラクターを3人選んで順番に闘っていくゲームである。負けた方は次のキャラクターに入れ替えて、最終的に3人目が負けた方が負けとなる。

「よしいくぜ！」

『ガチャガチャ』

「あっ、くそっ！」

『ガチャガチャ』

「やるな友喜！」

『ガチャガチャ』

「ぬうおあゝ！」

晃の悲鳴が上がる。勝敗は俺が1体残した状態で勝ちだった。

「くそゝ友喜いつの間にこんなに腕を……。」

「へへっ悪いな。」

実はこの格ゲーの家庭用を俺は持っているのである。しかも格ゲー専用コントローラーもあり、暇があれば練習していたのでいつの間にやら上達していたのである。

「あのおゝアタシもやっていいですか？」

意外な人が声を上げた。彩夏ちゃんである。

「えっ！？、彩夏ちゃんこのゲームしたことあるの？」

「あっ、はい。」

「よし、じゃあ俺と勝負だ！」

（おい、いきなりかよ！）

『チャリン』

ということで晃と彩夏ちゃんの戦いが始まった。

『ガチャガチャ』

「なっ！」

『ガチャガチャ』

「くっ！」

『ガチャガチャ』

「ぬうおお〜！」

『ガチャガチャ』

「なっ、なにい〜！お、俺が負けた。」

結果は彩夏ちゃんが2体残し、つまり3縦で勝利したのだ。晃も最初は手加減していたが、すぐに彩夏ちゃんの力に気づき本気を出していた。しかしその本気の晃でさえ歯が立たなかった。

「な、なあ彩夏ちゃん何でこんなに強いんだ？」

柊に問いかける。

「さあ？でも昔部屋に閉じこもってこのゲームをしてたよーな・・・」

まさか彩夏ちゃん引きこもり説が本当だったとは。

「藤井センパイもやりましょ〜。」

「えっ、あ、ああ・・・。」

まずい。これは本気でやっても負けるかもしれない。

「いきますよ！」

『チャリン』

『ガチャガチャ・・・ガチャガチャ・・・ガチャガチャ』

ま、まずい、非常にまずい。俺と彩夏ちゃん共に残り1体だが、俺はライフが半分、そして彩夏ちゃんはライフMAX。

（ここは一か八かの賭けにでるしかない！）

『ガチャガチャ』

（よしっ今だ！）

『ザシュ、ザシュ、バババババ！』

すきを突いて放ったレベルMAXの超必殺技がクリーンヒットした。

「あっ！・・・やりますねセンパイ。」

これで彩夏ちゃんのライフは4分の1になった。とは言ってもまだ勝負は分らない。

『ガチャガチャ』

「なっ！」

しまった対空技を見事にかわされた。いや「かわされた」というより「出させた」というのが正しいだろう。あのようなフェイントをここで使ってくるとは思わなかった。そして隙だらけの俺に超必殺技が繰り出される。

『ドドドドド！』

まずいライフが強キック1発で終わってしまうほどわずかだ。対空技で中に浮いた状態で、しかもレベル1の超必殺技でなければ俺の負けだった。しかし彩夏ちゃんもたいして俺と変わらないライフだ。
(まだいける！)

『ガチャガチャ』

『ザっ！』

彩夏ちゃんが宙に跳んだ。

(どうする！？)

俺はすかさず後ろへ回り込んだ。

「あっ！」

よし！俺の読みが当たった。

『バシュ！・・・KO！』

俺の勝ちだ。もし彩夏ちゃんがジャンプ攻撃を出していなかったら隙を突かれて負けていた。そして俺が回り込みをせずガードしていたら押し切られていただろう。

「ああゝ！・・・さすがですセンパイ、アタシの負けです。」

「いやいや俺もかなり危なかったよ。」

かなり白熱したバトルだった。俺もかなり練習しているつもりだったが、世界はまだまだ広いということを知った。

『パチパチパチ』

ふと俺たちの周りを見ると数人のギャラリーができていた。

「すげーよお前ら。今度俺とバトルしてくれよ。」

と知らない男に声を掛けられてしまった。「俺も俺も」と対戦を申

し込まれる。なんだかめんどくさい状況になってきた。

「まてまて、こいつらと勝負したいならまずはこの俺を倒してからにしろ！」

「……」

一瞬辺りが静まり返った。

「誰、お前？」

「ん？俺か？俺は……」

「あゝ、すいません俺たちちょっと急いでるんで……」
柊姉妹と小野坂を連れて逃げる。

「あつ、ちよつ、まってくれよう！」

『はあ、はあ、はあ』

一気に1階まで駆け降りてきたので皆息を切らしている。

『ダッダッダッ』

晃が降りてきた。

「ちよつ、はあ、なんで、はあ、置いてくんだよ、はあ。」

息絶え絶えに文句を言う晃。

「お前があんなこと言うからだろ。めんどくさい状況をさらに悪化させてどうするんだよ。」

「いやあゝあんなセリフを一度言ってみたいと思ってたんだよ。」

「思ふなっ！」

「まあまあその辺にしといてさあ、で、どうする予定より早く来ちゃったよ。」

柊にそう言われて時計を見てみるとまだ5時半だった。今いる場所は当初予定していたレストランの前である。レストランの看板には6時開店となっている。

「どうする？ここでちよつと待つか？」

「うんいいよ、私は賛成。」

「じゃあ私も……」

「アタシも賛成でゝす。」

「俺は・・・」

「じゃあここで待つってことで。30分くらいすぐだろ。」

「っておい！俺を無視するな！」

「いや、お前の意見を聞くと面倒だから。」

「なんだよお、いいじゃないかぁ俺とお前の仲だろお。」

変な声を出しながらすがりつく晃。

「や、やめろ、気持ち悪い。」

『ドンッ』

軽く晃をけり飛ばす。

「ぐすん・・・」

（何だよぐすんって・・・）

その後このくだらないやり取りで結構時間が過ぎ気づけば6時になっていた。

案内されたテーブルに座りメニューを見る。

「さて、どれにするかな？」

「私はもう決まってるよ。」

「早いな柊。」

「うん、ここに来たときはいつも同じやつ頼むんだ。」

「へえ、そうなんだ。どんなの？」

「このドリアだよ。これがまた美味しくてさ、一度食べたらはまっちゃうよ。優希も頼む？」

「うーんそうしよっかな。」

「アタシはこのスパゲティにします。」

「スパゲティかぁ。」

メニューのスパゲティ覧を見る。かなり種類がありどれも美味しそうだ。

「よし、じゃあ俺はこっちのスパゲティで。」

「んんん・・・よしっ決めたこのスペシャルハンバーグセットにする！」

隣でずっとうなっていた晃が叫んだ。

「よし全員決まったな。」

『ピンポン』

呼び出しのベルを鳴らす。

「おい、何でそんなに素っ気ないんだ。」

「いやめんどくさいから。」

「ええ、俺とお前の・・・ふぐつ。」

口をふさいで黙らせる。

「もうそれはいい！」

7時半、なんやかんや話しながら食べていたのでそれなりに時間が経っていた。会計を済ませ外に出るとすっかり暗くなっていた。

「ふう、食った食った。」

「ん？外は結構寒いな。」

「だね、この時期は昼は暑いけど夜は寒いからね。」

上着を着てきて正解であった。

「クシュン！」

隣で小野坂が大きなくしゃみをした。

「優希、大丈夫？」

「うん大丈夫・・・クシュン！」

本当に大丈夫なのだろうか？

「よし、じゃあ今日はこれで解散だな。じゃまた学校でな！」

そそくさと去っていく晃であった。

「・・・俺たちも帰るか？」

「だね、風邪ひかないうちに帰ろっ。」

残った4人は帰る方向が同じなので一緒に帰ることになった。

「じゃあね。今日は楽しかったよ！」

途中でY字路にさしかかった。左へ行くと柊家へ、右へ行くと藤井家、小野坂家がある。

「ああ、彩夏ちゃんの意外な一面も見られたしな。」

「え？そ、そうですか？」

少し照れながら答える彩夏ちゃん。

「また勝負しような。」

「あつ、はい！今度は負けませんよ！・・・それじゃあおつかれさまです。」

「おう、お疲れ。」

とお互いに手を振りながら答えた。運動部どうしだと何故か「お疲れ様」と言ってしまう。これも口癖になってきてしまっている。

（まあ実際いろんな意味でつかれたわけだが・・・）

「じゃあね。ばいばい！」

「うん、ばいばい。」

終姉妹に別れを告げ坂道を上り始める。行きは下りなので楽だが、帰りは上りになっているので辛い。

「歩いて行くか？」

「え？あ、うん。」

俺一人ならさっさと上っていくのだが、今日は隣に小野坂がいる。女の子がこの坂を自転車で上るのは少し辛いだろう。

「・・・」

「・・・」

会話が無いとても気まずい雰囲気だ。

「クシュン！」

「大丈夫か？」

「うん・・・クシュン！」

「・・・」

押していた自転車を止め上着を脱いだ。そして脱いだ上着を小野坂の前に突き出す。

「ほらっ。」

「え？いいよ・・・」

「良くないだろ。どうせ明日も部活あるんだろ？風邪ひいたら辛いだろ。」

と言って無理やり小野坂に上着を着せた。

「・・・ありがと。」

「ああ・・・」

「・・・」

また沈黙が流れた。その時ふと何かを思い出したような気がした。

「あっ！」

「なに？」

「デジャヴ・・・じゃないな。えーと何だっけ？」

必死に思い出そうとするが、なかなか思い出せない。

「？、何の話？」

「いや昔似たようなことがあったようななかったような・・・覚えてるか？」

思い出せそうで思い出せない。このモヤモヤした感じが気になって小野坂に聞いてみた。

「ふうくん、覚えてないんだ。」

「え？お前覚えてるのか？」

「うん。」

「どんなだっけ？」

「教えない。」

「何で？」

「嫌だから。」

「嫌だからって・・・教えてくれてもいいだろ。気になって眠れないうって。」

「・・・あんな恥ずかしいこと教えたくないに決まってるじゃん。」
小声でぼそっと小野坂がつぶやいたが、俺には聞こえなかった。

「え？なんて？」

「何でもない！」

そう言ってツカツカと歩いていってしまった。

そうこう言っているうちに家の前まで来てしまった。

「くそっ思い出せない。」

「まだ言ってるの?・・・じゃあこれありがと。」

そう言っただけ俺の上着を返した。

「おう・・・あつ!」

その時ポンツと頭の中にある映像が浮かんだ。

「な、なに?」

そこには小さいころ（おそらく幼稚園ぐらいの頃だろう）の小野坂がずぶぬれで立っていた。

「ふっ、ふふふふ、あははははは。」

笑いがこみあげてきて、思わず笑ってしまった。

「あはは、そりゃ思い出したくないよなあんなこと、ははは。」

ふと小野坂を見ると顔が真っ赤になり、ふくれあがっていた。

「最低・・・」

「い、いや悪い。でも・・・ふふふ、あははは。」

「・・・帰る。」

家のドアを開けて中に入っただけこうとする小野坂。

「・・・じゃあな、また明日。」

俺は少し昔のことを思い出しながら言った。

「え? あ、うん、また・・・明日。」

（「また明日」か。最後に小野坂に言ったのはいつだったかな。）

そんなことを思いながら俺は家に入った。その日俺は少しだけ昔に戻ったような気がした。

ハーレム？な1日

5月21日木曜日 放課後 生徒会室にて

俺の左には佐藤キャプテン、右には小野坂がいる。目の前には生徒会長の姫川美羽先輩ひめかわみうがいる。会長はどこぞの有名企業の社長令嬢でいかにもといった雰囲気を漂わせている。こんな絵に描いたような人が現実存在しているとは思わなかった。というかなぜそんな人がこんな高校にいるのだろうか。

そしてその会長の横には生徒会書記兼写真部部長の佐々木健太ささきけんたがいる。こいつは隣の2組のやつで俺と同年である。今回パンフレットの表紙の写真を撮る係である。

「例年この来年度入学希望者用のパンフレットには、昨年度の部活動における成績優秀者が1名載ることになっていました。しかし昨年のあなたたち3人は著しく成績が良かったので、3人ともモデルとして採用しました。」

ということらしいので俺たち3人は生徒会室に集められた。

「勝手に決めちゃっていいんですか？」

「ちゃんと先生方には話を通しておきました。それに必ず1人でなければならぬ、というわけではありませんので。」

「はあ、でも何で小野坂がいるんですか？」

「む、私も一応コンクールで金賞取ってるんだけど。」

小野坂がにらみながら言ってきた。

「そ、そうなのか？わ、悪い、知らなかった。」

前にカラオケで小野坂の歌声を聴いた時はかなり上手いと思ったが、まさかそんなにすごいとは知らなかった。

「ふんっ。」

そっぽを向く小野坂。

「で、美羽どうすんの？うちと藤井は同じ陸上部やけど、小野坂は合唱部で全然合わんと思うけど。」

急に佐藤先輩が関西弁でしゃべりだした。

「へ？」

「ん？どうしたん藤井。」

「え？いや、あの・・・」

言っているのかどうなのか分からず口ごもってしまう。

「????」

「ふふっ、美雪、素が出ていますよ。」

美雪というのは佐藤先輩の名前である。この人を名前で呼ぶ人はま
ずいない。だいたい佐藤キャプテンか佐藤先輩である。陸上部の同
期の人でも佐藤さんと呼ばれているくらいだ。

「あっ。」

自分が関西弁をしゃべっていたことに気付き、はっと口をふさいだ
が発した言葉は戻って来ない。

「実は美雪は関西出身なんですよ。」

「関西じゃないって。・・・まあどっちかっていうと関西よりやけ
ど。」

「へえーそうなんですか初耳です。」

「まあ言っていないからな。うちの方言は東の人が聞くと関西弁に聞
こえて、西の人が聞くと関西なまりの入った変な言葉に聞こえるら
しいんだ。だからなるべく標準語でしゃべるようにしとったんやけ
ど・・・。」

「ぼろが出ちゃいましたね。」

「あんたとしゃべる時は何故かでちゃうんだよね。」

ということは佐藤先輩は引越してきたということなのだろうか。

ふと疑問に思い聞こうとしたが、

小野坂にさえぎられた。

「あのゝ結局どうすればいいんでしょうか？2人はユニフォームを
着て撮るんですね？」

「いや今回は大丈夫ですよ。」

サッと佐々木健太が入ってきた。

「今回はみなさん制服を着たまま撮らせていただくので。一応柊さんに伝えておいたんですけど、伝わっていなかったみたいですね。」なるほど柊の言っていた知り合いってのは佐々木のことだったのか。というか肝心なところを忘れないでくれ柊。てっきりあの恥ずかしい格好で撮るのかと思った。

「というわけです。このまま学校で撮っても構わないのですが、なんだか味気ないので今回は特別に撮影現場を設けました。」

「ふうん、で、その撮影現場っていうのはどこなん？」

「沖縄です。」

『へ？』

綺麗にへの音がかハモった。

「どうせならもっと派手にやろうとハワイやグアムも考えたのですが、そうなると学校を休まなくてはいけなくなるのでこれで我慢してください。」

おいおいどこのアニメ界の話なんだ。こんな展開ないだろ普通。というかこの人の発想がもうすでに現実離れしている。

「・・・本当に沖縄に行くんですか？」

一応確認をとってみた。

「ええ本当ですよ。今度の土曜日に出発するので、皆さん準備しておいてくださいね。」

「今度の土曜ってあさってやんか！ってか部活どうすんの！？」

「それは顧問の先生方に了承を得ていますので大丈夫です。」

「いつの間に・・・。」

なんか一気に話がとんできたな。

「では土曜日にまた会いましょう。」

到着したのは昼の2時過ぎだった。俺たちの住んでいるところからはおよそ1時間で着くことができた。沖縄に来たのは初めてだったがこんなにも早く着くとは思ってなかった。というわけで俺たち5人プラス1人は沖縄にやってきた。プラス1人というのは柊である。

マネージャーだからとか言っているが、本人は遊ぶ気満々である。
「まさか修学旅行前に沖縄に来るとは・・・ぬおっ！あつつ！！」
飛行機を降りたときの温度差がかなりあったので驚いた。

「さすが沖縄だね。5月なのに真夏日並だよお。」

柊はすでに夏の格好をしている。俺も早くこの暑苦しい服を脱ぎたい。

「ホテルを予約してあるのでまずはそちらに向かいましょう。」

「で、でかい・・・」

のどかな町中にひととき大きな建物が立っていた。

「うわぁーたかそぉー。さすがお金持ちは違うね。」

「だねー。」

「ホントにうちらがここに泊まっていいいのか？」

皆この巨大な建物を見上げながらそれぞれの感想をもらしていた。

「さっそくですけど、荷物を置いたらすぐに撮影するんでよろしく
お願いします。撮影はあそこでするんで。」

とホテルの向かいにある浜辺を指さしながら佐々木が言った。

「おっ、いいねえー。やっぱ沖縄に来たからには海に行かなきゃねえー。」

「海かぁ、ねえ彩音、撮影が終わったら一緒に泳ご。」

「もちのろんだよ！なんたってこっちがメインだからね。」

違うでしょ柊さん。あくまで撮影がメインです。

てことで浜辺にて

この暑いで俺たち3人は何故か冬用の制服を着ている。パンフレットが出来上がるのが、ちょうど秋から冬にかけてなので冬服で撮影するらしい。てかそれならこの南国で撮影していること自体おかしくないか。

「くそっ、暑い。」

「あつつい！」

「暑い……。」

額から流れる汗をぬぐいながら皆で佐々木に抗議する。

「まあまあ、すぐに終わるんで我慢してください。」

数分後

『カシャ……カシャ……』

「いいですねえ。3人ともいいですよ。」

常夏の楽園、エメラルドグリーンに輝く海を背景に、冬服を着る男1人と女2人。この不思議な光景は嫌でも目に入ってくる。幸い、まだシーズン前なので人はそれほど多くはなかったが、それでも視線が痛い。

『カシャ……カシャ……』

「ハイ、オッケーです。お疲れ様でした。」

本当にすぐに終わってしまった。これで本当によかったのだろうか。まあなにはともあれやっとこの暑苦しい制服がぬげる。

「よおし、今日は泳ぐよ。」

柊はすでに水着を装着している。

「あつ、彩音ちよつと待って、私着替えてくるから。」
と言って小野坂は更衣室へ駆けこんで行った。

「美雪、私たちも行きましょう。」

「そうやなあ、せっかくやからうちも泳ぐかなあ。」

「お二人は泳がないのですか？」

会長が俺と佐々木に聞いてきた。

「あ、いえ、僕はここで皆さんの美しい姿を撮らせていただきます。」

堂々と盗撮宣言をする佐々木。

「実は俺、水着持ってきてないんすよ。まさか本当に泳ぐとは思っていなかったんで。」

「藤井くんそこは空気を読んで持ってこなきゃ。」
「すみません。」

何故か柊に謝る。

「まあまあ、こんなこともあるのかと私が水着を用意しておきました。」

と言って会長は大きめのキャリーバックをとりだした。

『バフンッ!』

大量の水着が勢いよく飛び出してきた。

「どうぞ好きなものを選んでください。」

「は、はあ。」

よくこんなに入ったな。

「うわあゝ、いっぱいある。あ、これなんかかわいい。」

「んゝ、うちはそういうのあまり似合わんからな。」

「いやいや似合いますよゝ。佐藤先輩スタイルいいんですからあゝ。」

本当にいろんな種類の水着がある。かわいいものからきわどいもの、言葉では言い表せないようなものである。

「おっ、これを優希に着せよう。」

怪しい目をした柊が更衣室へと走り出す。右手にはあの言葉では言い表せない水着を持っている。

「さすがにあれはまずいだろ。」

とか言いながら少し想像してみるが、あぶないのでやめておいた。

「うちらも着替えにいくか。」

「そうですね。」

会長と佐藤先輩も更衣室へと向かった。

「俺も着替えるか。」

着替えが終わり浜辺に来たが、まだ誰も来ていなかった。やはり女の子は着替えに時間がかかってしまうのだろう。それに比べ男の俺はパツと脱いでサツと着るだけなのでずいぶん楽だ。

「いやぁ楽しみですね、まさか会長の水着姿をこの目で見れるとは。」

「・・・とりあえず落ち着け。」

カメラを構えながら不敵な笑みを浮かべる佐々木をなだめる。しかしみんな美人でスタイルもいいので、絵的にはかなり映えるだろう。みんなの水着姿をまた少し想像してみた。

「・・・まずい、少し緊張してきた・・・。」

しばらくして会長と佐藤先輩がやってきた。

「いやあー！いいですねえ2人とも。」

『カシヤカシヤ』

「・・・スゲー。」

思ったことをそのまま口にしてしまった。

「あつ、いや、その、姫川先輩とても似合ってますよその水着。」

「そうですか？ありがとうございます。」

会長はさすがお嬢様といった格好をしている。この会長の姿を見たら誰もが綺麗だと思うだろう。しかしその会長より目がいつてしまう格好をしている人が隣にいる。

「佐藤先輩、それは狙ってるんですか？」

「狙ってる？」

「いや、何でもないです・・・。」

なぜここにきてスク水なんだ。いや、ありといえばありだが今は違うような気がする。

「どうしてスクール水着なんですか？」

「まあ練習サボって来てるわけやからなあ、トレーニングのついでに泳ごうと思って。」

「はあ、そうですか・・・。」

そうだった、この人はそういう人だった。根がまじめで特に陸上のことになるだれにも止められないのだ。

「藤井も一緒に泳ぐか？」

「いや、俺は遠慮しておきます。」

「なんや、そうか・・・。」

沖縄に来てまで練習はしたくないので丁重にお断りした。

その時小野坂と柊がやってきた。

「すいません遅くなってしまつて。」

「いやいやあゝ！2人もいいですねえ。」

『カシヤカシヤ』

「もう、せっかく持つて行つたのに優希これ着ないんだよお。」

柊の右手には例の水着がある。少し見てみたかったが、残念だ。

「あんなの着れるわけないでしょ。」

「優希がこれを着れば男なんてイチコロなのにい。」

「イチコロって・・・。」

まあそれだけ小野坂はスタイル抜群ということなのだろう。チラッと小野坂を試してみる。

「・・・。。。」

「・・・なに？」

「いや、お前って着やせするタイプなんだな。」

「・・・！」

『バコッ！』

「痛っ！」

顔を赤くした小野坂がグーパンチを繰り出した。

「行こっ、彩音。」

「う、うん。」

小野坂と柊は行ってしまった。

しまった、今のは失言だったか。しかしいつの間にあんなに育ったんだ。

「藤井、言葉には気をつけろよ。」

ポンツと肩を叩いて佐藤先輩も海に入っていた。

「藤井君、頑張ってください。」

なんか励まされてしまった。

さてどうしようか。小野坂と柊は2人でどこかへ行ってしまった。

会長はパラソルの下でくつろいでいる。佐藤先輩は本気で海を泳いでいる。

幼馴染に同級生、先輩に生徒会長と設定としては文句なしなのだが、この状況で俺はいったい何をしたらいいんだ。

「くそっ、所詮俺はギャルゲの主人公みたいにはなれないのか。」
あんなに簡単にハーレム状況になれる主人公が羨ましい。

やることも無いのでとりあえず水に浸かった。若干冷たい気もするが、すぐにこの冷たさにもなれた。

「・・・何しよう・・・。」

とりあえず浮かんでみた。空は雲ひとつなく真っ青である。

「・・・。」

「何をされているんですか？」
会長がやってきた。

「空を見てるんです。」

「空、ですか・・・。楽しいですか？」

「・・・楽しくはないです。」

「そうですか・・・。」

そう言って会長もぷかぷかと浮かび始めた。

「楽しいですか？」

「いえ、楽しくはありません。」

「そうですか・・・。」

「・・・でも、なんだか不思議な気分になりますね。」

「そうですね・・・。」

「ふうぅ・・・。」

「・・・はぁ。」

しばらく2人でたそがれていた。

『パシャパシャ』

誰かが近づいてきた。佐藤先輩の顔がぬうっと出てきた。

「・・・なにやってんだ・・・。」

夕方になり空が少しずつ赤く染まってきた。

「いやあ、綺麗だったねえ」

「だね。」

小野坂と柊が帰って来たのでどこに行っていたのかを尋ねたらこんな返事が返ってきた。

「ん、とねえ、光の洞窟ってとこかなあ。」

「光の洞窟？」

「そう、あそこに岩場があるでしょ。」

柊が指さす方を見たら、結構な距離のところに岩場があるのが見えた。

「その裏側に小さな入り口みたいなのがあってさ、中に入ってくと少し開けた場所にでるんだ。で、こういう原理かは分かんないけど、とりあえず光が反射しててめちゃくちゃ綺麗だったんだ。」

「へえ、そうなんや、ちょっと行ってみたいな。」

意外にも佐藤先輩が興味を示した。

「あ、今はちょっと無理だと思います。」

小野坂は少し申し訳なさそうに言った。

「何でなん？」

「今は潮が満ちていて中に入れなくなっているんです。」

「そうなんですか、残念ですね私も行って見たかったのですが……。」

なんか定番の展開だが俺も行ってみたい気がする。

「じゃあ、明日みんなで行ってみますか？」

「おっ、いいですねえ藤井君。それだけの絶景ポイントなら素晴らしい絵になりますよ。」

「私ももう一回行きたいからいいよ。」

と佐々木と小野坂も即OKだった。

「じゃあ決まりだねっ。」

というわけで明日は光の洞窟とやらへ行くことになった。

ホテルに帰ってきた俺たちは食事を済ませて各々部屋に戻っていた。当然ながら俺は佐々木と同じ部屋である。

「そういえばここって大浴場があるんだよね？」

「んー、そんなことを会長が言っていましたね。」

「せっかくだし行ってみるか？」

「そうですね。ここまで来て備え付きのバスルームっていうのは寂しいですからね。」

風呂の用意をして大浴場へ行くことにした。

大浴場はホテルの最上階にあるので、エレベーターで行くことにした。エレベーターの中に大浴場のポスターが貼ってあった。見た感じ眺めはよさそうだ。

「ん？ここ時間で男湯と女湯が変わるみたいだな。」

「そうみたいです。でも今の時間帯は男湯ですよ。」

「これで女湯だったら部屋に逆戻りだからな。」

『チーン』

エレベーターを出るとすぐに脱衣所の入り口があった。看板には男湯と書いてある。

さっそく服を脱ぎ大浴場へと突入する。

「はあー、でかいなあー。」

見た感じこの最上階全てが大浴場となっているようだ。

「いやあーこれは相当大きいですよ。」

中央に露天風呂があり夜空が見えるようになってる。それを囲むように電気風呂に炭酸泉、サウナ、水風呂、ジェット温泉、絹の湯などさまざまな風呂がある。

「ここだけでレジャー施設としてやっていけそうだな……。」

「そうですね……。」

それにしても俺たち以外に誰もいないのはなぜなのだろうか。あたりを見回しても人っ子ひとりいない。

「なんで他の客はいないんだ？」

「あれ聞いてなかったですか？この二日間このホテルは貸し切りですよ。」

「なっ、ま、まじでか？」

「まじですよ。」

そういえば、確かにこのホテルに入ってから従業員の人以上を見ていないような気がしていたが、まさか本当にいなかったとは。恐るべし姫川美羽。

「じゃあ僕はサウナに行ってくるんで。」

「お、おう。」

こんなに広い所で2人というのはなんだか落ち着かない。

とりあえず全ての種類の風呂には一通り入ってみた。人がいないというのは若干寂しいが、これだけの種類の風呂を独り占めできると少しリッチになった気分になる。

「星が綺麗だな．．．．」

露天風呂に入りながら体を癒す。

「ふう．．」

なんだかしみじみしてきた。そういえば昼間もこんなことをしてたような．．．。

さて、十分に満喫したところで帰るとしようか。

「佐々木、俺はもう上がるけどお前はどうする？」

サウナと水風呂を行ったり来たりしている佐々木に聞いた。

「あ、僕はもう少しここにいるんで先にあがっててください。」

「了解。」

どんだけいるつもりなんだ、干上がるぞ。

とりあえずシャワーで体を洗い流して更衣室に行こう。

「いやあ、今日は疲れたから早くお風呂に入って、この疲れをいやしたいよお。」

「だね、なんだかんだいって、私たち歩きっぱなしだったからね。」
「・・・！」

更衣室に人の気配がする。おいおい、さすがにそれはないだろ。いくらこの旅行（撮影）がアニメ的な展開ばかりだからといってもこれはないだろ。

くそっ、ここで見つければ俺の人生は終了してしまう。何とか逃げ道を見つけなくては。

佐々木はちょうどサウナに入っている。あそこならしばらくは大丈夫だろう。

「おい、佐々木。」

佐々木に小声で話しかけた。

「どうしたんですか？先に上がったんじゃない・・・。」

「シーツ。」

外に声が漏れないように佐々木の口をふさいだ。

「女子が風呂に入ってきた。」

「またまた、そんなベタなことあるわけじゃないですか。」

と言って外を確認する佐々木。

「・・・！」

窓からチラッと入口の方を見ると、すでにみんな入って来ていた。

「ちよっ、どうするんですかこれ！見つかったら処刑されますよっ！」

「だから逃げるんだよ。」

「どうやって？」

「それは・・・。」

下手に出て行けばこの浴場の間取りにすぐに見つかるだろう。しかしここにはずっといいる訳にもいかない。今はみんなかたまっているが、いずれバラバラに行動を始めるはずだ。そうになったらここから出る術が無くなってしまう。

「よし、とりあえずここから出る。」

腹をくくって飛び出した。

「えっ！ちよっ・・・！」

サウナは二つの入り口があり、俺たちは左側から出た。女子たちは、中央の露天風呂を挟んだサウナの向かい側の出口付近にいる。このまま女子たちが右に回っていけば、サウナの死角に入った時にそれに合わせて俺たちは左に回って、そのまま出口に行くことができる。「よし、そのまま行ってくれ。」

うまい具合に右方向へと回って行ってくれた。

「おっ、露天風呂だ。」

『ガラガラ』

柵が露天風呂に入ってきた。

「いっ！」

まあそんなに上手くいくはずはなく、いきなりピンチである。

『ザプンッ！』

隠れる場所もなく、水風呂に飛び込んだ。

「！！！！」

ぬうおおおお。こんなところにいきなり飛びこむものじゃない。本気で心臓が止まるかと思った。

「はぁ〜綺麗だねえ〜・・・クシュンッ、さむっ！」

「彩音〜、寒いからこっちから入ろ〜。」

「そ、そうだね、そうしよっ。」

中に戻っていく柵。ナイス小野坂。これで俺の寿命が延びた。

「う、うう、さ、さむい・・・。」

体を震わしながら水風呂から出る。いま女子たちは向かいの風呂に入っている。あそこからなら少し見えづらくなっているので、このまま出口に向かうことができる。

「よし、行くぞ。」

「はい。」

あまり音をたてないように、慎重にかつ素早く移動した。

「よし。」

出口の前まで来た。音をたてないようにそーっと扉を開ける。

「ふう、つ、つかれた。」

無事に生還することができた。

「いつ戻ってくるかわかりませんから、早くここから出ましょう。」
「そうだな。」

サツと着替えて脱衣所を後にする。今思えばあんな端っこに荷物を置かなければ、誰かいることくらいわかり、こんなことにはならなかったのだ。と嘆いていても仕方ないし、早く部屋に戻らないと危ないので急いでエレベーターに乗り込んだ。

無事部屋に戻ってくることができた俺たち。

「はあ、何やってんだ俺たち。」

「まあでも、これで処刑されずに済みますね。」

「まあな。」

今日は1日いろんな意味で疲れた。

「ふう、寝るかあ。」

「そうですね、そうしますか。」

体も冷え切っているので、布団にくるまり早く寝ることにした。

ハーレム？な1日 その2

『パシャパシャ・・・パシャパシャ。』

「ふう。」

寝ぼけた頭を働かせるには、冷たい水で顔を洗うのが一番である。時刻は6時過ぎ、ここ沖縄に来て、この6時起きというのは変わらないようだ。

「よし、行くか。」

持ってきていたジャージに着替え、佐々木を起こさないように部屋を出る。昨日はあまり体を動かさなかったから、今日くらいは動いておかまいとな。

ホテルの外に出ると、潮の香りが風に流されてきた。外はまだ少し暗い。やはり沖縄は朝が遅いのだろう。

「すうすうっ、はあすうすう。」

深呼吸をひとつとして準備運動をする。

『ガラガラ』

誰かがホテルから出てきた。

「おっ、藤井じゃん。」

佐藤先輩だった。

「おはようございます。こんな朝早くにどうしたんですか？」

「ん？まあ癖ってやつだな。この時間になると勝手に体が起きるんだよ。」

佐藤先輩も6時起きの体になっていたのか。

「佐藤先輩もそうなんですか？」

「も、ってことは藤井も癖になってるのか？」

「はい、休みの日でも勝手に起きるから困りますよね。」

「確かにな。」

そういえば佐藤先輩の言葉がもとに戻っている。たしか会長の前だ

と関西弁になるんだよな。

さてストレッチも終わった事だし少しジョギングでもするか。

「藤井、今日はどうする？」

「んゝそうですねえ、明日からまた練習もあるんで、少し動くだけにします。」

「そうか、じゃあ私もそうするかな。」

というわけで2人で浜辺をジョギングすることになった。

「んっ、んゝゝ、はあゝ。」

思い切り伸びをして息をはく。時刻は6時半。つい、いつもの癖で起きてしまった。

『ガラガラ』

「んゝ。潮の香りがいいねえ。」

窓を開けて外の空気を吸い込む。

「んっ・・・彩音？」

優希がもぞもぞと起きてきた。

「あっごめん起しちゃった？」

「ううん、いつもこの時間に起きてるから大丈夫だよ。」

「そっか合唱部も朝早かったもんね。」

美羽先輩はまだ寝ているが、佐藤先輩のベッドは空っぽだ。

「佐藤先輩どうしたんだろ？」

「んゝ、あの人のことだし、練習じゃないかなあ。」

と言って窓の外を見てみる。海が朝日に照らされて紅く染まっている。

「綺麗だね。ねえ彩音、ちょっと散歩しない？」

「お、いいねえ、行こ行こ。」

確か朝食は7時半になっていたはずだ。それまで優希と散歩をすることになった。

ホテルの周りは公園になっている。公園といっても、ただ芝生が敷き詰められているだけの広場である。その広場の周りには、ヤシの

木みたいなたくさんが生い茂っている。

「ん〜、どうしょっか？」

「そうだねえ〜。このまま浜辺に行ってもいいけどお……おっ
！あそこに行ってみない？」

ホテルの反対側に商店街らしきものを発見した。

「あそこなら、お土産とかあるかも。」

「そうだね。行ってみようか。」

「……………」

「……………」

商店街の入口まで来たが、辺りはがらんとしている。

「まあ、当然よね……。」

「だよね……。」

こんな朝早くからやっている店なんか無く、ほとんどの店がシャッターを下ろしている。

「これがシャッター商店街ってやつかぁ……。」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。数秒後何かに気がついたかのように優希が、

「……あつ、ええ〜つと……なんでやねんっ！」

『ビシッ』

良い具合にクリーンヒットしたツツコミが辺りに響いた。

「……………」

「……………」

「……優希、ごめんね。」

「ううん、いいよ。だいじょぶ……たぶん……。」

見事にシャッターは閉まりきっている。開いているところを見つけても食事処ばかりで、お土産屋なんてものは見つかる気配すらしない。

「どうしよう。」

「どうしよっかあ。」

いつの間にか商店街の一番端っこまで来ていた。

「帰る？」

「そうしよっか。てかそうしないと間に合わないよねえ。」

ここまで来るのに結構な時間がかかった。今からホテルに戻ってちようど良い時間になるくらいだ。

結局なにもせずに帰ることになってしまった。

「今から海に行っても間に合うかな？」

「うーん、どうだろ。向こうに着き次第かなあ？」

早足で戻れば少しくらいは見る時間があるだろう。

「そういえばさあ、最近藤井君とよく話すよね。」

いつものノリで聞いてみた。

「まあ、席が隣だし、彩音がいろいろうるさいからね。」

「そりゃあねえ。ま、これで少しは幼馴染っぽくなってきたかな。」

「・・・彩音にとっての幼馴染の定義って何なの？」

「んーっとねえ。お互いのことは何でも知ってて、悪口言い合っても実は以心伝心できてて、端から見たら恋人っぽく見えて、本人たちは付き合ってるという意識はなくて、でも実は好きなんじゃないかなとか思ったり、好きだと気付くのが怖かったとかなんとかいろいろあって、最終的にはハッピーエンドみたいな？」

「・・・。」

優希はあきれ顔でこっちを見ている。

「どう？」

「どうって・・・。」

「まあ、頑張ってるよ。楽しみにしてるから。」

「・・・頑張りたくない。」

「いいじゃん別にい。優希だって藤井君のこと好きなんでしょお？」

「・・・！か、関係ないでしょ彩音には！」

顔を赤くする優希。

「ねっ、正直そういう関係ってどうなのお？異性として見れるのか、それとも家族みたいに思うのか。」

「……。」

「いいじゃん教えてよお。」

優希はこういう話をすると全く口を利かなくなる。しかし実際そういうところは本当に気になる。よくいう家族みたいっていうのは本当にあるのか。

「まっ、私の計画は着実に進んでるからいいんだけどねえ。」
と意味ありげに笑ってみた。

「ちよっ、な、なにするつもり？」

優希が慌てながら聞いてきた。

「さぁ〜て何でしょう？ふっふっふっ。」

「もう、彩音ってば〜、教えてよ〜。」

やっぱり優希で遊ぶのはおもしろい。しばらくこの調子で優希をいじりながらホテルへと向かった。

「すすすす、はっはっ。」

「すすすす、はっはっ。」

俺と佐藤先輩の息継ぎが、リズムよく交互に聞こえる。チラッと時計を見る。もうすぐ7時になる。

短距離の俺にしては十分すぎるくらいの距離を走った。

「なあ、藤井。」

「どうしました？」

そろそろ終わりにしないかと言おうとしたが、先に佐藤先輩に話しかけられた。

「私、今度のインターハイで、全国行けるかな。」

不意にそんなことを聞いてきた。

「……？どうしたんですか？」

佐藤先輩は去年も全国大会に出場している実力者だ。まだ予選も始

まっていけないのに、いきなりどうしたんだろう。

「去年の全国大会でさ、私予選落ちだっただろ？ まあその時は、来年頑張ればいっか、って思ってたんだけどね。3年になって大会が近づくにつれて、なんか変に緊張してきちゃって。」

「なに言ってるんですか。まずは確実に全国に行けるように、予選のことを考えないと。」

「まあね。そんなことは分かってるんだけど。去年の全国大会もそうだけど、ちょっと彩夏のことも少し気になってね。」

なぜ彩夏ちゃんのことが出てくるのだろうか。

「どういう意味ですか？」

「あの子さ、今まで何もやってなかったのに、いきなりあんなタイム出しただろ？ 全国に行った時もあったけど、トップの人たちってさなんか次元が違う気がしたんだよ。これが才能ってやつなのかなって。」

確かに彩夏ちゃんは、この間の記録会で11秒台を出すという偉業を成し遂げた。才能があるというより、もはや天才というべきだろう。

「まあ、一応俺も全国にってますから、何となくそういうのは分かりますね。」

「そうだろ？ どれだけ練習しても、どれだけ頑張っても勝てない気がして。」

「凡才は天才に敵わないってやつですか？」

「まあそういうことだな。陸上生活で最後の大会だから、頑張ろうとは思うんだけどね・・・。」

そう言って佐藤先輩は下を向いた。

こういう時こそ、気の利いた言葉を言うべきなんだろうが、まったく頭に浮かんでこない。

「藤井、あんたから見て私はどうだ？」

普通ならここでお世辞を言うべきだが、この人にははっきりと言うべきだろう。

「そうですね・・・、正直、タイムだけ見るなら、ギリギリいけるかどうかってとこですね。」

「そうか・・・。やっぱりお前もそう思うか。いやゝはつきり言ってくれると逆にうれしいね。」

「い、いや、でもそれは去年のことですし、今年はきっと大丈夫ですよ!」

「ははっ。大丈夫だよフォローしなくても。自分でも分かってるからさ、どのくらいのレベルかっていうのは。」

しかし佐藤先輩が試合に出ているときの走り、練習の時の走りは若干何かが違うように思える。それが良い方に違うのか、悪い方に違うのか、どちらかと言われると悪い方である。

「うゝん、でも確かにタイムだけ見ればそこそこって感じですけど、実力を出し切れてないというか・・・。」

「え?」

「確かに試合の時の走りを見ても特に変なところはないです。むしろ綺麗なくらいです。でもなんか変なんです。」

「変?」

「はい。なんていうかいつもと違う気がするんです。」

「そうか・・・。」

佐藤先輩は少し間をおいて

「んゝ、藤井には気付かれてたかあ。まあ自分でも気づいていなかったけどな。」

「・・・?どういうことですか?」

「いやゝ、私ってものすっごい緊張しいんだ。」

「そうなんですか?」

「ああ、いつも皆にはリラックスしていけ、とか言ってるけど、正直、私が一番リラックスしなくちゃいけないんだよな。まあそれでもちゃんと走れているつもりだったけど、やっぱダメだったのかあ。今日、藤井に聞いて初めてわかったよ。」

佐藤先輩の意外な一面にびっくりした。

いつも先輩がみんなに言っていることは、自分に言い聞かせるためでもあったのかもしれない。しかし全然緊張するタイプには見えな
いのだ。

「でもいまさらって感じだな。こんなの治せなんて言われても急に
は無理だしなあ・・・。」

そう言って佐藤先輩はまた下を向いた。

たしかにそういう緊張とかいうのは、すぐに治るものではない。

俺はなんといえば良いのか分からず口を閉じてしまう。気の利いた
言葉ひとつ言えない自分が情けない。

「・・・。」

「・・・。」

沈黙が痛い。俺は佐藤先輩になんと言えば良いのだろうか。励まし
の言葉ひとつ言えないなんて・・・。

「どうしたんだ？ 難しい顔して。もし私を励まそうとか考えてるな
ら、恥ずかしいからやめてくれよ。それに逆にプレッシャーにもな
るからな。」

そう言って笑ってくれたが、やはり佐藤先輩の顔は少し暗い。

「俺、なんて言えはいいかわからないですけど、でもこれだけは言
えます。どんな状況でもその時の全力を出してください。たとえそ
れで負けたとしても悔いは残らないはずです・・・きれいごとです
けどね。」

「ホント、きれいごとだよな。負けたら悔しいっての。」

「それでも、やっぱり全力でぶつかった方がすっきりすると思いま
す。」

「・・・すっきりかあ。」

一呼吸置いて

「でも私はやっぱり負けたくない。最後まであがいて、全国行って、
優勝したい。・・・ってさすがに優勝は無理か。」

結局、行けるかどうかなんて関係なかったんだな。私は全国に行く。
ただそれだけだ。」

「佐藤先輩・・・。」

「いや藤井には悪かったな。いろいろ愚痴言って、結局、自分で勝手に納得してるんだからな。」

「いえ、でも宣言したからには、全国に行かないとですね。」

「ははっ。だな。3年の意地ってやつで、いっちょやってやるか！結局アドバイスできたかどうか分からないが、元の佐藤先輩にもどったようだ。」

時計をみると7時を過ぎていた。

「そろそろいい時間だし帰るか。」

「そうですね。」

浜辺を離れホテルへ向かおうとしたら、前から柊と小野坂が歩いてきた。

「あれ？佐藤先輩と藤井君一緒だったんだ。」

「ん？まあな。そっちは二人してどうしたんだ？」

「私たちですか？私たちは散歩・・・って言って良いのかな？」

小野坂は歯切れの悪い口調で返してきた。

「俺たちに聞かれても・・・。」

「まあまあいいじゃん。それよりもさあ、あれ見てよお。」

柊は海の方を指していた。

海は朝日に照らされて金色に輝いていた。

「わあ、きれーい！」

「・・・すごいな。」

「まさに絶景ってやつだねえ。」

本当に綺麗としか言いようがない景色だった。しばらくこの景色をみんなで見っていた。

「・・・あっ。」

ふと時計を見る。7時半をまわっていた。

「やばっ！」

「どしたの？ってもう時間すぎてる！」

「急いだほうがいいぞ。美羽は怒ると怖いからな。」
とか言いながら佐藤先輩は笑っている。
急いでホテルに戻ることにした。

その頃、ホテル内のレストランにて。

「遅いですね皆さん・・・。」

「そうですね・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

例の光の洞窟とやらには午後から行くことになっている。それまで結構時間があるので佐々木と一緒にホテル内をぶらぶらしていた。

「お、ゲーセンか。」

よくホテルや旅館にある小規模なゲームセンターを発見した。

「これってインベーダーゲームですか？」

「みたいだな。」

パチスロや格ゲーなどが置いてある中にレトロなものを発見した。

「さすがにインベーダーはやったこと無いな。」

「面白いですかね？」

「どうだろ、やってみるか？」

ということで暇つぶしにインベーダーゲームをやることになった。

『ピュン、ピュン・・・ズドン』

「あ、・・・結構難しいな。」

後ろに出現するボスの存在を倒すのに夢中になり、あっさりザコにやられてしまった。

「僕もやってもいいですか？」

といって100円を入れる佐々木。

『ピュン、ピュン・・・ズドン・・・ピュン、ピュンピュン・・・ズドン』

「あゝ。いやゝ難しいですね。」

とか言いながら俺よりも良い点を取っている。

「よし、もう一回！」

こうなったらゲームー血が騒ぐというかなんというか。二人で延々とインベーダーをやり続けた。

気付くといつの間にか昼食までもう少しの間になっていた。

「そろそろ行くか。はー、結局、俺の負けかぁ。」

最終的なスコアは佐々木の方が上だった。

「まあギリギリでしたけどね。じゃあ行きますか。」

2人でレストランへ向かった。

「・・・ヒマだぁ。」

朝食後、部屋に戻ってきた私たち4人は、自分のやりたいことをそれぞれやっている。

優希はなんかの小説を読んでいる。ま、少なくとも私が読んでも面白いとは思えないものだろう。

美羽先輩は何かの書類にいろいろ書き込んでいる。家の仕事とかいうやつだろうか。いずれにしても私には興味を持てるものではないで、佐藤先輩はなぜかせっせと筋トレをしている。なにもこんなところまで来てしなくても、と言ってみたが何でも約束がどうかで頑張っているらしい。

とまあ、こんな感じで皆それぞれの時間を満喫？しているようだが、私は特にやることも無くだだボーっとしているだけである。

「はぁ・・・ヒマだぁ。」

誰も返事を返してくれない。

優希と藤井君をくつつける作戦でも考えてみることにした。

「そういえば・・・」

この後行く光の洞窟は地面が滑りやすくなっているのを思い出した。

「ああして、こうすれば・・・。」

これで藤井君との距離が縮まるはず。だんだんとこのあとが楽しみになってきた。

「彩音、何ぼそぼそ言ってるの？」

「へ？あ、ううん。な、なんでもないよお、あはははは。」

みんなで昼食をとり、光る洞窟とやらへ向かうことになった。

「ほら、あの裏側に洞窟があるんだ。」

今はちょうど潮が引いているので、歩いて裏側へ行くことができた。

「へー、ここがそうなんか？」

佐藤先輩は関西弁にもどっていた。

見た感じ、ただ崖に穴が開いているだけである。

「まあまあ中に入ればわかりますよお。」

と言われるままに中に入って行った。

「はあー、すごいやん。」

「すごく神秘的ですね。」

確かにどういう原理かはわからないが、とにかくとても神秘的である。外からの光が反射して、光ってるだろうか。洞窟中が光り輝いていた。

「のわっ！」

この景色に見とれていたせいか、地面に生えている苔に足を取られ、危うくずっこけるところだった。

「大丈夫か藤井？」

「は、はい。なんとか。」

みんなも気をつけるように言おうとしたら、目の前にいた柊がさっそくこけそうになっていた。

「きゃっ！」

「うおっ・・・っと。」

格好よくキャッチしたかったが、ものすごくダサイ格好になっている。

「だ、大丈夫か柊？」

「あ、う、うん。ありがとう・・・。」

とっさのことであまり気にしていなかったが、やけに顔が近い。こ

んなに間近で顔を見合わせるなんてことは普通ない。若干顔が赤くなっている柊に、思わずドキッとしてしまった。

『つるっ』

「へ？」

「きゃあ！」

『ガチン！』

おもいきり地面に頭を打ち付けた。

「がっ！」

頭が割れそうなくらい痛い。

「いってえ〜！」

「ふ、藤井君！だ、大丈夫？！」

「大丈夫・・・じゃないかも。」

本当に頭が割れていないか確かめる。一応割れていないようだ。

「二人とも大丈夫ですか？」

「え、ええなんとか。」

おそらく大した怪我ではないと思うが、服がびしょぬれになってしまった。

柊が俺の上に覆いかぶさるように乗っかっている。ものすごくベタな展開になったが、頭が非常に痛く、さらに水びたしなのでそれどころではなかった。

「おいおい、そんなにぬれとったら風邪ひくやろ。ホテルに戻って着替えてきたらどうや。」

「そ、そうですね。そうします。はあ、せっかく来たのに残念だなあ〜。」

「しょうがないよ彩音。私も一緒に行くからさ。」

「僕も藤井君について行きますよ。」

「悪いな、二人とも。」

4人で洞窟を出ようとした時。

「うちらも行くか？」

「そうですね。お二人のことが心配ですし。」

ということと結局全員で戻ることになった。
帰る途中で柊がぼそつと何か言った。

「いやあ、ホントに残念だ。」

「ん？ なにか言ったか柊？」

「へ？ う、ううん、な、何でもないよお。」

「・・・？」

少し気になったが早く服を着替えたかったので、あまり気にしないことにした。

「皆さん、忘れ物はないですか？」

帰りの飛行機の中で最後のチェックをした。

結局あの後、着替えに戻った俺たちは、なんやかんやで時間を使っ
てしまい、いつの間にか帰る時間になっていた。

「今日はすいませんでした。」

隣に座っていた会長にひとこと謝っておいた。

「いえ大丈夫ですよ。それより藤井君に怪我がなくてよかったです
わ。」

『キュイイイイイン！！！！！！』

飛行機のエンジンがうなり始めた。もうこの沖縄とはお別れである。
といっても修学旅行でまた来ることになるが。

「見てください藤井君。とても綺麗ですよ。」

と言って会長は窓の外を指さしていた。

「そうですね・・・。」

夕日が海に反射して紅く染まっている。朝とは太陽の沈む方向が違
うだけなのに、全く違う景色を見ているようだった。
なんかいろいろあったけど結構楽しかったな。

「まあでも、今度来るときはもっと普通に楽しみたいな・・・。」
ぼそつと言った。

「・・・？ 何か仰いましたか？」

「あ、い、いえ楽しかったなあ、と。」

「そうですね。」

会長は外を眺めながら

「とても楽しかったです。」
と言った。

紅く染まる海を背に飛行機は飛び立って行った。

対戦する1日

『キンコンカンコン』

「はぁ、やっと終わった。」

6限目の終わりを告げるチャイムが鳴り、ため息をつく。

今日はなぜか英語が2限あった。正確には、英文を読みそれを訳したりする「リーダー」と、おもに文法だけをする「グラマー」の2つがあったのである。正直どっちも英語なんだから一つにまとめてほしいところである。まあ問題はそこだけでない。当然ながら2つの教科は別物扱いなので、テストが2つあるのである。正直、勘弁してほしい。

文句を言いながら教科書を鞆の中に入れる。

「あ、藤井君、おつかれえ。」

横にいた柊に声をかけられた。隣の席の小野坂と話していたようだ。

「おお、おつかれ。」

といってもこの後の部活で会うのだが。

「ねえ優希、今日、部活早く終わるからどっか行こうよお。」

「うん、いいよ。えーっとじゃあ・・・」

2人の会話が少し耳に入ってきた。

そういえば来週は試合があった。ほとんどの陸上部はそうだと思うが、試合の前はそんなに練習をせずに、その試合の日に自分のベストなコンディションを持って行けるように調整をする。特にこの陸上部は、その調整の期間は各自でメニューを組むので、ストレッチだけで終わる人も結構いる。なので、下手をすると帰宅部よりも早く帰ることがたまにある。

まあ、それでもやる日はきっちりやるのだが。

「ねえねえ、昨日のアニメ見た？」

集合までの少しの時間に、柊が話しかけてきた。

「ん、昨日の？ああ、新しく始まったやつか。」

柊が実は結構なアニヲタだとわかってから、たまにこういう話をするようになった。しかしそれ以降、周りからの視線が少し冷たくなってきた。

「いや、まだ見てないよ。俺は1話みたあと、1週間待ったのが嫌なんだ。だからいつもDVD借りていつきに見るんだ。」

「へえ、そうなんだ。だったら最新のやつはあんまり分らないのかあ。」

「そうなんだよ。だからチョイ古いやつで。」

「りょかい。でもこれはチョーお勧めだからあ。」

そんなこんなしていると、いつも集合の合図がかかる。集合してからは完全に頭のスイッチが陸上に切り替わるので、俺も柊もアニメの話はしない。

「みんな集まった？」

くるとキャプテンが見わたす。

「あーっと。やっぱ彩夏はいないのね・・・。」

「す、すいません。」

なぜか柊が謝る。

いつものことだが、柊妹こと彩夏ちゃんは集合に遅れてくることしばしばある。といっても、前日に夜更かしして寝坊するとかそういうのだけで、平日はもちろん授業のあとなので、遅れることはあまりない。それでもなぜか普通の人たちよりは遅れてくる回数が多い。

『パタパタパタ』

「はあはあ。す、すいませーん！」

校舎の方から彩夏ちゃんが走ってくるのが見えた。

「お、きたきた。そのままでもいいから集合して。」

「は、はい！はあはあ。」

「えー、来週には試合が控えているので、今日から調整に入ります。最初の集合は毎日するので、ちゃんと来るように。あと、練習は各

自分で終わってください。以上です。それじゃあ頑張って行きましよう。」

『お願いしま〜す!』

いつものように、みんなで一斉に挨拶する。

「もう、なんで毎度毎度おくれてくるかなあ。」

「だって、今日はアタシ掃除当番だったんだもん。」

この姉妹喧嘩も、すでに恒例になってきた。

「それでも遅すぎでしょ。また誰かとしやべってたんじゃないの?」

「え〜っと、それはその・・・。」

「もう、はつきりしてよね!」

だんだん柊の声が大きくなってくる。

最初の頃はみんな止めに入っていたが、最近では面倒くさいのか、それとも慣れてしまったのか、いずれにしろ、みんな無視している。さて、俺もさっさと練習を終わらせて帰ろう。

「藤井、お疲れ。」

「おう、お疲れ。またな。」

いつの間にやら半分以上の人が練習を終え、いなくなってしまうていた。という俺も、あとはクールダウンをして帰るだけだ。

「お〜い、友喜!」

そのダウンの途中で西山晃に呼び止められた。

「どうした?」

「もう練習終わりだろ? だったら、このあとベアーズ行こうぜ!」
ベアーズというのは駅前にあるファーストフード店である。別に付き合っても構わないのだが、もうすぐ試合もあるのであまりそういうものは食べたくない、という思いもある。

「なんで?」

とりあえず理由を聞いてみた。

「今日から新作出るんだよ。知らなかったか? ちょうどいいからお前も誘って行こうかな〜って。」

そう言えば最近CMでそんなこと言っていた気がする。

「へえ。」

適当に相づちをうつ。

「も、ってことは他に誰かいるのか？」

「いや、俺一人だ。」

俺が行くと言わなければ、こいつは一人で行くつもりなのか。

「まあ、しょうがないから付き合ってやるか。」

というわけで2人でベアーズに行くことになった。

「おつかれえ、藤井君。」

「おう、お疲れ。柊も大変だな。」

この調整の期間でもマネージャーは、最後まで残って手伝いをしなければならぬ。正直、俺たちよりもマネージャーの方が厳しいのではないかと思う。

「ううん、大丈夫だよお。」

「そうか？俺たち、いつもマネージャーに頼りっぱなしだからな。なんか手伝えることがあったら言ってくれよ。」

「ありがと。でも、ホントに大丈夫だから。そんな心配するより、自分の体調管理をしっかりしてよお。うちのエースなんだからあ。やさしく微笑みながらそう言った。ふいにそんな笑顔を見せられてドキッとしてしまった。いやあ、体に悪い。」

「おい、友喜！はやくしろよ！」

校門のところで晃が叫んでいる。

「そんなに大声で叫ぶなよ……。じゃあな、柊。お前もからだ壊したりするなよ。」

「うん、ありがと。じゃあね。」

柊に挨拶をし、晃のもとへ行く。

駅ビルの目の前にある大通り。そこにベアーズバーガーはある。この大通りにはベアーズのほかにもファミレスや喫茶店など、さまざま

まな食事処がある。他にも服屋やアクセサリーショップなどもあり、それなりの規模のショッピングモールとなっている。

『ウィーン』

「いらっしゃいませ。」

この時間は半分近くが学生でうまっている。

「ご注文はお決まりですか？」

「あーっと・・・このカリチキバーガーセットで。」

「お飲み物は何になされますか？」

「じゃあ、オレンジジュースで。」

とりあえず、あまりくどくないものを注文した。

「かしこまりました。少々お待ちください。お次の方どうぞ。」

「俺はこのチーズ&チーズバーガーセットで。あ、飲み物はコーラで。」

「かしこまりました。少々お待ちください。お待ちの方どうぞ。」注文してから数十秒で商品が出てきた。

「じゃあ先に席取っておくから。」

「おう、頼んだぞ。」

見た感じ1階は人がいっぱいなので、2階へ行くことにした。

2階も人がいっぱいいたが、端っこの方にちょうど2つ開いている席が見えたのでそこに座ることにした。

しばらくして晃がやってきた。

「よし！じゃあ食うか。負けないぜ！」

「何にだよ・・・。」

晃は新作のチーズ&チーズバーガーにかぶりついた。

チーズ&チーズというネーミングからして、普通のチーズバーガーにさらにもう1枚チーズがのっているだけかと思ったが、1枚なんというレベルでは無かった。ハンバーグとハンバーグの間にあるチーズの量がすごいことになっている。そしてハンバーグの中には大量のチーズが埋め込まれているらしい。

「なあ、気持ち悪くならないか？」

「ん？ほんはほひゃいほ。」

お約束のネタで何を言っているのか分からない。

「は？なんだって？」

あきれながら聞きかえした。

晃は口の中身を呑み込んで

「いや、そんなこと無いぞ。むしろこのチーズの量が俺にとっては最適の量だ。」

「あ、そう。」

見ているこっちが気持ち悪くなりそうなので、もくもくと自分のハンバーガーを食べた。

「いまさらだけど、お前、部活はどうしたんだ？」

ふと疑問に思い聞いてみた。

「ん？いつも通りやってきたぞ。」

「サッカー部ってそんなに早く終わるのか？」

同じグラウンドで練習しているのに、今まで全く気がつかなかった。

「お前たちが遅すぎるんだよ。」

確かに陸上部の練習が終わるころには、どの部活もいなくなっている。残っているのは事務の人くらいだ。

そうこうしているうちに、2人とも全て食べきっていた。

「いやー、食った食ったあー。」

一応、俺も晃も育ち盛りというものに分類されるので、ものの数分で食べ終わってしまった。

「さて、どうする？」

「もちろん、まだまだいくだろ。」

「まさかまだ食べるのか？」

「いやそれはない。」

即答だった。さすがにあのチーズ地獄はコイツでも耐えきれなかったのだろう。

「じゃあどうするんだ？」

「うーん・・・よし！ゲーセンに行こう。」

「結局そこになるのか。ま、いっか。じゃあ行くか。」

ということ、いつものようにゲーセンに行くことになった。

「やっぱあれだろ！」

といって晃が指さしたのは例の格ゲーである。

「好きだなお前・・・。」

「男はやっぱ格ゲーだろ。」

いや、他にも格ゲーはあるのだが、何故か晃はこれにこだわる。

「なあ友喜、あれってさ・・・。」

急に晃が立ち止まり、指をさした。そこにはどこかで見たことあるような女の子がいた。

「・・・あんた強いな。」

「いえいえ、そんなことないですよ。」

どこからどう見ても彩夏ちゃんであった。

どうやら例の格ゲーで対戦していたようだ。対戦相手はえらく体のごつい大男だった。見た感じリアルな方でも、やっていそうな感じの体格だ。

「また今度対戦してくれ。」

「あ、はい。いつでも受けて立ちますよ！」

大男は立ち去って行った。

「彩夏ちゃん。」

大男とすれ違いになったあと、彩夏ちゃんに話しかけた。

「あれ？藤井センパイ。それに、えーっと西山センパイ。」

「おっ、俺の名前覚えてくれてたのか。」

「はい、とても印象深かったの。」

まあ嫌でも記憶に残るよな。

「今の人誰だったんだ？」

不思議に思い聞いてみた。

「えーっとアタシの格ゲー仲間です。」

「格ゲー仲間？」

「はい。まえに藤井センパイに負けてからよくここで練習してたんですけど、その時に勝負を挑まれてそれ以来よく対戦してるんです。」

「練習って・・・。」

俺に負けたのがそんなに悔しかったのか。

「センパイ達は何してたんですか？」

「ん？俺たちか？俺たちは、さっきまで飯食ってて。で、今からこいつをしようかなーって思ってたんだ。」

と言って横にある格ゲーの台を指さした。

「そうなんですか？じゃあ一緒にやりましょう！」

「よし！じゃあ、俺にこの間のリベンジを果たさしてくれ！」

晃は返事を聞かずに椅子に座った。

「いいですよ。受けて立ちます！」

「ふっふっふ。俺を今までの俺だと思うなよ。」

やけに自信たっぷりな晃である。

晃の選んだキャラクターをみて、こいつの言っている意味がすぐに分かった。晃は今まで、一振りが大きく当てるのが難しいが、当たれば大ダメージを与えられるキャラクターをよく使っていた。いわゆる

一撃必殺型である。しかし今回はいわゆる投げキャラでメンバーをそろえてきた。投げキャラは技の発動が難しく、かなり使いこんでいないと不発することが多い。

しかし、晃は今までも投げキャラを間に挟んで使ったりしていた。そして結構な確率でこの投げキャラにやられることが多かった。今回の晃の選択はかなり良いかもしれない。

「お、一撃必殺から投げに変更ですか。大胆にきましたね。」

さっそく彩夏ちゃんに見破られている。

「さすが俺のライバル。しかしそれが分ったところで俺にはかてない！」

「いつからライバルになったんだよ。」

しかしこいつの自信もわからなくはない。投げ技というのは、発動された瞬間にその技の範囲外にいないければ、まず避けることはできない。晃が完璧に投げ技を使いこなしていれば、勝敗はかなりの確率でこいつに傾く。

「さうて、ここはどうしよっかな。ううん、やっぱこいつかな。」

彩夏ちゃんはなにやらぶつぶつ言いながらキャラを選んでいる。

彩夏ちゃんを選んだキャラを見ると、この間と同じでコンボでダメージを稼ぐタイプであった。このキャラは一撃はダメージが低いが、コンボによってはそのタイプよりもダメージが一番多くなる。さらに攻撃をガードされても、コンボによっては反撃を受ける距離から大きく離れることもできる。一番使いやすく、一番奥が深いタイプであるかもしれない。しかし、そのキャラの中にカウンタータイプが入っていることに気がついた。もちろんカウンターというのは、攻撃を受け止め反撃するというものである。しかし投げ技はこのカウンターの対象にはならない。もちろん投げのカウンターを持っているやつもいるが、かなり特殊なやつである。

さて柊妹はどうするのだろうか。

「よし！いきますよ。」

「よっしゃあ！こい。」

『ガチャガチャ』

予想通り彩夏ちゃんは押されている。晃はみごと投げ技を使いこなしている。

「よし、ここだ。」

『ピーン』

晃が接近した時に彩夏ちゃんが超必を発動した。

「ま、まさか。」

彩夏ちゃんを選んだキャラを思い出してみた。

『ズドドォーン』

見事に超必がクリーンヒットした。

「のわー！くっそ。」

彩夏ちゃんの選んだキャラは、全員共通した超必を持っている。ほとんどの超必はコンボの締めに入れるのが一般的である。しかしこのキャラクター達はコンボ中ではなく、むしろ相手が飛び込んできたときに使うカウンター超必である。カウンターと言っても攻撃を受けるのではなく、攻撃をされる前に叩きつぶすという技である。キャラによって違うが、自分の周りをバリア的なものが覆う技なので、接近した瞬間にガードをしなければ確実に当たる。接近しなければ技が使えない投げキャラにとって天敵である。

『ガチャガチャガチャ』

「……………」

2人とも無言である。戦いに集中しているのであろう。

彩夏ちゃんは超必のゲージを必ず1本残して戦っている。そうすることによって相手が飛び込んでくる確率が少なくなり、投げ技を發動する機会がかなり減る。

『ザシュ、バコツ、ザシュ、ドオン！』

「のわー！」

晃の最後の1体がやられた。勝負は彩夏ちゃんの勝利に終わった。

「いやー、かなり腕をあげましたね。かなり危なかったです。」

「うぐう……………」

晃は悔しいのか変な声を出している。

「まあまあ、今回はかなり押してたじゃないか。次はどっちが勝つかわからないぞ。」

「友喜。俺は、俺は……………」

えらく溜める晃。

「な、なんだ？」

「強くなる！」

高らかに声を上げる。何人かの客がこっちを見ている。

「は、恥ずかしいからやめてくれ！」

彩夏ちゃんに負けた晃は、その後、特訓をしてみると言って台を占領した。それを見ていてもヒマなので、彩夏ちゃんと一緒にゲーセン内を回っていた。

「藤井センパイ、これやりましょう。」

「ああこれか。あんまり音ゲーはやったこと無いんだよな。」

柊妹が指さしたのは、いま音ゲー界では、最もメジャーであると言ってもよいゲームであった。

「そうなんですか？でもやったことはあるんですよ。じゃあ一緒にやりましょう。」

と言って無理やり太鼓バチを渡してきた。

あまり自信はなかったが、とりあえず対戦することになった。

「よし、じゃあいきますよ。」

難易度と曲を選びスタートボタンを押す。

『ドンドン、ドドドン、ドンカッカッ』

大体の音ゲーはコマンドが4つか5つくらいが相場であるが、このゲームは、コマンドは2つと極端に少ない。しかしコマンドが流れてくる間隔がかなり短く、これをバチでたたかないといけないかなり手首が疲れる。さらに微妙に間隔が違ったりするので、やみくもに連打するだけでは点数を取ることはできない。これがコマンドが2つにわかれているので、結構難易度が高いのである。

「あ、くそ。」

かなりの確率で、コマンドが流れて行ってしまっている。

『ドドドドドン！』

とりあえずゲームオーバーにはならなかった。

「ふう〜。なんとかノルマは達成だな。」

「藤井センパイ、上手じゃないですか。練習したらもっと上手になりますよ。」

彩夏ちゃんの点数は、ほぼ満点であった。おそらくタイミングが若干ずれただけで、取りこぼしはしていないだろう。

「ははは、彩夏ちゃんには敵わないよ。」

「いえいえ、そんなこと無いですよ。」

そんなことを言っているが、まだまだ余裕がありそうだ。

「ちょっと一人でやってもいいですか？」

「別にかまわないけど。」

「ありがとうございます。」

そう言って、難易度と曲を選びはじめた。選んだ難易度は、一番難しい難易度であった。

『ドドドドン、カッカッドドンカッカッ』

ものすごい勢いでコマンドが流れていく。しかもコマンドの量はさっきの2倍はある。

「ふっ、はっ、たあ。」

全く取りこぼしていない。かなりのバチさばきである。

『ドドカカドドカカドドン!』

華麗なるフィニッシュだった。

「ふう、すっきりした!」

すごいとしか言いようがなかった。取りこぼしたのはほんのわずかである。点数もトップ10に入っていた。しかしこれ以上にすごい人がいるというのが想像できない。

「いや、すごいよ。こりゃ、対戦するに相応しくなるには、相当時間がかかりそうだな。」

「そんなこと無いですよ。センパイならすぐにこれくらいできますよ。それにアタシもまだまだですから。」

この子はどこまでやりこむ気なんだ。俺もやりこみは多いが、ここまで多趣味ではない。

「センパイ!次はこれやりましょうよ!」

隣にあったシューティングゲームを指さして言った。

「まだやるのか・・・。」

その後も、レーシングやら違う種類の音ゲーなど、いろいろと振り回された。

約1時間後、晃のもとへ帰ってきたが、こいつはまだコンピュータと戦っていた。

「そろそろいい時間だし、帰らないか？」

「何い！俺は、まだまだ戦える！」

「・・・なに訳の分からないこと言ってるんだよ。ほら帰るぞ。」

「え〜。」

「・・・はあ。彩夏ちゃん、帰ろっか？」

晃の言動にいちいち付き合っていると面倒なので、無視して帰ることにした。

「え、でも・・・。」

「いいんだよ、面倒くさいから。」

「おい！めんどくさいとはなんだ。俺がせっかく盛り上げてるのに。」

「盛り上げる場所が間違ってたんだよ！」

「確かにめんどくさいですね。」

「あ、彩夏ちゃんまで、ヒドイ。」

「行きましょうか。」

「ああ、行こう。」

「ってちよっと、ホントに行くのかよ!？」

後ろから聞こえる晃の声を、完全に無視してゲーセンをあとにした。

外に出ると太陽は沈み、空は星で埋め尽くされていた。

「うわ！もう真っ暗じゃなか。」

いつの間にか追いついていた晃が言った。

「今日はお開きにするか？」

「そうだな、腹減ったし。」

「さつき食べたばっかだろ。」

「成長期の俺は食べざかりなんだよ！」

「ああ、そう。」

俺は適当にかえした。

「何だよ。今日はノリが悪いな。」

「いや、お前に付き合っているだけで、十分だと思うが。」
「またまたあ、つれないこと言ってる。」

「はいはい、じゃあな。」

適当にあしらって自転車置き場へと向かった。

「あ、おつかれさまです。」

彩夏ちゃんもそう言って、てくてくと歩きはじめた。

「俺の立ち位置ってかなり損するよな・・・。」

「へえ、こんなところに新しいお店できたんだ。」

大通りを歩いていると、『オープンセール』と書かれた看板のあるお店を発見した。

「ここですか？確か4日くらい前にオープンしてましたよ。」

「へえ。」

最近、いろいろと様変わりしてきているこの大通りだが、通るたびにお店が増えていっているように思える。

「あ、お姉ちゃんと小野坂センパイ。」

彩夏ちゃんが急に立ち止まり、左横にあるお店を指さした。

そこはコーヒーショップで、小野坂と柊の2人が話しこんでいるのを発見した。

柊はこちらに気づいたらしく手を振っている。後ろを向いていた小野坂は、柊の行動で俺たちに気付いた。

なんだか手招きをしているように見える。

「センパイ、入りますか？」

「そうだな。」

とりあえず中に入り、小野坂と柊の横の席に着いた。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりでしょうか？」

「えっと、コーヒーで。」

「アタシはカフェオレで。」

「かしこまりました。少々お待ちください。」

一通り注文が終わり、柊が訪ねてきた。

「珍しい組み合わせだねえ。何してたの？」

言われて気付いたが、確かに珍しい組み合わせである。彩夏ちゃんと一緒にいることは別に不思議ではないが、2人きりというのは今までになく柊とセットというのが普通であった。

「ああ、ちよつとな。」

これまでのいきさつを簡単に話した。

「へえ、最近私より早く帰るのに家にいないと思ったら、ゲーセンで遊んでたんだあ。ふうくん。」

柊の声が若干怖い。いつもの姉妹げんかの時みたいではなく、静かな怒りを感じる。逆にこっちの方が怖い。

「まあ、やることやったら別にいいんだけどねえ。」

不敵な笑みを浮かべる。柊から何かしら恐怖を感じる。

「お、お姉ちゃん。」

彩夏ちゃんの声が震えている。

「ま、まあまあ。」

小野坂が柊をなだめる。

「そ、そっちは何してたんだ？」

話をすり替えてみる。

「何って、見たら分かるよねえ、藤井くん。」

ガクガクブルブル。怖いです、柊さん。

「って冗談冗談。ちよつと遊んでみただけだよお。」

「遊んでみたって・・・。」

「でも、彩夏には本気で怒ってたんだけどねえ。」

と言って、またあの不敵な笑みを浮かべる。

「あ、あうう。」

「・・・で、結局なにやってたんだ？」

「見ての通り、コーヒー飲みながらしゃべってたんだよお。」

「いや、それはわかるけど。いつからいたんだ？」

時計をみるとすでに7時を過ぎている。

「え、うそ！もう7時すぎてるよお。」

「本当だ。じゃあ私たち、2時間もいたんだ。」

「よく1杯のコーヒーで、2時間もやってこれたな。」

あきれを通り越して、逆に感心したくなる。

「まあね。女にはいろいろと話すことがあるのよお。」

「ふーん、いろいろねえ。」

「それより、そろそろ帰ろうか？今日、結構宿題でたから、早くやった方がいいかも。」

と小野坂が言った。

「もお、優希は真面目なんだからあ。」

とか言っているが、柊もちゃっかり宿題はこなしてきている。

「ま、もう遅いし、帰るとしますかあ。」

そう言ってコーヒーショップをあとにした。

「そういえば、優希ってもうすぐ誕生日だね。」

帰り道でそんな話になっていた。

「うん、そうだよ。」

「じゃあさあ、なにかほしい物のリクエストとかある？」

「うーん・・・、特になけどなあ。」

小野坂は少し悩んでそう答えた。

「いやあ、特にないってのが、一番難しいんだよねえ。去年はそのキーホルダーだったしい。」

小野坂の鞆についているキーホルダーを指さして、うーんと悩み始めた。

「あ、そうだ。」

何か思い出したかのように、小野坂が声をあげた。

「去年、彩夏ちゃんと一緒に作ってくれたケーキ、もう1回たべたいな。」

「ケーキ？あんなものでいいなら、何個でも作ってあげるよお。ねえ、彩夏？」

彩夏ちゃんはハイと頷いた。

「へえ、ケーキとか作れるんだ。」

と素直に感心した。

「もちのろん、私だってケーキくらい作れるよ。」

と自信満々に言った。

「でもケーキだと食べたら無くなっちゃうし。どうせならずっと残るものが良いなあ。」

柊は、またうーんと悩みはじめた。

「藤井センパイは、何かプレゼントしないんですか？」

そのふりは、いずれくるだろうと思っていたが、まさか妹のほうからくるとは思わなかった。

「え！？ああ、プレゼントの交換なんて、小学生のとき以来やってないからなあ。なあ。」

と小野坂に振った。

「うん、たぶん小3くらいからやってないと思う。」

「え、どんだけ寂しいカップルなのよお。」

「な、ちよっ……。」

柊の突然の振りに、小野坂は言葉を失っている。

「へへっ、やっぱり優希はいい反応してくれるねえ。じゃあねっ！」
わかれ道のところに来て、サッと帰って行ってしまった。

「え！？あ、お、おつかれさまです。」

柊の突然の行動に、彩夏ちゃんも驚いていたが、逃げるように帰って行った。

「おいおい、そんな終わり方ありかよ！」

柊のつくったこの気まずい空気の中、2人で帰ることになってしまった。

「はあ、ったく……。」

しばらく無言が続き、もう少しで家のところまで来ていた。

「……ねえ。」

先に言葉を発したのは、小野坂だった。

「ん？」

「誕生日、終わっちゃったよね？」

「俺か？ ああ、俺の誕生日は4月だからな。急にどうしたんだよ？」

「わかんない。」

小野坂から謎の答えが返ってきた。

「よく意味が分からないんだが・・・。」

「だから、わからないってば！」

「いや、そんな大声出されても。」

「じゃあねっ！」

『ボタン！』

小野坂はダダッと家の中に駆けこんで行った。

「お、お前もか・・・。」

よく分からないまま、時が過ぎていく。

「とりあえず・・・家に入ろう。」

遅れてきた誕生日

『お疲れ様でしたー！』

練習後の集合が終わり、みんな散りぢりになっていく。

今日は土曜日で授業がないので、練習は午前中にするようになって
いる。

時計をみるとまだ10時半であった。

「まだこんな時間か・・・」

例によって試合が近いので練習が早く終わった。

「おーい、藤井君。このあと時間ある？」

着替えをするために部室に入ろうとしたら柊が話しかけてきた。

「ん？あるけど、なんか用でもあるのか。」

「いやあー、このあと一緒に食事でもどうかなあーって。」

「食事？俺は別にかまわないけど。」

「そっかあ、じゃあ、あとで校門に集合ね。」

と言って柊はグラウンド整備へ向かった。

柊に食事に誘われるなんて、珍しいこともあるものである。

「さて、俺もさっさと着替えるか。」

「お待ちせえー。」

柊を待つこと15分。少し駆け足で柊がやってきた。

「おう、遅かったな。」

「そりゃあ女の子だからねえー。女の子には何かと準備が必要なの
だよお。」

言われるまでもなく、女の子が着替えるのに時間がかかるのはわか
っていたが、なんとなく聞いていた。

「しかし、いつもと雰囲気が違うな。」

柊は私服を着てきていたのだが、いつも着ている服とは少しイメー
ジが違う気がした。

「そう？さすが藤井君だねえ。」

「どういう意味だ？」

「ふふん。こいつは勝負服なのだよ。」

「はあ。でも何で勝負服なんだ。」

「女はいつだって戦いなんだよ。」

「そ、そうなんですか・・・。」

「まあ、それはそれで置いて、早く行こっ！」

そう言って、柊は俺の手をつかみ、ずんずん前へ進んでいった。

しばらくしてショッピングモールに着いた。

「そういえば、どこで食べるんだ？」

「ん？ここだよお。」

柊はベアーズの前で立ち止まった。

「新作が出たらしくてさあ、一回食べてみたいなあって。」

「ま、まさかのデジャヴか・・・。」

ぼそっとつぶやく。

「え？」

「い、いや何でもないよ。」

まさかの2日連続ファーストフード店。しかも同じ店である。

「さあ、行こう行こう。」

柊に背中を押されて中へと入った。

俺たちは2階の外の景色が見える席に着いた。

「それじゃあ、いただきますあす！」

「いただきます。」

俺が頼んだのは昨日と同じでカリキバーガーである。これ以外のものは油っこくてあまり食べる気にはなれない。決してまずいというわけではなく、単にスポーツマンとしてどうなのかということである。

まあ、ファーストフードを食べている時点でダメな気もするが。そして柊が頼んだのはもちろんチーズ&チーズバーガーであった。

「んゝ・・・。」

「どうした？」

「いやあ、美味しいんだけどお・・・すぐ飽きるねえこれ。チーズ好きの私としてはうれしいんだけどお、それでもやっぱりチーズが多すぎるよねえ。っていうか、くどすぎるんだよお。せめてピクルスとか入れてほしいよねえ。そうしなと全部食べきれないと思うよ。」

「まあ確かに見てるだけで気持ち悪くなりそうだからな。」
愚痴を言いながらもパクパクと食べていく柊であった。

「やっぱり今のアニメには二つの『もえ』がいるよねえ。」

「二つのもえ？」

いま再放送中のアニメについて語り合っていたらそんな話になっていた。

「そう、萌えと燃えだよお。」

「いや、言いたいことはわかるけど、聞いてる側としては非常に分かりにくい。」

「萌えキャラが燃えるバトルをする、萌え燃えなストーリーと映像が今の流行りだよお。」

「そ、そうなんだ。まあでもそういうアニメは最近よく見るよな。魔法少女ものも戦闘シーンは熱くなってるみたいだし。よくある一般的な女の子向けのアニメだと思ったら、実はかなりシリアスな話だったり、DB的な戦闘展開になったりと、柊いわくの萌え燃えって感じだな。」

「そうそう、いま思い出したんだけど今度そのアニメ、映画化するんだって。」

「へえゝそうなんだ。」

「なんかねえ、第一期の話をリメイクするらしいよ。」

「でもリメイクするだけじゃそんなに客が集まらないんじゃないか？」

「そこは私たちの愛で埋めに行くんだよお。」

「さすがに一度見た話を、もう一度お金払って見に行く余裕はないぞ。」

そう言っただけで財布をひらひらさせる。

「いやいやあ、なめてたらいけませんよお。今回は相当手が込んでいるらしくて、ただのリメイクではないらしいよお。」

「へえ、どんな感じなんだ。」

「えいっとねえ、わかんない。」

「なんだよそれ。」

「だってそうやって雑誌に書いてあっただけで、まだどういう風に見えるかは秘密らしいんだあ。」

「なるほど、そういうことか。」

「ん、早くみたいなあ。映画だとかかなり迫力あるんだろうなあ。」

「アニメでも迫力はすごかったからな。」

その後もしばらく2人で語り合うのであった。

「ねえねえ、この後も付き合ってくれるでしょお。」

ベアーズから出てきた俺たちだが、柊はまだどこかに行くつもりらしい。

「付き合うってどこに？」

「それは着いてからの楽しみだよお。」

「結局、ついて行かないと分からないのか・・・。」

「ほらほら行くよ！」

俺は半ば強制的に連れて行かれた。

連れて行かれた先は、駅ビルの中にある衣類専門店などがあるフロアだった。

「ちよっ、どこ行くんだよ。」

柊は女性物の下着売り場の中に入ろうとしていた。

「ん？どこって下着売り場だよお。」

「いや、そんなことは見たらわかるって。」

「ふう〜ん恥ずかしいんだあ。」

柊はふふんと笑っている。

「そ、そりゃそうだろ。」

「大丈夫だってえ。知らない人から見れば彼氏かなんかだと思うつて。」

「そういう問題じゃない！」

「もおゝ恥ずかしがり屋さんなんだからあ。」

「……………」

どうつつこめばいいのか分からない。

「さて冗談はここまでにして次に行こう。」

「ま、まさか、これをするためだけにここに来たのか……」

今度はごく一般的な服屋に来た。誤解を招くといけけないので一応言っておくが、けして下着屋が一般的でないという意味では無い。

「しかし、俺がいる意味があるのか？」

柊は真剣なまなざしで服を選んでいる。

「もありもあり大ありだよお。」

そういつてまた服を選びはじめた。

「……………」

待つこと数十分。

「よし！ちよつと待っててね。」

「あ、ああ。」

柊は試着室へ入っていった。

「……………」

さらに数分後、柊は先ほど持っていた服の内の一着を着て出てきた。

「どう？」

「い、いや、どうって、似合ってるんじゃないか？」
と普通に答えた。

「む、これじゃないのかあ。」

謎な発言をしてまた試着室の中に入ってしまった。
さらにさらに数分後。

「どう？」

とまた同じように聞いてきた。

「えーっと、か、可愛いよ？」

「これでもないのかあ。」

またまた試着室の中に入ってしまった。

そして数分後。

「よう。」

ポンと誰かが肩をたたいた。振り向くと佐藤先輩がいた。

「あ、お疲れ様です。」

そしてその隣には会長がいた。

「こんにちは。お久しぶりですね。」

「どうも、会長。お久しぶりです。」

「何やってるんだ？」

「あー、えーっと・・・。」

答えようとしたその時、試着室のカーテンが開いた。

「どう？これで決まりでしょ。」

と言って柊が自信満々に出てきた。

「へ？あれ、なんで佐藤先輩と会長が？」

目の前にいる二人を見ながら俺に聞いてきた。

「あー、俺もいま会ったばかりだから。」

「まあ、うちらは普通に買い物してただけなんやけどな。」

「そしたらたまたま藤井君をお見かけして。」

と二人が答えてくれた。

「そうだったんですか。」

「で、そっちは何してたん？珍しい組み合わせやけど。」

「え？そうかな？」

「うーん、どうだろう？」

別に2人であること自体は珍しくはない。よく登下校は2人になる

ことがある。しかしこうやって外に出るときに2人でいるということとは無かったかもしれない。

「ま、いっかあ。えっと私たちは・・・。」

そこまで言って柊は口を閉じた。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ。ちょっといいですか？」

そう言っ柊は俺に聞こえないように二人に耳打ちした。

「あくなるほど、そういうことね。」

「それでしたら私たちもお手伝いしますよ。」

柊が何を言っているのかは分からなかったが、明らかに何かを企んでいる。

「こういうのは本人に直接聞くのが一番早いんだよ。藤井、この店の中にある服で一番気に入ったのを選べ。」

「え、えーっと、これかな？」

とりあえず一番最初に目についたものを選んだ。

「えー、それ男物やん。」

「って言われても・・・。」

「・・・。」

先輩は黙ってしまった。

「・・・彩音、うちには無理だ。」

「おれるのはやつ！ってか今のどこにおれる要素があったんですか？」

「じゃあないやろ。うちは元々こういうことには向いてないんだよ。美羽、あとは任せた。」

そういつて会長にパスをした。

「次は私の番ですね。じゃあ、まず藤井君の好きな色を教えてください。」

「好きな色ですか？うーん、強いて言うなら、青ですかね。」

「青ですか・・・ではこの中で可愛いと思うものを選んでください。」

い。」

会長は何枚かの服を持ってきた。

「え？可愛いものですか？えーっとこれですかね。」

ぱっと見た感じで可愛いと思ったものを選んだ。

「ではこの服を柊さんが着たらどう思いますか？」

「んー、似合ってると思いますよ。」

「では、私が着たらどうですか？」

「え、えーっと・・・。」

「正直に言ってくださいね。」

会長のイメージは清楚なお嬢様な感じなので、これはこれでありな気もするが、少しこの服のイメージとは違う気がした。

「えっと、ちょっとイメージと違うかな？」

「そうですか・・・。柊さん、これです。」

そういつて会長は一枚のTシャツを柊に渡した。

「えっと・・・ホントですか？」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・すみません。それっぽいことをしてみただけです・・・。」

「や、やっぱり・・・まあいいや、これに決定。文句なしね、後悔しないですよ。」

「い、いやそこまで言われると・・・。」

「藤井君に拒否権は無い！」

「じ、じゃあ聞くなよ・・・。」

「はいっ。」

柊はTシャツを精算し、俺に渡してきた。

「えっと・・・もしかしてこれって。」

「ん？優希への誕生日プレゼントに決まってるじゃないのお。」
さも当たり前かのように言ってきた。

「・・・やっぱりというべきか何というか・・・。」

予想通りといえば予想通りなのだが、なんだか周りくどくてつつこめなかった。

買い物を済ませ、俺たちはビルの外に出てきた。

「うーん。時間が余っちゃったなあ。先輩たち何かネタありますかあ？」

「どんな質問だよそれ。」

「そうですねー。たしか近くにケーキバイキングをしているお店がありましたよ。」

真面目に答える会長であった。

「お、いいですねそれ。」

「あゝ悪い、うちはパス。」

佐藤先輩はすまなそうに言った。

「ええーどうしてですかあ？」

「試合も近いのに、そんな甘いもん食べてる場合じゃないってこと。」

「もお、真面目なんですからあ。そんなこと言って佐藤先輩も食べたいんでしょお。甘いものが嫌いな女の子なんていないんですからあ。」

「スポーツマンはそういうのは食べへんの。そりゃ、うちだってシヨートケーキとかシフォンとかモンブランとかチョコとかマフィンとかマドレーヌとかベイクドチーズとかレアチーズとかミルフィーユとかザルツブルガートルテとかいろいろ食べたいけど・・・。」

何の早口言葉ですかそれは。

「え、えーっと・・・と、とりあえず佐藤先輩も食べたいってことなので、そこに決定ってことで。」

「ま、まあそこまで言うなら、付き合ってもいい、かな。」

そこまで言ったのは佐藤先輩です。

しかし一抹の不安が俺には残っていた。

「あ、あのおの俺も行くんですか？」

「もちろんだよお。」

「ま、マジですか……。あ、あんなところに男の俺が行くのか、しかも3人の女の子に囲まれて……。」

「いいじゃん、ハーレムだよおハーレム。」

全くハーレム気分は味わえないと思うが、流れで無理やり連れて行かれることになった。

「……。なんですよねえ。」

「そうなのですか？ 私は……。」

柊と会長は話が盛り上がっている。佐藤先輩はなんだかんだいって皿いっぱいケーキを盛りパクパクと食べている。

俺はというと、女の子同士の会話に入ることもできず、ものすごい疎外感を受けている。そしてこの店の中には男が全くとっていいほどこない。たまに見かけても恋人同士だったりする。

「俺がここに意味があるのか……。」

一刻も早くここから抜け出したいが、一度入ってしまったので元をとるまで食べなければものすごくもったいない。かといって男の俺がケーキを皿いっぱいに入れて食べていると、周りからの視線がかなり痛くなる。

というわけで、ただただ時が過ぎるのをじっと待っているだけであつた。

「ちょっと藤井君、聞いてるのお？」

ボーっとしていると柊に呼び掛けられているのに気が付いた。

「へ？ あ、悪い、聞いてなかった。」

「もお、ちゃんと聞いててよねえ。」

「で、何だったんだ？」

「なぜツンデレⅡツインテールなのか？という問題です。」

会長の口からそんな言葉が出てくるとは夢にも思わなかった。しかしなんだ、そのネットで物議を醸すような疑問は。

「なんでそんな話になったんですか？」

「まあまあ、細かいことは気にしない気にしない。で、藤井君はどう思う？」

「どうって言われてもなあ。確かにツンデレのキャラクターはツインテールが多いよな。でも逆にツインテールのキャラがツンデレっていうイメージは無いよな。」

「そう言われるとそうだよなあ。ツンデレだったらツインテールのイメージだけど、ツインテールが絶対ツンデレっていう感じはしないよね。でも金髪ツインテールは絶対ツンデレだよなあ。」

「そういうイメージは確かにありますね。」

「でも絶対ってことはないだろ。」

「うーん、思い返せばそうかもしれない……。むしろ半々？」

「結局このツンデレⅡツインテールの謎は謎のままなのですよね。」

「そういうえば現実世界にツインテールっていうのがほとんどいないよな。」

「そう言われるとそうだよなあ。」

「でも小学生の子たちが、たまにしているのを見かけることはありますよ。」

「ああ、そうかも。逆に大人がしてるとものすごく違和感があるよねえ。」

「もしかしたらそれもツンデレⅡツインテールの要因の一つかも。」

「どういうことですか？」

「ツインテールは子供がする髪型だから、ツインテールのキャラクターは子供っぽいっていうイメージを持たせるとか。」

「ああわかるかも。ツンツンしてるのもデレデレしてるのも確かに子供っぽいよねえ。」

「つまりツンデレⅡ子供っぽいⅡツインテールということですか？」

「まあ、これは俺の意見ですけどね。」

「けど、なんかいい感じにまとまったかもお。」

「そうですね。なんだかすっきりしました。」

自分の中でも、のどの中に突っかかっていたものがとれたような気

分だった。

「ツンデレの話でよくそんなに盛り上がれるな……。」

「それじゃあ、お疲れ様です。」

永遠とも思われるような長い時間も案外すぐに終わり、気付けば夜になっていた。

「おう、お疲れ。」

「また学校でお会いしましょう。」

先輩たちとは駅で別れ、柊とともに家路についた。

「いやあ、まさか会長とあんな話で盛り上がれるとは思わなかったよお。」

「そういえば、なんであんな話になったんだ？」

「えっとねえ、簡単に説明すると、社会のことを学ぶためにいろいろなジャンルを勉強したら、なんか気になったんだってえ。」

「そのいろいろなジャンルの中に、アニメも入ってるのか……。」

「なんかアニメは今後の日本を支えていく重要なメディアらしいよお。」

「……よくわからん。」

「だよねえ。まあでも、日本のアニメは世界でかなり人気があるからねえ。」

「んー、なんか社会って難しいな。」

会長の意外な趣味について盛り上がっていたら、いつの間にか分かれ道のところに来ていた。

「じゃあね、藤井君。月曜日それ忘れてきたらダメだからねえ。」
と言って柊は去っていった。

手に持っている紙袋のことをすっかり忘れていた。

「誕生日プレゼントか……。」

約10年ぶりの誕生日プレゼントである。

「なんか変に緊張してきたな……。」

小野坂の誕生日、当日。

朝のホームルームが始まる前に、小野坂にプレゼントを渡すことになった。

「優希、はいこれ。誕生日おめでとう！」

「うん、ありがとう。」

「へへ、中開けてみて。」

「うん。」

そうやって小野坂はガサゴソと紙袋を開けた。

「・・・えーっと・・・。」

中身を確認した小野坂は、少し反応に困っているように見える。

「どうしたんだ？」

柊の渡した紙袋をのぞこうとしたら

「あ、ちょ、見ないで！」

ズゴンとグーパンチがとんできた。

「いってー、なんで殴るんだよ。」

「・・・。」

小野坂の顔が赤くなっている。

「ふふん。優希は見る見るうちに成長していくからねえ。そろそろもう1サイズ上のものにした方がいいかなあって。」

今の柊の発言で何を買ったのかはなんとなく想像できた。

「っていうか、あの時ちょっと買ってたんだな・・・。」

「冗談はさておき。はい、彩夏からおめでとうだって。」

そうやって柊は綺麗にデコレーションされたクッキーを渡した。

「え、ありがとう。彩音ってこういうところはちゃっかりしてるよね。」

「まあねえ。ほらほら、次は藤井君の番だよお。」

そうやって俺の背中をポンと押す。

「え、あ、おう。・・・えーっと、た、誕生日・・・おめでとう。」

「う、うん。あ、ありがと・・・。」

二人の間に沈黙が流れる。隣で柊はにやにや笑っている。

「えっと・・・こ、これ、お返し、じゃないけど・・・。」

小野坂はバツと紙袋を押しつけてきた。

「？」

「私だけもらうなんて、なんかずるいから・・・。」

俺たちの光景を見て、さらに柊はにやにやしている。

「なるほどそういうことか。」

またまた柊の仕業だということはすぐに分かった。

「まあ、あいつの思い通りになったのは、なんか腹が立つけど、でも、普通にうれしいよ。ありがとう。」

「あ・・・うん・・・。わ、私も、トモ・・・藤井君に、ちゃんとプレゼントしたいって思ってたから・・・。」

小野坂の顔がさらに真っ赤になる。

俺の顔も傍から見たら真っ赤になっているのだろう。それくらい顔が熱くなっている。

「いいねいいねえ、青春はあ。」

二人でギツと柊を睨む。

「す、すみません。」

「と、ところで中身は何なんだ？」

「確かTシャツだよ。絶対にこれにした方がいい、って彩音が言ってた。」

「ま、まさか・・・。」

一抹の不安を覚えながら紙袋を同時に開ける。

「・・・。」

そこには俺が小野坂にあげたTシャツとおそろいのTシャツが入っていた。

「いいじゃんいいじゃん、やっぱパールックだよねえ。」

「・・・絞めるか。」

「うん・・・。」

「へ？あ、ちょ、は、話せばわか・・・うぎゃあああ。」

その後、柊の行方を知る者は誰もいなかった。

インターハイ

「えー、今日は私たちにとって一番重要な日です。この日のために毎日毎日頑張って練習してきたと思います。今まで自分がしてきたことを信じて悔いのないように頑張りましょう。それじゃあ、インターハイ予選、頑張っていきましょう！」

『はい！』

佐藤先輩の激励に合わせ、気合いを入れるように全員で返事をする。今日は高校生活の中でも一番盛り上がるであろうインターハイの予選日である。他にも大きな大会はあるが、高校生にとってはこれが一番重要であるだろう。

「ふむ、まあバトンとかその辺はあまり気にするな。確実に次の奴に回してやれ。この大会でやるべきことは決勝に残ることだ。わかったなあ？」

『はい！』

「じゃあ、ぱぱっと決めてきなあ。」

やる気なさげな声でリレーメンバーにアドバイスをしている女の人。この人がこの陸上部の顧問、河野先生である。

この人が練習に来ることはほとんど無い。しかし部員全員の癖などを知っており、たまに顔を見せては的確にアドバイスをしている。そしてこの人には教師以外にももう一つ顔を持っている。その正体はただのヲタクである。この人のヲタクとしての能力は俺たちの想像をはるかに凌駕しているらしいが、その実態を知る者は誰もいないと言われている。しかし、俺の周りにもヲタクって言うのは結構いるんだな・・・。

実はこの人自身、かなりの実力者であつたらしいが、本人はそれを語ろうとはしない。色々な意味で謎が多い人である。

ちなみに独身で彼氏募集中らしい。しかし募集しているにもかかわ

らず、全く女としての魅力を感じさせない。俺が言うのもなんだが・・・。

「あ、佐藤先輩、頑張ってください。」

先生の話しは終わったらしく、先輩はウォーミングアップの準備をしていた。

「ん？おう。まああんまり気を張らずに適当にやるよ。私たちには最終兵器がいるからな。まず負けることはないよ。」
と彩夏ちゃんを見ながら言った。

「確かにみんなの持ちタイムだけでも十分なのに、あの子のおかげでまた随分とレベルが上がりましたからね。でもバトンミスで失格とかしないで下さいよ。」

「大丈夫だよ。このメンバーでのリレーは初めてだからな。そんなに無茶はしないよ。」

女子のリレーメンバーは今までのメンバーでも十分に戦えるレベルであった。しかし4年生が抜け新しくメンバーを組みなおしていたのである。そのときに彩夏ちゃんが入り込んできた。そしてここに加わったことによって、さらにレベルが上がったのである。ということでこのメンバーで走るのは今日が初めてなのである。

「それじゃあ、頑張ってください。」

「ああ。お前も頑張れよ。」

そう言って先輩たちはウォーミングアップに向かった。

どの大会でも、だいたいリレーは一番最初の種目である。そしてリレーの次には400mがある。俺はその400mにでるわけであるが、リレーで結構時間を使うので、まだ少しウォーミングアップには早い。

「おい、藤井。」

そのとき河野先生に呼び止められた。

「はい、何ですか？」

「・・・・・・。」

謎の沈黙である。

「あの、何か……。」

数秒後。

「……いや、やめておこう。」

「ええ！ちよ、気になるじゃないですか！」

これだけ待たされて、この扱いである。

「今のお前には、特に言うことは無いと思ってな……。」

「じゃあ呼び止めないで下さいよ！」

「ふむ、では一つだけ。頑張れ！」

そう言ってグッジョブポーズをした。

「それってアドバイスですか？」

「いや、違う。」

「ですよね……。」

「まあ、それだけお前に期待しているということだ。」

「……すいません、どういう流れでそうなったんですか？」

「わからん。」

「……。」

なんだかよく分からない時を過ごしてしまった。さっさと行くという。

準備していた荷物を持ちサブトラックへ向かった。

サブトラックには多くの人がアップをしに来ていた。おそらく400mに出場する選手が大半だろう。

トラックを見わたしてみたが、すでに男女ともにリレーメンバーはメイントラックに向かったようである。最後に一言声をかけたかったのだが、まああの人たちなら問題ないだろう。

アップも終え、招集も終わり、400mのスタート地点で最後の準備をしていた。俺は1組目なので少し早めに来ていた。まだ男子のリレーをやっていたが、俺の高校はすでに終わっていたようだ。

「よう、藤井。」

「あ、伊熊先輩、どうも。」

俺を呼び掛けた声の主は同じ400mに出場する伊熊先輩であった。この人は県内の高校生の中で最も速いであろう人物である。去年の全国大会でも決勝に残り6位入賞を果たした。しかし、それでもこの人の上はまだ5人もいると考えると世の中は広いと感じる。

「どうだ調子は？」

「まあまあですね。」

なんともよくありそうな質問に適当に答えた。実際、調子が良いとも悪いとも言えないのでこれが的確であったのだが。

「まあまあか・・・。去年はそれで負けそうになったからな、用心しとかないとな。」

「ははは・・・。」

とか言っている先輩であるが、この人に勝ったことは1度もない。去年の最後の試合で勝てそうなところまでできたのだが、結局抜くことはできなかった。

「ま、当たるとしたら決勝だろうな。ちゃんと上がってこいよ。」

「先輩こそ予選落ちなんてしないでくださいよ。」

「お、言うようになったねえ。ま、決勝を楽しみにしてるよ。」

先輩はじゃあなと手を振って去っていった。

朝の日差しが徐々に上へと傾いて行き、適度な気温になってきた。

「それでは400mに出場の選手の最終コールを行います。まず1組目・・・。」

俺の名前が呼ばれ前へ出る。

「1組目の選手はすぐに準備してください。」

自分のレーンへ行きスターティングブロックを合わせる。

「すう、はあ。」

今までいろんな試合に出てきたが、この緊張だけは何度やっても収まることは無い。どんな試合でもスタートの直前は緊張するものである。むしろ適度に緊張していた方がアドレナリンがどうかで良

いらしい。

「それでは行きます。位置に付いて！」

いつものようにトントンとジャンプをしてから左足、右足の順にブロックに合わせる。頭をからっぽにして、審判の合図だけに耳を傾ける。

「よいい・・・。」

腰をスツと上げる。

競技場全体が一瞬無音になる。

『パァン！』

乾いた音が一瞬で競技場に広がり、それと同時に俺たちはスタートした。

「ふう！」

一歩目を踏み出した時に息がもれる。

一歩一歩いつものイメージで地面を押していく。このスタートがうまくいけば、基本的にずっと同じイメージで走ることができる。

予選で大事なことは、今日1日の自分の走りを作ること。この予選でちゃんとした走りができると良いイメージで走ることができる。

逆に悪い走りだと悪いイメージになってしまう。

「はっはっはっ。」

第2コーナーを回りバックストレートに入る。

スタートは良いリズムで入ることができた。このままいけば問題は無いだろう。あとは順位だけであるが。

「はっはっはっ。」

チラチラつと横を見る。

前との差はそこまでない。当たり前だが外のレーンの奴は俺よりも前を走る。

内側のレーンも後ろから追ってくるような感じはしない。

そのまま第3コーナーから第4コーナーを回る。このコーナーで外のレーンを抜き去る。

「はぁはぁはぁ。」

メインストレートに來た時には既に俺の独壇場であった。

「はあはあはあ。」

ワーという声援が耳に入ってきた。

いつの間にか競技場内が応援の声や歓声でいっぱいになっていることに気が付く。

「藤井く〜ん！ラストー！」

柵の聲がフツと耳に入ってきた。集中していたら普通は歓声すら聞こえないのだが、集中を切らしている証拠である。

もう一度頭をからっぽにして集中する。といっても体中に乳酸がたまってきて体がうまく動かない。どんな人間でも、だいたい40秒くらいで乳酸がたまってくるらしい。乳酸がたまると体は自分の意思に反して、いうことをきかなくなってしまう。

なので、このメインストレートは正直、気合と根性で乗り切っている。まあ他にもそれまでの勢いとか色々あるが。

「はあはあはあ・・・っ！」

最後にフィニッシュを決めゴールする。

「はあはあはあ。」

フツとタイムを見る。

「はあはあ・・・っ、マジッすか、はあはあ。」

まさかの自己ベスト更新である。

自分でもびっくりであった。そこまで本気で走ったつもりではなかったので、まさかの出来事である。

「ほい、お疲れ。いきなりやってくれるじゃん。」

伊熊先輩はポンポンと背中を叩いてそのままレーンへ向かった。

「はあ、頑張ってください。はあ。」

先輩は圧倒的な力の差を見せつけ悠々とゴールした。

「はあはあ、どうや。」

タイムは俺よりも速かった。それでもまだこの人は本気を出していない。まだまだ走りに余裕がある。

「は……さすがですね。」

「まだまだ後輩には負けられないからな。」

圧倒的な力を持つこの人に俺は挑もうとしている。

「なんか勝てない気がしてきた……。」

とぼそつとつぶやいたことは内緒で……。

次の準決勝までには時間がある。

少しダウンをしてベンチに戻ることにした。

「よう、お疲れ。」

「あ、どうもお疲れ様です。」

ダウンの途中で佐藤先輩と彩夏ちゃんにあった。

「おつかれさまです、センパイ。」

「一応、準決出場だな。」

「ですね。」

「まあ、お前なら問題なく決勝にいけるだろ。」

とか言って地味にプレッシャーをかけてくる先輩である。ただでさえ緊張するのにこんな所でプレッシャーをかけないでほしい。

「だいいいですけどね。」

と適当に返しておいた。

「センパイ、弱気になっちゃだめですよ！」

彩夏ちゃんは素直に応援してくれた。うん、彩夏ちゃんはいいい子だ。

「どうしたんだ？」

「あ、いや、何でもないです。」

藤井と別れて私たちは召集所へ向かった。

「私たちって結構まえの方だったよな。」

いまさらだがどの組で走るかあまり覚えていなかった。プログラムを見たときはサーッと読みとばしてしまっていたからである。

「はい。確か、センパイが2組目で、私は5組目でしたね。」

「2組目か……。」

組が先頭の方にあるとプログラムに書いてある時間通りにアップができるので楽である。男子の場合はプログラムの開始時間の30分後に開始などざらにあるらしい。

「じゃあ、そろそろ行くか。」

「そうですね。」

私たちは100mのスタート地点へ向かった。

「どうだ、初めての試合は？」

と彩夏に聞いてみた。考えてみれば彩夏が出た試合は先日の記録会のみであった。まあ、そこでの驚異的な記録を叩きだしたわけだが。

「なんか記録会と違って緊張しますね。でも緊張するけど、なんか楽しみです！」

緊張するけど楽しみ。そこは私と一緒にだな。やっぱりこういうことは楽しまなくちゃダメだよな。私の場合は緊張の方が勝っているが。「ここににいる人たちって、みんな各学校から選ばれた人たちなんですよ？みんな速いんだろうなあ。はやく走りたいなあ。」

「はは・・・。」

たぶんこの中で一番早いのはこの子だろう。というより、すでにこの子に勝てる高校生はいないかもしれない。

「佐藤さん。」

と後ろから肩を叩かれた。

「ん？おお、木嶋じゃん。久しぶり。」

ふと振り返り、そこに立っていたのは私の知り合いの木嶋だった。こいつは恐らくこの県で知らないものはいないであろう人物だ。それも当然で木嶋は前年度全国大会の100m優勝者である。いわゆる現女王である。

「久しぶり、元気にしてた？」

ハラハラと手を振って聞いてきた。

「まあな。そっちは？」

「実はあんまり・・・。」

と下に顔を向けて言った。

「そうか。」

「なんてね、冗談。てへっ。」

木嶋は舌をペロツと出し、手をグーにして自分の頭をコツンと殴った。

その仕草は見えていて身震いし、そしてなんだかムカついた。

「……」

一瞬、時間が止まる。

「あ、そうだ。彩夏、もう一回プログラム見せてくれないか？」

「はい、ちよつと待ってくださいね。」

彩夏もこいつは関わりと危険だということを覚ったらしい。

「……ねえ、ちよつと、ねえってば。」

「……なんだよ。」

できるだけ無視をしようとしたが、ここまですれまわると相手にしない訳にはいかない。

「もうちよつと、なんかいいツツコミないの？」

「ない。」

「考えてよ。」

「いやだ。」

「なんで？」

「あんたと知り合いと思われたくないからだ。」

「ええ、それはひどいよ。」

「いや、まあから思ってたけど、あんたのノリは結構めんどくさいっていうかなんていうか……」

木嶋は私にはわからない世界の住民の性格をしている。例えるならば彩音の言動をさらに理解不能にした感じだ。

「これって結構恥ずかしいんだよ。結構頑張ってるんだよ。」

「いいよ、そんなところで頑張らなくても。」

いちいち返事をするのも面倒だ。うん、なんか本当に面倒になってきた。

「あのお、ちょっといいですか。」

ちようどいいところ？に彩夏が入って来てくれた。

「あれ、その子って・・・？」

「ああ、今年入ってきた1年の・・・。」

「柊彩夏です。」

「柊さんかあ。私は木嶋、よろしく。」

「あ、よろしくお願いします。」

やっとまともな話になった。

ひとまず危機は逃れたようだ。ここはこのまま話を流していこう。

「確かあんたたち一緒の組だよな？」

自分の組は覚えていないのに、この二人が一緒ということは何故か覚えていた。

「ん？どうだったけ？」

木嶋は顎に指を立て、うーんと考えるしぐさをしながら言った。

自分は二人とも知っていたから目に留まったが、ふつう会う前の人のことを覚えている方が珍しい。

「あ、アタシ見てみます。」

彩夏はさっき取り出したプログラムをパラパラとめくった。

「あ、ホントだ。アタシと木嶋先輩いっしょです。」

「そっか一緒かあ、じゃあお互い頑張ろうね。」

木嶋はサッと彩夏に手を差し出した。それに答えるように彩夏も手を差し出した。

「はい！」

2人はガシッと握手をした。2人の目は何やら見えない火花を散らしている。

似た者同士というわけではないが、彩夏はこういうやつ扱いばかりしているのかもしれない。

「あ、ちよっと。」

そんなことよりも木嶋に言っておくことがあった。

木嶋を彩夏から離しコソコソと話した。

「一応言っておくと、あの子私より速いから。」

すると木嶋はさっきまでのおちゃらけた態度とは裏腹に、目が真剣になっていた。

「それってホント？」

コクンと頷く。

「へえ、そんな風には見えないけど。ま、あんたが言うんだから本当なんでしょうね。」

「ああタイムだけ見るなら、間違いなく全国トップレベルだ。」

「そっか、そう・・・ふふ、ふふふふ。」

木嶋は何やら意味深な笑い方をした。

「ど、どうしたんだ？」

「あなたも知ってるでしょ？ 私は相手が速ければ速いほど、燃える女なのよ。」

そういえば前にそんなことを言っていた気がする。その時は冗談なのか本気なのかよく分からなかったので聞き流していたが。

しかし木嶋がベストや良いタイムを出すときは、基本的に自分よりもレベルの高い選手と走る時である。コイツよりレベルの高い選手といえは社会人くらいだが。

「うー、そんなこと言われたら、早く走りたくなってきたじゃないの。」

「まあまあ、すぐに出番が来るから楽しみにしときな。」

ちようどその時、競技が始まった。自分の組もすぐに始まる。

「佐藤さん、期待してるから。」

にこっと含みのある笑いでそう言った。

「いつもそう言ってるけど、そんなに期待されても困るんだが。」

「ふふ、いいのいいの。いつかはあなたも分かるから。」

「結局それってどういう意味？」

「それはね、自分で考えるの。」

今まで何度も聞いているが、結局、今回も分からずじまいだった。

1組目はまだ準備をしている段階であった。2組目が始まるまでまだ少しある。といってもほんの数秒であるが。しかしこの待っている時間は非常に長く感じる。

ドクンドクンと心臓が高鳴っている。

ふう〜と息を吐き鎮めようとする、がなかなか治まらない。

「ったく、まだまだ予選だつてのに・・・。」

自分では分かっているけど、この緊張は抑えられない。

普通の人なら気にしない程度なのかもしれない。でも私に取ってはこの場から逃げ出したくなるくらいなのである。もともと、私は逃げもしないし、むしろなんでこんなにも緊張しているのかが分からない。彩夏ではないが、私も陸上を楽しんでやっているはずなのに。

「位置について！」

そんなことを考えていたら、いつの間にか順番になっていた。

頭を切り替えるために頬をパンと叩く。

「よい・・・。」

スツと腰を上げる、と同時にスーッと目一杯息を吸い込む。

『パン！』

その轟音と同時にスタブロをガツと蹴る。

20mを過ぎた辺りから自然に体が起き上がってくる。

目には見えないが、まだ左右には人の気配がする。だが、次第にその気配も消えていく。そしてゴールラインが近づいて来て・・・そのままラインを越えていく。

「はあはあ。」

タイムはあまり良くなかったが、一応1位で通過することができた。しかし、自分ではあまり納得のできる走りではなかった。まあ終わったことを悔やんでいても仕方がない。じきに彩夏と木嶋の組も来る。それまでここで見ているとしよう。

結果は予想通りといえば予想通りであった。彩夏が1位で木嶋が2位で通過した。

「・・・・・・・・。」

木嶋が黙って彩夏をじーっと見つめている。

「あ、あの、えっと・・・・。」

木嶋はふうくとため息をついて

「あなた、本当に速いのね。完全に油断してたわ。」

驚きとも怒りとも取れそうな声でそう言った。おそらく驚きは彩夏に怒りは自分に対してだろう。

「決勝では絶対に勝つから。覚悟しておいて。」

今までとは違う真剣な眼差しだった。

「・・・・・・・・はい！」

彩夏も真剣に返した。

木嶋はそのまま去っていった。

「しかし、あの木嶋の真剣な顔、久しぶりに見たな。」

「え？」

「あいつ、いつもはあんただけど、本気の際は別人みたいになるんだ。」

そう、怖いくらい冷静になって誰も寄せ付けないオーラを放っている。

しかし、今回はやけに早かった。いつもならもっと上のラウンドに行ったときになるのだが。

「それだけこの子が強いってことか・・・・。」
チラッと彩夏を見る。

「・・・・・・・・？私の顔に何か付いてますか？」

「いや、何でもないよ。」

木嶋が本気になった以上、今の彩夏でも勝つことは難しいだろう。もともと私自身も負ける気なんかないが。

競技場内を舞う風にサワサワっと木々が揺れる。日はすでに西に傾き空を赤く照らしている。

「・・・・・・・・。」

「決勝っていつもこんな感じだよなあ。」

「黄昏たくなりますよねえ。」

この夕日の感じと風のせいで感慨にふけてしまう。しかしこの感じは好きだ……。

「400m決勝に出場の選手は準備をしてください。」
審判が準備を促してきた。

「……は！」

いつの間にやらどこか遠くの世界に行っていたようだ。

「何やってるんだよ……。」

「いや、すいません、つい……。」

「まあ、分からなくてもないが……。さあ、ちゃっちゃと決着をつけますか。」

「そんなに簡単にはつけさせないですけどね。」

「ああ、ライバルが簡単にやられちゃ困るからな。」

こうして2人は決勝へ向かうのであった。

ドクン、ドクンと胸の鼓動が早く、大きくなっていくのが分かる。

「位置について！」

一度空を見上げ、深く息を吸い込み、そして一気に溜めこんだ空気を吐き出す。

ふと前にいる伊熊先輩を見る。

俺が4レーンで伊熊先輩が5レーンだ。俺が伊熊先輩を追いかけるという形になる。

もともと俺は追いかける方が好きだ。相手が見えているのと見えていないのでは、随分と気分が変わってくる。特に相手が速ければ速いほど、追いかけられるとかなりのプレッシャーになるのである。

「よい……。」

『パン！』

快音が辺りに鳴り響いた。

トン、トン、トンとリズム良く地面をけっていく。

次第に体が起き上がってくる。自然と前にいる伊熊先輩が目に入る。
「・・・！」

伊熊先輩のスピードが異常に速く感じる。というより実際に速いわけだが。

元々この人は前半からとばしていき、後半はそのスピードをそのまま維持していくタイプである。なので速く感じるのは当たり前と言えは当たり前だ。

しかし、簡単に言ったが、実はこんなことは相当レベルが高くないとできない。後半になれば酸素が足りなくなり、苦しくなってフォームも崩れ減速していく一方である。最初に力を使いきればますますフォームを維持するのは難しくなる。なので前半からとばしていくには、自分の実力にかなりの自信がないとできない。

しかし、この人はそれだけの自信と実力を持っている。だからこそこのようにことができるのである。

それでも、このスピードはいくらなんでもとばし過ぎである。このままいけば後半に本当に走れなくなってしまう。この人には何か作戦でもあるのだろうか。

さて、どうするか。先輩について行くことは可能だが、後半、潰れてしまうのは目に見えている。なにより、今からペースを上げると完全にリズムを崩してしまう。ここはこのまま自分のペースを維持し続けることにするべきだ。

もうすぐバックストレートを走り切り前半の200mを過ぎるところである。

まだ先輩のスピードは落ちてきていない。このバックストレートで先輩との差がかなり広がった。しかし、これくらいの差なら、まだ十分に追いつくことができる距離である。

ここからのコーナーが一番きついところである。カーブを走ること

によってスピードも少し減速し、体が徐々に動かなくなってくる。ここでスピードが落ち、そのまま最後まで減速したまま、ということとはよくある。なのでここが一番の踏ん張りどころと言ってもよい。コーナーの真ん中を過ぎたあたりで斜め後ろから風に押されるのを感じた。ということはメインストレートも追い風になっているはず。追い風であれば無駄な力を使わずにスピードを維持して走ることができる。

このまま風を味方につけることができればスピードに乗ることができ。しかし・・・。

300m地点。なかなか先輩との差は縮まらない。ここまで来たらどんな人でもスピードは落ちてしまう。それをどれだけ減速させずに走るか。それがラスト100mのカギになる。

この人が後半に強いのは知っている。それだとしてもこの距離が縮まらないのはおかしい。先輩は前半に100m選手のようにとばしていった。普通ならそれだけで後半は走れなくなってしまうのに、この人は少なくとも俺と同じスピードもしくはそれ以上で走っている。いったいどうなっているというのか。

その時ふわっと後ろから風に押される。心なしか先輩との距離がひらく。

俺と先輩の走力に差は無いはずだ。むしろ今なら俺の方が勝っているはず。しかし現実とは逆になっている。

おそらくこの原因は、先輩がこれだけの追い風の中、理にかなった走り方をしていること。

俺の今の走り方は陸上のやったことのない人が見ても、きれいとは言えないだろう。むしろ、これだけの距離を走ったあとにちゃんと走れる人の方が少ない。

しかし、先輩はどう見てもフォームが崩れていない。スタートして

からずっと、この綺麗な走り方を維持しているのである。

追い風の力を大きく受けるのはもちろん先輩の方である。それは俺と先輩の走力の差を僅かばかり拡げることができる。

一度はそう考えた。しかしそれでも、力を使い果たした先輩の走力が俺を上回っているのはおかしい。それとも単に俺が、この人と互角だと思い込んでいたのか。

「・・・つく、はあっ！」

最後の力を振り絞り、という表現は間違っているかもしれない。すでに最後の力は使いきっている。それでも動かない体を気迫で何とか動かそうとする。しかし前との差が縮まることは無い。

そしてゴールラインを越えたときには、優勝を確信した伊熊先輩が目の前にいた。

「はあはあはあ。」

両膝に手をつき肩で息をする。2人とも足りなくなった酸素を取り入れることに精一杯で、一言も喋ることができない。ワーっと言う歓声が辺りに響き渡ってる。

「はあはあはあ。とりあえず、はあ、一勝だな、はあ。」

「はあはあ、そうですね、はあ、でも次は、はあ。」

「ああ、はあ、楽しみにしてるよ、はあ。」

伊熊先輩は手を振りそのまま去っていった。

結局、俺は2位という結果になった。6位以内に入れば次の試合に進むことができるので、とりあえずこの大会での最終的な目標は達成できた。

「よお、藤井、惜しかったな。」

スタンドから河野先生が話しかけてきた。スタンド側から太陽の光が差し込み逆光になっているので、先生の姿はシルエットになっていた。

「どうだった？」

「・・・。」

それは何のことを聞いているのか、理解できなかった。

この結果について、自分の走りについて、あの人の走りについて、それとも……。

「……ふむ、お前がもし伊熊との実力差で負けたと思っているなら、それは間違いだ、と言っておこう。」

「……それってどういう意味ですか？」

「それは自分で考えるんだな。」

ふっ、と笑い言うだけ言って去っていった。

先生の言った言葉が頭をよぎる。

実力差で負けたわけではない。しかし同じ力を持った者同士が走れば、ああはならない。だとすれば一体どういう意味なのだろうか。

背中から吹きつける風は昼間と比べ若干涼しくなっており、空は真っ赤に染まっている。

「すごいですね。」

「ああ、そうだな。」

木嶋の顔はいつになく真剣だ。いや、こちらの顔が木嶋の本当の顔と言った方がいいだろう。

何者も近寄せないオーラを放ち堂々としている。これが木嶋の女王たる所以なのだろう。

「柊さん、予選での借りは返すから。」

離れた所に座っていた木嶋がこちらに来て彩夏に言った。

「……はい。でもアタシも負けません。アタシにはお姉ちゃんとの約束があるから……。」

「そう。でも、勝つのは私よ。」

木嶋は自分の力に絶対的な自信を持っている。そして、その力は真に絶対的である。だからこそ断言できるのだ、絶対に勝つと。

「……。」

木嶋が立ち去る時にチラッとこちらを見たが無言のまま去っていった。

俺が出る種目はすべて終わったので、スタンドから競技を観戦することにした。スタンドにはスクリーンに映し出される記録を書き写している柵がいたはずだ。

これだけ人がいると見つけるのは難しいと思ったが、案外すぐに見つかった。しかし柵は記録用の紙を手にも、ウトウトと頭を上下にさせながら眠っていた。

「なにやってんだ・・・」

とは言っても、この炎天下の中ずっと記録だけを書き写ししていたら疲れてしまうのも無理は無い。

この時期はどうしても雑用をマネージャーにまかせっきりになってしまう。

「しょうがない、俺がやつとくか・・・」

柵を起こさないように記録用紙をとる。ペンは何故かベンチの下に転がっていた。おそらく寝ているときに落としてしまったのだろう。記録が書いていないのは400mの決勝からであった。ということは、ついさつき寝てしまったということか。

自分の記録はさつき見てきたのでそれを書き込む。

「えっと、あとは・・・」

どの種目が残っているのかを確認したところ、残りは決勝の種目だけであったのですぐに終わりそうだ。

「それでは、女子100mに出場する選手の紹介をします。」

ちょうど女子の100mが始まった。

これに出ているのは佐藤先輩と彩夏ちゃんである。

タイムでは彩夏ちゃんの方が速いが、なにぶん経験が少なすぎる。数をこなしてきた佐藤先輩と比べればまだまだ初心者と言える。そして何より、あの人は全国の試合にも出場している。全国大会の空気というものを知れば、県予選くらいなら不思議と楽に走ることができる。この差は2人にとってタイム以上に大きいだろう。

そして、1番の壁は前年度全国大会優勝者の木嶋さんだ。全国トッ

レベル。その域に2人が達していないとは言わないが、それでも勝つことは難しい。

「それでは行きます。位置について！」

競技場内が、しーんと静まり返る。

観客としてこの場にいただけでもこの感じは緊張する。

「よい……。」

辺りはよりいっそう静まり返る。というより時が止まったという表現の方が近いかもしれない。

『パン！』

その轟砲とともに選手が一斉に飛び出る。

スタート直後、1人だけ飛び抜けた人がいた。木嶋さんである。

この人の強さはスタートの爆発力である。この人にスタートで勝てる人はそうそういない。そして長身から繰り出すストライド。それでいて足の回転が速い。これほど短距離に適した身体能力を持っている人は見たことがない。まさに天性の才能と言えるだろう。

しかし、天性の才能をもった人物があそこにはもう一人いる。彼女の力は未だ未知数だが、記録がその才能を物語っている。

「ふむ、難しいな……。」

「……！」

いきなり隣に河野先生が現れた。一体いつこの場に現れたのか、気配すら感じなかった。

「ちょ、ビックリするじゃないですか。」

「……ふっ。」

ふっ、ってなんですか、とか言っている場合ではなかった。

40mを過ぎたあたり。先頭は言うまでもなく木嶋さん。そしてそのすぐ後ろに佐藤先輩、彩夏ちゃんが並んでいる。2人ともスタートの爆発力は木嶋さんに劣るが、それ以外の走力は拮抗している。彩夏ちゃんは身長之差もありストライドは長くないが、ピッチが異

常なまでに速い。

ピッチが速いということは同じ秒数でも歩数が多くなるということである。歩数が多くなればストライドが短くても歩数分距離を稼ぐことができる。つまりストライドが大きい人よりも前にいける可能性もある。しかし、この100mという短い距離で稼げる歩数はほんのわずかである。

普通ならどちらかに偏るのではなく、両方共を無理しない程度に稼ぐ走り方をする。しかし、この子の場合は別である。目で見てはつきりとわかる回転数の違い。皆が1回転させている間に2回転しているのではないかと思うくらいの速さである。

対して佐藤先輩。この人はおそらく木嶋さんと同じく、全てにおいて長けているスプリンターである。そのことは誰が見てもわかる。それなのに木嶋さんとの差は、この高校生活では縮まっていなかった。それだけ木嶋さんがすごいのか、それとも……。

「ふむ、決まったな、あとは……。」
依然としてトップを走るのは木嶋さん。変化があったのはその後ろであった。

彩夏ちゃんのピッチが落ちてきている。

いや、そうではない。落ちてきているのではなく、隣を走っている佐藤先輩のピッチに合わせてしまっているのである。本人は無意識だろうが確実に2人の回転数が同じになっている。

「これじゃあ……。」

「ああ。……ふつ、経験の差だな。」

同じ回転数であれば、当然ストライドの大きい方が勝つ。徐々に差が開いていき、焦ってしまい余計に相手を意識してしまう。こうなってしまうのは元に戻すことは難しいだろう。

1、2、3ときれいに差が開いてきた。

残り30m。佐藤先輩と木嶋さんの差も縮まることは無かった。いや、むしろスタート時に比べるとほんのわずかだが、広がったように見える。

そして順位は変動せず・・・。

タイムはさすがと言うべきだったが、まだ彩夏ちゃんを持ちタイムの方が速い。

「なんていうか、凄いですね・・・。」

「ああ、木嶋は速さだけでなく強さも持っている。それがあの2人との差だな。」

「強さですか・・・。」

強さとは何か。陸上競技の中ではほとんどの場合、速い＝強いというイメージだったがそれは違うのだろうか。違うとしたら強さとは何なのだろう。

「痛っ！」

その時、背中にゴスつと何かが当たった。

ハッと振り返ると柊が不思議な格好をしていた。不思議というより完全に何かを蹴ったあとのポーズだが。

「んゝ・・・ねむ。」

「おーい、起きたかー？」

顔の前で手をヒラヒラさせる。

「・・・あと5分。」

「はあ、なに言ってるんだか・・・。」

「ふむ、それを現実で聞いたのは初めてだ・・・。」

「た、確かに・・・。じゃなくて、おゝい！起きろゝ。」

ゆっさゆっさと体を揺らして起こす。

「・・・？あれ、なんで藤井君が・・・。」

柊は目をこすりながら起きてきた。

起きた柊はクルクルと辺りを見回して状況を確認していた。

「え、あれ！？ちょ、えっ！なっ？」

「あゝ、大丈夫か？」

挙動不審になった柊をなだめる。

「う、うん。っていうか、えっとお・・・もしかして終わっちゃっ

た？」

「ああ。」

「これ、藤井君が書いてくれたとか……？」

「ああ。」

そっか、と顔を下に向けすぐ申し訳なさそうに

「ごめん、私……。」

柊はいつもふざけている、と本人に言ったら怒られるが、根は真面目なのである。というよりその真面目な部分をふざけて隠しているようにも見えるが。

「……大丈夫だって。俺も、もう出る種目なかったからな。」

「ううん、そういう問題じゃなくて……。私マネージャーなのに、その仕事もちゃんとこなせないなんて……。」

落ち込んでいた柊がさらに落ち込んだ。

「いいんだよ、いつも頼りつきりだからな。こんな時くらい手伝わせてくれよ。」

実際、本当に頼りきりなので、心配しているのは確かである。

「……うん。」

「ふむ、青春だな。」

隣で見ていた先生が冷やかしてきた。

「ちよっと、茶化さないでくださいよ。」

「いやいや、若いということはいいいことだ。この年になると恋愛なぞろくにできん。ふむ、ひとつ男でも紹介してくれないか？」

などとふざけたことを聞いてきた。もちろん紹介する気などない。というよりこの人と釣り合う人がどんな人なのか、逆に気になる。

「そんなこと生徒に聞かにください！」

「む、ダメか。それでは柊……。」

「ダメです。」

と当たり前のように返される。

「……そうか。ところで藤井。」

「何ですか？」

半ばあきれながら聞きかえした。

「あまりフラグを立てすぎるなよ。」

「それ、教師がするアドバイスですか……。」

「ふっ、分かっているいな藤井は……。」

恋愛相談も教師としての仕事だと言いたげだ。

「そもそも、そんなにフラグを立てたつもりは無いですけど。」

「主人公というものは、そういうことには疎いのだよ。」

「まあ、それは分かりますけど。っていうか主人公って俺ですか？」

「ふっ、分かっているいな藤井は……。」

さっきと同じセリフをもう一度言った。

「さて、そろそろ帰る準備でもするか。」

先生はそう言ったがすでに準備はできていた。

「って、答えてくれないんですか……。っていうかりレーは見ないんですか？」

「あのメンバーなら落ちることはまず無いだろう。」

「まあそうですね。」

「それに、今のうちに帰らないと、出遅れて渋滞に巻き込まれる。」

「そっちが本音ですか。」

試合が終われば観客も選手も一斉に帰る。そうなれば渋滞するのは当たり前である。

「ふっ、私もいろいろ忙しいのでな。」

「やっぱり教師って大変なんですか？」

「ふむ、今年に入って積みゲーが一段と増えたからな。」

「……。」

「まあ、あとは任せた、と佐藤に伝えておいてくれ。」

先生はさっさと帰ってしまった。

「ダメだあの人……。」

「えー、お疲れ様でした。今日はみんな良い成績を残せたと思います。残念ながら上のラウンドへ進めなかった人もいますが……。」

先生の言う通りリレーは男女ともに堂々の1位を飾った。特に女子のリレーは圧倒的な力の差を見せつけた。

「みんな、お疲れ様でした！」

『お疲れ様でしたー！』

ぼーっとしていたらいつの間にか集合が終わっていた。

「はあ、結局センパイ達2人ともに負けちゃった。」

「まあまあ、いいじゃない初めての試合なんだからあ。次、頑張るなさい！」

「むー、でもやっぱ、くやしいよ。」

先ほどのレースで負けたことがよっぽど悔しかったのか、彩夏ちゃんは今に愚痴を漏らしている。

「そんなに簡単に勝たれても困るんだが。こっちも3年の意地ってやつがあるからな・・・って、げえ！」

佐藤先輩は急に不思議な声を上げた。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。とりあえず私を隠してくれ。」

「いや、その言動は何でもあるでしょう。」

「いいから、黙っていてくれ。」

訳が分からなかったが、とりあえず先輩を隠すことにした。しかしどの方向に隠せばいいのか・・・。

「あ、木嶋センパイ。」

「お、柊さんじゃん。おつかれ。」

「つて、あゝあゝあゝ・・・。」

また佐藤先輩が奇声を上げた。

「ど、どうしたんですか？」

「はあ、もういいよ・・・。」

これまでの佐藤先輩の言動の意味が全く分からなかったが、とりあえずそこは流しておいた。

「佐藤さん、おつかれ。」

「・・・あゝあゝあゝおつかれ。」

「なに、そのびみよくな間は？」

「何でもないよ。」

目の前にいるのは先ほど100mで優勝した木嶋さんだった。この二人と知り合いというのは別に不思議ではなかったが、やはり佐藤先輩の言動は気になる。

「・・・・・・・・！」

その時サッと柊が俺の後ろに隠れた。

「どうしたんだ？」

「・・・・・・・・。」

俺が聞いても柊は答えなかった。

「ねえ、ちよつといいかな？」

木嶋さんが俺に話しかけてきた・・・・のではなく柊に話しかけていた。

「・・・・・・・・。」

「間違いだったらごめんなさい。あなた、柊彩音さん？」

「・・・・・・・・。」

柊は少し黙ってから答えた。

「やっぱり！うわあ、久しぶり彩音！元気だった？」

「・・・・・・・・うん。先輩も元気そうだね・・・・・・・・。」

「そりゃね。私はいつだって元気だよ！」

木嶋さんはガッツポーズをして見せた。

2人のやりとりを見ていて2人が知り合いだということはわかったが、なぜ2人が知り合いなのか疑問だった。

「あんたたち知り合いなのか？」

タイミング良く佐藤先輩が聞いてくれた。

「うん。えっと、いつからだっけ？もう3年前だっけ？」

「ううん。私の中1の時だから4年前。」

「そっかそっか、もうそんなに経つのか。いや、それにしても久しぶりだねえ。元気だった？」

「お前、さっきもそれ聞いただろ・・・・・・・・。」

木嶋さんは久々の再会で楽しそうだが、柊は若干元気がない。

「そっから、まだ陸上やってたんだ。高校に入ってからずっと見てなかったから、やめちゃったのかと思った。」

「……。」

相変わらず柊は無言だった。

「でも、あのままだったら彩音の勝ち逃げだからね。それでどうなの調子は？って試合に出てないってことは怪我かなんか？」

「あ、それは……。」

彩夏ちゃんが間に入って話を止めた。

それにしても木嶋さんの発言からして、若干、話が食い違っているようだ。

木嶋さんの質問は明らかに選手としての質問だ。しかし、柊は中学の時からマネージャーしかやっていない。それに中1の時に出会ったってことは……いったいどうなっているのか……。

「……柊さん？」

「……。」

間に入った彩夏ちゃんは黙ったまま何も話さなかった。

「……彩夏、いいよ。」

柊はフルフル震える彩夏ちゃんの頭をポンポンとなでた。

「ねえ、先輩。ちよつと長くなるけどいいかな？」

「……？別にいいけど。」

「……えつと、どこから話そうかな……。それじゃあ、私が陸上を始めたところから……。」

そうして柊はぽつぽつと話し始めるのであった。

柊姉妹の過去

場所、北海道。時期、4年前4月下旬。

この日は特別に暑かった。平年の気温を数度上回り夏日となっていたようだ。北海道のこの時期に夏日とは、一体世界はどうなっているのか。

目の前には真っ赤なグラウンドが広がっている。陸上競技場のトラックがなぜ赤いのか。赤い色は本能的にヒトを興奮させる。そんなことをどこかで聞いた。それがこの理由かどうかはわからないが、他に理由が思いつかない。だからたぶんこれで正解なのだろう、と今の状況とは全く関係無いことを考えていた。

「・・・・・・・・」

気が付いた時にはすでにトラックの反対側にいた。辺りは驚きの声が響き渡っている。それが何に向けられたのか、誰に向けられたのか、興味は無かった。

「ちよっと、柊さん凄いわよ！」

話しかけてきたのは先輩だった。先輩は私よりもひとつ前の組で走っていた。ゴールした後、そのまま私が走ってくるのを待っていてくれたのだろう。

「・・・・何がですか？」

「何って、あなた・・・・。ほら自分で見て！」

くいつと頭を回される。

そこには4つの数字が並んでいた。

「へえ、あそこからここまで来るのに10秒以上かかるんだ。」

「え？」

無論この数字が私の100mのタイムだということは分かっている。私なんかが10秒で走れるはずもない。だがこの距離を100mと知らずに走ったら、10秒もかからないような気がした。

「と、とりあえず、おめでとう柊さん！」

「・・・？」

そのおめでとうがどういう意味を持っているのか理解できなかった。

「だから、あなた全国に行けるのよ！」

「全国・・・ですか？」

全国大会。中学の陸上競技で全国大会に出場するには、標準記録というものがあり、それを突破しなければならない。その記録がいくつかは知らないが、どうやらこの記録はその標準記録とやらを上回っているようだ。

「でも、ほんとにビックリしたわ。中1の、しかも一番最初の記録会で全国行き決めちゃうなんて。」

競技場内に広がる歓声が驚きに満ちている。その理由のひとつがこれであるとのこと言葉で分かった。

中学1年生の私が簡単に突破できる標準記録なんだから大したことではないのだろうと思ったが、この驚きようからして大したことであるようだ。

「はあ、そうですか・・・。それじゃあ、私ダウンに行ってきます。」

「

え？あ、うん・・・。」

先輩の顔がキョトンとしていたが、なぜそうになっていたのか分からなかった。というより、むしろどうでもいい。

今日は記録会なので、競技が終わった人から帰ってもいいらしい。他の中学校は終わっても応援したり、最後にみんなで集合して先生のありがたいお話？を聞いたりしている。しかし私の中学校は、結構いい加減なのかそんなことは試合でしかない。

中学校なのにこんなことをしていたら、どっかから怒られそうだがとりあえず今日は早く帰ることができる。今日は見たいアニメがあるのにこの記録会のせいで見れなくなってしまった。一応、妹に録画を頼んでおいたが、あまり信用できない。しかし、この終わった人から帰ってもいいというシステム知った今、録画ができているかどうかの心配はいらずリアルタイムで見ることが可能であるのだ。

「ふう、帰るか・・・。」

ダウンを終えルンルン気分？で家に帰るのであった。

「ただいま。」

家の2階にある部屋。そこが私たち姉妹の部屋である。

「ん？、あ、お姉ちゃんお帰り。」

妹はテレビに顔を向けながら言った。

「また、それやってるの？」

妹がやっていたのは少し前に発売された格闘ゲームであった。

妹はこのゲームを買ってから部屋で一日中ゲームをしている。しかも、専用のコントローラまで買ってとことんまでやりこんでいる。

「だって、面白いんだもん。」

相変わらず、テレビに顔を向けたまである。

「そういえば今日試合で遅くなるんじゃないの？」

「その予定だったけど、今日は記録会だから終わった人から帰ってもいいんだって。」

「へえ〜そうなんだ。ねえ、陸上って面白い？」

突然、そんなことを聞いてきた。

「・・・どうだろ。わかんない。」

私が面白いと思うことは少ないと思う。というより他の人よりも面白いと思う度合いが低いかもしれない。私は基本的にどんなことに対しててもあまり興味を持っていない。それでも何かをやっているということは、少なからず面白いと思っているのだろう。

実際、陸上競技なんてただ走るだけのスポーツを、つまらないと思いがらできる人はいないと思う。少なくとも、私も面白いと思っていなければこんなことはしていない。ただその面白いが私にとって感じるものが薄いのだ。だからこんな返事になってしまった。

「ふ〜ん、そうなんだ。」

聞いてきたわりには適当な返事だった。

「あ、そうだ。この時間に帰ってきたってことは、テレビ録画しな

くていいんだよね。」

「ええ、もう大丈夫よ。」

「そっか、よかった。お姉ちゃんが帰ってくるまで、そのことすっかり忘れてたから。」

予感は的中していた。あのまま競技場に残っていたら、危うく見逃すところであった。どっちにしろ競技場に残る理由は無かったのだ。

数週間後。

その日、中学校体育大会の壮行会が体育館で行われた。

この時期になると毎年恒例のようにやっているらしい。各クラブのキャプテンたちが皆の前に立ち、一言ずつ意気込みや抱負などを語るという、なんとも見ている側としては暇な一時である。

暇すぎる。暇すぎるので天井をぽーっと見ていた。

『それでは、全国大会に出場する柊彩音さん、どうぞ。』

「.....」

天井の真ん中よりやや左側に、小さい穴が開いているのを発見した。この距離からだとは分かりにくいだが、穴の大きさはテニスボール一個分くらいか。

しかしなぜあんなところに穴ができたのか。どこかのクラブが練習中に穴を開けたのか。

体育館で部活動をするのはバスケットボール、バレーボール、ハンドボール、卓球くらいである。

バスケ、バレー、ハンド。この3つはボールの大きさからしてあの穴をあけるのは無理だろう。卓球は穴の大きさに比べると若干小さい気もするが、この距離からなのでもしかしたらピッタリサイズなのかもしれない。しかし卓球ボールで穴を開けようとするにはかなりの威力が必要であろう。というか卓球ボールで天井に穴をあけるなどできるのか。

っていうかボールで天井に穴をあけるなんて意図的にやっても無理

でしょ。

ということで振り出しに戻ってしまった。

『えっと、柊彩音さん？』

しばらく考えていたが、どう頑張っても人の手であそこに穴をあけるのは無理だろうという結論にたどりついた。いや、どうにか頑張ったら可能かもしれないが、そんなに暇な人はこの学校にはいないだろう。

「ちよっと、柊さん。」

隣にいたクラスメイトがツンツンと腕をつついてきた。

「ん、どうしたの？」

「呼ばれてるよ。」

「呼ばれてる？誰に？」

『えー、柊彩音さーん。いませんかー。』

司会役の生徒が私の名前を呼んでいた。

「えっと、何で？」

と、隣の子に聞いた。

「え、何でって……。全国大会に出るから？」

「えっと、一応そういうことになってるけど……。？」

「あー、えーっと、なんか言うんじゃないの？」

隣の子もなんだか状況が分かっていないらしいが、察するに全国大会に出場する私も一緒に壮行会をしよう、って話だろう……。

ってなんですと！そんな話は一言も聞いていませんよ。あー、いや話はあったかもしれないが、完全にスルーをしていた気がする。

『えっと、早く出てきてくださーい。』

「あ、い、いま行きまーす！」

タタツと駆け足で前へ出て行く。

司会の子からマイクを受け取る。しかし、何も準備をしていないこの状況。何を話したらよいのだろうか。

『あー、えーっと……。ぜ、全国大会なので、厳しい闘いになると思います。が、頑張ります……。一応。』

体育館の中はシーンと静まり返っている。

『えっと・・・い、以上です、はい。』

そう言っ、一応話を終わらせた。

パチパチと少しずつ拍手が鳴り始める。ペコっと一礼し、マイクを司会者に返し元の場所に戻った。

はあ、とため息をつく。

急な事でしかも話も全く考えていなかったもので、ものすごく緊張した。

「何も考えてなかったの？」

帰ってきたら、また隣の子に話しかけられた。

「考えてなかったというか、知らなかったというか・・・。」

一応知らせてはいたのだが、それを必要な情報として聞きとっていなかっただけである。ということは言わないでおいた。

||||||||||||||||||||

その日が来るのは案外早かった。

それまでに地区や県での試合など色々あったが、あまり記憶には残っていない。

記憶に残らないほど、あっけなく終わったのか。まったく関係のないことを考えていたのか。

短距離というものは主に100m、200m、400mのことを言う。400mというのはトラックをちょうど一周した距離である。ここまです短距離として位置づけたのなら、なぜ300mという競技がないのだろうか。100、200ときたら自然に300も作りたくなると思うが、なぜかそれをとばし400になってしまっている。300mという距離が得意な人もいるかもしれないのになんだか不公平な気がしてきたのである。

ところが調べてみたところ実際には300mという競技はあるようである。一般的にはやらないようだが公式の記録も残っている。そ

こまでするのなら300mも公式の競技として取り入れても良いんじゃないだろうか。

と、いうことを考えていたことは覚えている。

たぶんこれが原因です。何してるんだよ私、暇人ですかい？

だが、今回はそんなことを考える暇は無かった。というより、考えようと思わなかった。

全国大会の決勝。そこに並んでいる8人の走者。その8人は皆、最速にふさわしい実力を持っており、全員の力が拮抗している。だからといって私は何をするでもなく、いつもどろりに準備をしていた。しかし、いざスタートに着いたとき、私はふっと隣の人を見て思った。

あ、私、この人に負ける。

それは恐怖にも似た感情だった。

そんなことを思ったのは初めてであった。たとえ相手がどんなに速い人でも、そんな風に思ったことは無かった。それは勝ち負けに係なく、たとえ負けたとしてもその相手を脅威に感じなかった。たぶん次に走ったら勝てるだろう、とかそういう感じだった。

でもこの人は違う。勝てる勝てないの問題じゃなかった。負けるという結果しか目に見えなかった。

ゴールした瞬間、その人は私のわずか数十センチ先を走っていた。わずか数十センチ。それだけなのに、その距離とても長く感じた。

「お疲れ様。」

その人が私に話しかけてきた。

「いや、速かったわねえ、あなた。」

「はあそうですか。」

「うんうん、だってあなたが隣にいるとき、ものすごい怖い顔し

てたから、うわっ殺られるって思ったもん。」

「……。」

なんだか想像していた感じと全く違ったイメージであった。むしろ、さっきまでとは別人のようだった。

「うか殺られると思ったのは私の方です。」

「ん、どしたの？」

「え、あ、いや、そんなに怖い顔してました？」

「ええ、もう、こんな感じでまさに鬼の形相だったわよ。」

そう言っただけで彼女は指で角を作り、とても怖いとは言えない不思議な顔をした。

「……。」

「あー、私の予定では、そこであなたが笑って、こら笑う的な展開を予想していたんですけど。」

「そういうリアクションをとったほうが良かったですか？」

「あ、ううん、もういいよ。逆にいま笑われるとものすごく切ない。」

「はぁ……。」

すごく不思議な人だ、と思った。たぶんこの人は、私たちよりも少し先の時代を生きているのだろう。

「うーん……何でそんな顔してるの？」

「生まれたときからこんな顔でしたから……いや、生まれてから10年後にこんな顔になりました。」

「ほう、なかなかいいこと言うね。でも……。」

一呼吸置いて

「えいっ！」

という掛け声と同時に、私の顔をつまみグイングイン回してきた。

「ひよっほ、はひひやつへふんふえふふあ。」（ちよつと、何やってるんですか）

「いやあ、やっぱりどんなに面白いこと言っても、顔が笑ってないとね。」

いまだに顔をグイングイン回し続ける。

「いはひへふ。ひゃべへふはふあい。」（痛いですが、やめてください）

「ん、ああ、ごめんごめん。ま、いつか。」

「何がですか？ っていうか良くないです。」

「そうそう、まだ名前いってなかったよね。わたし木嶋疾風^{はやて}。よろしく。」

急に話を変えてきた。こういうのをマイペースというのだろうか。完全に自分の世界でしゃべっている。

「あ、疾風は漢字ね。私的にはひらがなの方が萌えな気がするけど、まったく分かってないよねえ。っていうか疾風だよ疾風。病氣の名前じゃない。確かに今はそんなイメージが薄れてきたけど、もうちょつと考えてほしかったわ。」

疾風。確かにこういう漢字で表すのは珍しいかもしれない。しかし、^{しっぶう}疾風と考えればなかなかいい感じはする。

「で、あなたの名前は？」

と聞いてきたので普通に答えた。

「・・・柊彩音。」

「柊彩音さんかあ。うん、いい名前だね。とくに柊って響きがいいよね。なんか、男の人だとかっこいいし、女の人だと綺麗な感じがするよね。」

「そうですか？」

「そうそう、それで思ったんだけど。」

また、急に話を変えてきた。

「その、敬語っていうのは無しで。」

「何ですか？」

「何でって、そりゃ私たち友達だからね。」

「友達ですか・・・。」

よくある話だ。しかし理由としては悪くない。

「ほらほら、早くタメ口に変えなさい。」

「別にいいけど。でも……。」

「でも、何？」

「木嶋さん2年生だよね。」

「うん。」

「私1年だけど。」

「……。」

一瞬、木嶋さんの時が止まった。

「だー、もう。いいいいいよ。もう決めちゃったことだし。それに友達ってことに変わりはないからね。」

それは構わないのだが、もし私が3年生だったら、ものすごく失礼なことを言っていたことになる。

「じゃあタメ口はそのまま、木嶋先輩って呼ぼうかな。いや、疾風先輩のがいいかな。」

「んー、どっちでもいいんだけどね。でも、できるだけ下の名前は……。別に呼ぶだけならいいけど漢字がねえ。」

どっちでもいいと言っているわりには、下の名前で呼ばれるのは嫌なようだ。

「じゃ、疾風先輩で。」

「ええー。」

「どっちでもいいって言ったじゃん、疾風先輩。」
「むう。」

自分のいまの言葉を少しだけ後悔しているようだ。

「ふふ、疾風せんぱーい。」

「こら、連呼するな。……あ。」

何かに気づいたように声をあげた。

「どうしたの？」

「ふふ、ううん何でもない。ま、いっかあ。うんうん。」

何に納得しているのか謎だった。

その後も疾風先輩の不思議ワールドにつれて行かれ、しばらく話し

こんでいた。

「よしっ、これでオッケーだね。」

携帯電話を向けあって、送信ボタンを押した。

昔のアドレス交換は結構めんどくさいものだった。一番初めは手で打ち込み、次からは、その人からメールで送ってもらいコピー&ペー스트。ここまでは良かったのだが、また別の人と交換するとき知り合いにアドレスを知っている人がいないと、また手打ちをしなければならぬ。

しかし今の世の中そんなことをせずとも良くなった。

この赤外線通信という画期的なイステクノロジーにより、ボタンひとつで相手にアドレスから電話番号まで遅れるようになったのである。

ヒトは常に進化し続ける生き物なのだと思ふ。

だがこの画期的なイステクノロジーにも欠点があった。それは赤外線通信の方法がいまいちわからないことである。方法と言うよりも、その赤外線通信をする画面に行く方法が分からないのである。

入学や、新学期など最初はアドレス交換をよくするので覚えているのだが、しばらくするとこの赤外線通信自体を使うことがなくなるので忘れてしまうのである。

しかし、やや戸惑いながらも、無事アドレス交換は完了したのであった。

「ん〜なにに、 a b b a a b — m i g i . m i g i . h i d a r i って何これ？」

私のアドレスを見ながら聞いてきた。

「たぶん知ってる方が凄いと思う。」

「ふうん、知らないネタはつままないわね。ま、アドレス交換できたし、いっか。」

ぱぱっと登録を完了してケータイを閉じる。

「じゃ、わたし帰るわ。また、メールしてよね。次に会うのは1年後。その時は、またいい勝負しようね。」

「大丈夫。次に勝つのは私だから。」

「さらっと凄いこと言ったわね……。ま、いいか。それだけ来年が楽しみってことだ。」

「うん。」

「じゃあね。ばいばい！」

ひらひらと手を振って先輩は去っていった。

しかし不思議な人だった。若干うつとうしくて、面倒くさかった。けど、面白い人だった。

|||||

「はあはあはあ。」

酸素を求め息を激しく吸い込む。

どれだけの本数を走ったのだろうか。

いつも通りに練習しているのに、頭がふらふらしてきた。

「柊さん、大丈夫？」

「え？あ、うん、だいじょうぶ。」

地元に戻ってから、私は自分でも驚くようなくらい練習を真面目にした。

今までが不真面目だったわけではない。なんと言えは良いのだろう。取り組む姿勢が変わったとでも言おうか。

「ねえ、今日の練習、いつもより辛くない？」

と、隣の子に聞いてみた。

「わ、私はいつも辛いんだけど。」

「そう……。」

今までなんとも思っていなかった練習が苦しく感じ、そして楽しいとも感じた。この二つは明らかに矛盾している感情である。

私は変わったのだろうか。いや、変わってはいない。ただ、元々興味を持っていたことに、純粹に感情を抱くようになっただけ。自分がしたいことや、やりたくないことは変わっていない。

私は最初から陸上が好きだった。それだけのことである。

一応言っておくが、私はMではない。

練習後、ある2人の同級生が話をしていた。

「あゝ、今日も一段ときつかった。死にそう……。」

「大丈夫？」

「だいじょばない。」

「じゃあ、大丈夫ね。」

「どういう解釈？」

「ねえねえ。このあと、どっか食べに行こうよ。」

「む、無視か……。しかし、その提案には賛成だ。どこ行こうか？」

「どうやら、どこか食べる場所を探しているようだ。」

「うーん、どうしよっかな。ねえ柊さん、どこかいとこない？」

「え、私!？」

たまたま通りかかったら、話を私に振ってきた。

私にそういうことを聞くななんて、珍しいこともあるものだ。こういう話題には、あまり参加したことがないので驚きと戸惑いがあった。

「いいところかぁ……。」

しばらく考えて

「ここは新作の出たベアーズにしよう。」

『え!？』

2人が同時に驚いた。

「新作って、あの見るからして、ちょろ辛そうで、着色料でも使ってるんですか、っていうくらい真っ赤な食べられるのか食べられないのかよく分からない、謎の物体Xのことですか。」

ひどい言われようだ。製作者もここまで言われるとは思っていなかっただろう。

「見た目と味は別だよ。」

と、隣の子が言った。

「いいこと言うじゃん。」

「って言ってみたけど、私もあれは食べたくないかも。」

「ええ、期待させておいてそれえ。食べようよ、物体X。」

二人は目を合わせ少し考えた。

「そこまで言うならいいけど・・・。」

「そうだね。柊さんがここまで言うの珍しいし。」

「ホント？よし、じゃあ、いますぐ行こう。」

ということで、三人でベアーズに行くことになった。

考えてみると、みんなどこかに行く、ということはこれが初めてかもしれない。

「こ、これが、物体Xか・・・。」

言っておくが商品名は物体Xではなく、レッドチリチリハバネーロである。名前にある通り、今はやりのハバネロとかいう激辛な唐辛子を使っている。

「ほ、ホントに食べられるの？」

「大丈夫でしょ。」

ぱくつと一口食べてみた。

食感は普通のハンバーガーと一緒に。そのハンバーガーの中に、ハバネロやらなんやらを混ぜ合わせたペーストが塗りとくってあった。それ以外にもパンとハンバーグにも激辛の要因となっている何かが混ぜ合わせてあるようである。

食べた瞬間にピリツとした辛さが舌に伝わってきた。そしてその後、口全体にヒリヒリするような辛さがくる。後から辛さがくるというよくあるパターンだが、確かに今まで食べたことのある激辛食物よりかは、いくらかランクが上である。

「うん、美味しいよ。」

「ほんと？」

「じゃあ、食べてみよっかな。」

二人がパクつと同時にかぶりついた。

「・・・・・・。」

二人はかぶりついたまま微動だにしくなり、額から汗があふれ出てきた。

「あ、あああ、ああ。」

口を大きく広げたまま、はあはあ言っている。

「だいじょうぶ？」

二人は首を横にフルフルと振った。

「ああ、あ、あああ。」

話すことも苦しそうだ。

二人は一気に水を飲み干した。

「あ、あ、あ、あ、あ。」

「ホントに大丈夫？」

「だ、だから大丈夫じゃないって……。」

なるべく口に振動が伝わらないように、ヒソヒソと話す二人。

「み、水を飲むだけで焼ける……。」

本当に苦しそうだ。しばらく口は聞けそうにないようだ。

「……食べる？」

二人の食べ残しを見て聞いてみた。

二人はがーっと首を横に振った。

「そう、じゃあ、いただきます。」

パクパクと一気に平らげた。いやしかし、うまかった。辛さも刺激的だったし、最近食べたジャンクフードでは一番美味しいと感じた。

「ひ、柊さん。よくそんなもの食べられるわね。」

なんとか、まともにしゃべることはできるようになったようだ。

「うーん、美味しいよ。」

「……な、なんか、柊さんのイメージ少し変わった気がする。」

「そ、そうね。」

「そうかなあ？ うーん、そうかも。ふふ、私は生まれ変わったのだよ。」

「……？」

二人は顔を見合わせて不思議そうにしていた。

久々に、というより、初めて友達と食べたご飯は美味しかった。わたくし、こういうところに来たの初めてなんです。とかいうお嬢様キャラとは違うけど、それに似たような感情だったと思う。

その後二人は物体Xがトラウマになり、しばらくベアーズ行けなくなったそう。

|||||

一年という時間はとても長く、そしてとても短く感じた。そして、勝負も案外あつけないものだった。

「.....」

ゴールした二人は顔を見合わせ、しばらく立ちつくしていた。勝ったのはどちらだったか。今の出来事をあまり覚えていなかった。その時は一瞬のように感じた。気付いたらここに立っていた。それは、先輩も同じだったと思う。

スタートした時には二人ともすでにゴールにいて、結果がどうだったのか、その過程がどうだったのか、理解することができなかった。しばらくして、掲示板に表示された結果は私の勝ちであった。

しかし、その勝利も、先輩の敗北も、お互いなんとも思わなかった。あまりにも今の出来事が不思議過ぎた。そのせいで感覚が鈍っているのだろうか。勝利の喜びも、敗北の悔しさも、どこか遠くへ飛んでいってしまった。

「あ、私が優勝か.....」

「そう.....みたいね。じゃあ私が負けたのか。」

「ということは勝ったのは私.....」

そんな当たり前のことを二人は口にした。

二人の周りは歓声で埋め尽くされているのに、それに気付くことはない。

二人はずっと立ちつくすのみであった。

|||||

「あーもう、悔しい！なんで？くっそ、だくくく！」
変な奇声とともにバタバタ悔しがる疾風先輩。

「へへへん、私の勝ちだよ、せ・ん・ぱ・い！」

子供みたいな挑発をし、喜びを全開に表現する。

「がく悔しい、っていうか悔しい、むしろ悔しい。」

さっきまで、どこかに遠くにあった喜びと悔しさが二人に戻ってきた。その瞬間、ぼーっとしていた二人はその感情が暴走し、まるで子供のようにはしゃいでいた。というより子供よりたちが悪い。はしゃぐのはまだ良いとして（ダメだろ！）場所がトラックの上だったということが問題であった。

「ふふん、私の勝ち揺るぎないものだよお！」

「むゝ、この敗北も、次の戦いの布石です。なのよ！」

「馬鹿め！その布石ごと、ことごとく打ち破るのみ！ふははははあ！」

周りにいるみんなの目線が痛い、その時は全く気にしなかった。あとで審判の人に怒られる羽目になったのは言うまでもない。

なんだかんだ言っていたが、中学で勝負できるのはこれが最後。今度の勝負は2年後の高校生になってから。そうおもうと少し寂しい思いがあった。

「はあ、高校まで彩音との勝負はお預けかあ。んー、なんか勝ち逃げでずるいわね。ま、しょうがないか。負けは負け。それは認めるし、何より楽しかったからね。」

「あれって楽しかったの？」

「無の境地に辿り着いた者だけが見ることのできる世界。そこで戦った私たちは何者にも屈しない強き心の力を手に入れた。」
また訳の分からないことを言い出した。

「ごめん、まったく理解できなかった。」

「ふはは、若いな少年。それでは私に届きはしない。」

「・・・負けたのそっちだけど。」

「ごめんなさい、それは言わないで。」

先輩はぺこりと頭を下げた。

「ふふ、うふふふ。」

「はははっ、あははは。」

二人は顔を合わせて笑った。あと2年という時間は長いからその分目一杯笑った。

二人でいた時間は短かったけど、一緒にいてとても楽しかった。だから、また二人で笑いたいと思った。

「ふふ、じゃあこれでお別れだね。」

「うん・・・。先輩、2年後またここで会おうね。」

「開催地が違うから、正確にはここじゃないけどね。」

「こら、いい雰囲気壊すな。いいんだよ全国大会ここってことで。」

「まあまあ、ボケは最後までいるでしょ・・・じゃ、ホントにこれで最後。バイバイ。」

「バイバイ、またね！」

こうして二人は2年後の再会を約束し、それぞれの帰る場所へ帰っていった。

北海道の我が家にて

「ただいまぁー。」

帰ってきたのは昼の3時頃だった。

試合が終わりその日に帰るというハードスケジュールではなく、1泊して午前中をゆっくり過ごし、ここ北海道に帰ってきた。

「おかえり〜。」

「って、あんたまた・・・。」

疲れて帰ってきた私の目の前にはゲームをする妹がいた。

「しょうがないじゃん、ゲームは私の命なんだから。」

「なんだかあきれるを通り越して感心するわ。」

どう頑張ったらこれだけのゲームがクリアできるのだろうか。

「まあね。で、どうだったの？」

いや、ほめてないし、その返し方はおかしい。

もちろん、妹の質問は全国大会のことである。

「ふふん、聞いて驚きなさい。わたくし柊彩音は試練を乗り越え、見事優勝を果たしました。」

「え、ホント!？」

「ホントもホント、まじ話よ。ほら、これを見なさい。」

といって、賞状をバンツと目の前に出した。そこには、でかでかと優勝の文字が書かれている。

「うわあ、スゴイ……。これ自分で書いてないよね。」

「書くか!」

と、すかさずツツコミを入れる。

「へへっ、でも、ホントにすごいや。」

「どうよ、少しは見なおした？」

「ははあー。これからはお姉さまと呼ばせて頂きたく存じますう。」

「うむ、よいぞ。我が妹として存分に働くがよい。……っとまあ

冗談はさておいて、普通に疲れてるのよねえ。」

「あ、じゃあ何か冷たい飲み物持ってくるね。」

「悪いわねえ、頼んだあ。」

トントントンと階段を下りて行く音が聞こえる。

ジジジとアブラゼミの鳴き声が部屋の中に入り込んできている。

さすがの北海道でもこの時期は普通に暑い。

この部屋にはエアコンがあるが、なぜかそれは起動していない。

「あ、暑い……。」

ピツとエアコンのリモコンで、スイッチをオンにする。

ゴォーっと勢いよく風が吹き出してくる。が、最初の数十秒は生暖かい風しかこない。

「……。お、きたきた。」

冷たい風が部屋の中をサーッと流れて行く。

顔を風の吹き出し口に近づける。

「はあゝ、きもちいいゝ。」

その時トントントンと階段を上がってくる音が聞こえた。
ガチャツと扉が開き

「お姉ちゃん、おまたせゝ。って何やってるの？」

「あゝ、ありがとう。そこに置いといてえゝ。」

コトンとコップを机に置く音が聞こえた。

「ふあゝ、気持ち良かったあ。」

ふと見ると、飲み物と一緒に水ようかんが置いてあった。

「お、気が利くじゃん。」

コップを手に取り一気に飲み干す。

「ぷはあゝ、生き返るうゝ。」

「お母さんが隣の木村さんに貰ったんだって。」

「へゝそうなんだ。」

しかし水ようかんは一人分しか用意されていなかった。

「あれ、あんたの分は？」

「あ、アタシはお姉ちゃんが帰ってくる前に食べたから。」

「そうなんだ。」

それなら気兼ねなく食べられる。

「頂きまゝす。」

チュルンと口の中に水ようかんを放り込む。

「ふわあゝ、甘々だよおゝ。」

今の私には最高の食べ物だった。

「食べていきなりで悪いけど、本気で疲れてるのよねえ。だからあ、
寝る！」

ベットにバタと倒れ込む。そして一瞬で眠りについた。

「は、早い・・・。」

彩夏は布団を私に掛け（実は暑かったのでやめてほしかった）コップと水ようかんの皿を片付け、また階段をトントントンと下りていった。

こうしてまた、いつもの日々に戻っていくのであった。

|||||

季節は変わって冬に・・・

「あ、ああ、さ、寒い・・・。」

年も明け、あと2ヶ月もすれば春休みがくる。しかしその春休みも、私たち柊家にとっては忙しい日々になるだろう。

まだクラスや陸上部の皆には言っていないが、柊家はこの春休みに引越すことになった。

引越しが決まったのは少し前のこと。理由は父親が転勤することになったのでそれに付いていく、というよくある話である。しかし、いざ引越すとなると複雑な気分である。そしてなにより、ここではないどこかで自分が過ごすということが想像できない。

「あ、お姉ちゃん。」

校門を出ようとした時、昇降口の方から妹がやってきた。

「あれ、彩夏。何やってんの？」

私の疑問は当然のことで、時刻は6時すぎ。部活動を終え、いま私はここにいる。授業が終わったのは3時ちょうど。掃除当番であったとしても3時20分には下校できる。そして彩夏は帰宅部である。帰宅部であればとっくの昔に帰っているはずだが、なぜか今ここにいる。

中学1年で帰宅部ってどうなの？と言いたいが、今は置いておこう。

「いや、実は友達とずっと話しこんでいて・・・。」

「え、いままで？」

「うん。ちょっと熱く語り合いすぎちゃった。」

「何をそんなに・・・って一つしかないか。」

妹の興味あることなんてゲームくらいしか思いつかない。

「よく何時間もそれだけで話がもったわね。相手の子もそんなにゲームが好きなの？」

「ん、口ではあんまり言わないけど、アタシの言うことがほとんど理解できてるから、相当ゲーマーだとおもうよ。ま、アタシには

敵わないけどね。」

エヘンと胸を張る妹。

「そこ、誇るところじゃないから。で、今から帰りってわけ？」

「うん。」

「はあ、ホントに呆れた子ね。」

「へへっ。」

褒めてません、とツツコミたかったが、面倒だったのでやめておいた。

「ま、いいわ。私も今から帰るから、一緒に帰りましょ。」

「うん。」

久々に姉妹そろって家に帰ることになった。

一緒に帰るなんて何年振りだろうか。小学校の時は時限数が同じなので、下校時刻が自然と同じになるのだが、それでもなぜか一緒に帰ることは少なかった。

だいたいの原因は、妹が放課のチャイムと同時にダッシュで家に帰るからであったのだが。

「ね、お姉ちゃん。引越し先の学校ってどんなところかな？」

ふとそんなことを聞いてきた。

「さあ、その辺の情報は全く聞いてないからね。」

「そっかあ。楽しいとこだといいな。そしてまたゲー友を……。」

「本当にそれしか頭がないのね……。」

そろそろ、このくだりも面倒になってきた。

「ん、あんなところにネコがいる。」

歩道の真ん中に野良猫らしきネコが堂々と座っていた。

タタツと彩夏はネコに駆け寄った。

「おーよしよし。いい子だねえ。にゃーにゃー。」

額をくいくいと撫でる。ネコは気持ちよさそうに、猫撫で声（ネコだから当たり前だが）でにゃーと声をあげている。

「あゝ、あんまり懐かせないでよ。」

「ん？お姉ちゃん、ネコ嫌いなのか？」

「いや、そうじゃなくて。懷いて家までついてきても、うちじゃ飼えないでしょ。」

柊家の人間で動物（犬や猫）が嫌いな人はいないが、世話やらなんやらで金が掛かったりするので、ペットは禁止なのである。結構ケチである。

「ん、なんで飼っちゃダメなのかなあ。・・・あっ！」

その時、妹の手からネコがピョンと跳びはねてトコトコと走っていった。

「こら、待てえ。」

あとを追いかける妹。

ネコは交差点の方へ走っていった。

交差点の信号は青から赤に変わろうとしている。

「あー、気をつけてよお。」

その時信号がパツと青から赤に変わった。

するとネコはピタツと止まった。

「お、赤信号が分かるのか。すごいなあおまえ。」

信号を理解しているとは、なかなか賢いネコだ。

信号が青に変わった途端、ネコはピョンピョンと跳びはねていき、あっという間にむこう側へとたどり着いた。

「あ！」

そしてそれを追いかける彩夏。

「あーあ、行っちゃった。」

彩夏が追いついたとき、ネコはどこぞへと跳びはねて去っていった。

私も渡ろうとした時、反対側にいるトラックに目がいった。どうやらこちらに曲がろうとしているようである。

私はまだ横断歩道の手前にいる。先に渡るかどうか少し迷った。

しかし相当急いでいたのか、私が渡るまえに曲がろうと勢いよくト

ラックを発進させた。

その時、ネコがどこからともなく目の前に現れた。

運転手はネコに気付いていない。

『危ない！』

二人の声が重なった。

妹はネコを助けるため、横断歩道へと飛び出す。

どう考えても、ぶつかる。それほどしか2つの距離はなかった。
でも、私なら・・・！

あの子のところまでは四歩で行ける。

勢いよく足を蹴り出す。

あと三歩。

運転手は飛び出した妹に気づき、ブレーキを踏む。

あと二歩。

しかし、踏み込んだ時間とブレーキが伝わる時間、そして完全に止まるまでの距離は、私たちにとってあまりにも長過ぎた。

あと一歩。

あと少しであの子に届く。

ネコをつかんだ妹は飛び退こうとした、が間に合わない。

あと零歩。

妹の体をガシッとつかむ。

トラックと私たちの距離は50cm。

そのままの勢いで横っ跳びする。

「きゃ！」

ドスンと左肩から落ちる。肩が焼けるように痛い。

その衝撃で妹はネコを放した。その隙にまたどこかへ行ってしまった。

「いった・・・、だ、大丈夫？」

「・・・へ？あ、うん、大丈夫・・・。」

ギリギリのところで衝突は免れた。そう思った。だが・・・。

直後、メシッという聞いてはいけない音とともに、激痛が左足を襲う。

「あああああ！」

「お、お姉ちゃん！？」

その激痛は、痛みという言葉では表現できないほどの感覚だった。

「あ、ああ、お姉ちゃん、あ、足が・・・！」

妹は泣きそうな声で言った。

左足がどうなっているか、確認する必要もないことになっているのは分かる。だが、見てしまった。

「うっ・・・！」

見た瞬間、吐き気が襲った。

それはどう見ても私のものではなくなっていた。

曲がってはいけない方向に曲がっている。

曲がらないところが曲がっている。

そもそもこれは本当に足なのだろうか。

「お姉ちゃん！」

「はは、見なきゃ、よかったな・・・。」

「あ、あ、ど、どうしたら・・・そ、そうだ、救急車！」

痛みは徐々になくなってきた。いや、アドレナリンにより痛みを感じなくなってきたただけだが。放っておいたら、確実にこれ

は私のものではなくなるだろう。それでも、あんな激痛を感じるよりはましだ。

少しずつ、意識がなくなっていく。

救急車がきたのは約10分後だったと思う。

その時は考えるという行為が、ほとんどできなかった。

どうやって救急車に運び込まれたのか。

いつ病院に着いたのか。

どういう手術をしたのか。

そして、いつからここにいたのだろうか。

|||||

「.....」

パチと目を開ける。意外にも寝覚めはよかった。

天井は真っ白で、部屋の中も白が基調になっていて、妙な感覚にとらわれた。

ここはどこ、なんていうよくあるセリフは言わないでおこう。もちろん、ここが病室であることは分かりきっていることである。

ベットの横で妹が付きっきりで看病してくれた、という跡も無く、この病室は私一人だった。

「まだ、こんな時間か.....」

横に置いてあった時計は9時をさしている。窓から外を見る限り、いまは夜のようなのである。そしてカレンダーは同日であることを示していた。

事故があったのは、おそらく6時半くらい。そう考えるとあれから2時間半しかたっていない。

その時ガラガラッと部屋の扉が開いた。

「あ、お姉ちゃん、気が付いたんだ。」

妹はいつもと変わらない口調だった。

「彩夏、こんな時間なのにまだ病院にいたんだ。」

「まあね。気付いた時に一人だと寂しいと思って。」

「そう、ありがと。」

「……………」

急に彩夏の顔色が変わった。

「どうしたの？急に黙って。」

「……………うっ、ひっぐ、お、お姉ちゃん！おねえちゃああああん！」
バツと私のところに駆け寄って来た。そして、大声で泣いた。まるで、子供のように。

「ごめんね！ごめんね！うわああん！」

「……………なんであんたが謝るのよ。」

「だって、だって、アタシのせいで……………」

「……………あんたのせいじゃないわよ。あれは私がちょっとドジっただけ。あんたは悪くない。」

「お姉ちゃん……………」

「むしろ、悪いのはあのトラックの運転手よ。くそ、あの運ちゃん、どこ見て走ってんだっ！の。こんど会ったら石版抱かして海に沈んでもらうわよ！」

「……………」

私は彩夏をギュッと抱きしめた。

「……………私は大丈夫。こんな怪我くらいで人生が変わるわけでもないし、それに、もし陸上ができなくなっても他にも楽しいことはいっぱいあるからね。だから、あんたが心配しなくてもいいよ。」

「……………」

相変わらず彩夏は泣き続けている。

「ほら、いつまで泣いてるの。そんな顔されたら、こっちまで泣きたくなくなってくるじゃない。だから、もう泣かないで。いつもの彩夏に戻りなさい。その方がお姉ちゃんも嬉しいから。」

「……………うっ、うん。」

そう返事はしたが、彩夏はずっと泣いていた。
どれくらいだったかは分からなかったが、ずっと泣いていた。

|||||

私の足の状態だが、トラックに踏まれたのは左足首より下。そのう
えは、いままでどおり私の足として機能している。しかしその下は
完全に私の足では無くなっていた。

私が手術室に運ばれた時、それはとても治せるようなものではな
かったらしい。切断という選択肢が一番の可能性だったという。しか
し、それはいま私の足にくつついている。私の足としては機能して
いないが、私の一部分としてここにある。

私の担当医として毎日来てくれている医者が、なんとか治してくれ
たようである。噂によると、結構な凄腕だとか。

「お、いたいた。柊さん、お見舞いにきたよ。」

ガラガラとドアを開けて入ってきたのは、陸上部の同級生たちだっ
た。

「ほら、これ。」

といって渡してきたのは、果物が山のように入ったバスケットだっ
た。

「なにを持って行ったらいいかみんなで考えてたんだけど、やっぱ
りこういうのしか浮かばなかった。」

はははと笑って山の中からリングを一つ取り出す。

「うん、ありがとう。」

「これ剥いてあげる。私、結構うでは自信があるんだよ。」

果物ナイフを取り出しスルスルスルと皮を剥いていく。皮は一定の
太さを保ちながら、途切れることなく下へと流れていく。

「おお、すごいすごい。隠れた才能だねえ。」

「ふふ、でしょ。」

リングは瞬く間に丸裸になった。

「よし、これでオッケー。」

綺麗に8等分されたリングを皿に並べる。

「はい、どうぞ。」

「うん、ありがとう。いただきます。」

パクッと一口で食べる。

中に詰まっていた蜜があふれ出し口の中に広がる。そしてリンゴに含まれる水分が喉を潤す。

「ふぁー、おいしい。」

残りの7切れもパクパクッと一気に食べきってしまった。

「あらら、もうなくなっちゃった。じゃあもう一ついきますか。」
そう言ってまたリンゴを取り出し、スルスルッと皮を剥く。

今度はみんなで分けて食べることにした。

その後も他愛もない話でみんなで盛り上がった。

気が付けばみんなが来てから1時間近くたっている。

窓から射していた赤い夕日も、いつしか外套の白い光に変わっていた。

「ねえ、もうこんな時間だけど、みんな大丈夫？」

「んーそうだね、そろそろ帰ろうかな。」

「うん、そうだね。あんまり長居しちゃ悪いしね。」

そう言ってみんなが帰ろうとした時、一人の子が私に聞いてきた。

「ねえ、一つ聞いていいかな？」

その子はとても真剣な表情だった。

「うん、何？」

「もう、陸上できないの？」

その質問は聞いてほしくない思いが半分と、聞いてほしい思いが半分だった。

「こら、そんなこと聞くなよ。」

「・・・ううん、いいよ。・・・正直言うと、いまの状態じゃ歩くことはできても走ることはできないって。」

私の足はかなりに深刻な状況らしい。肉は潰され、骨はぼろぼろに砕けていたのだ。今これがくっついていてというだけで奇跡に近いことだ。本当ならここに無かったかもしれないなかった。

歩くことですら困難かもしれないと言われたのだ。もう陸上はやっ

ていけないだろう。

「でもね、だからといって何か変わるって訳じゃない。別に自暴自棄になったり、ぐれたりしないよ。だって、私の周りには楽しいことがいっぱいあるからね。アニメ見たり、アニメ見たり。」

「アニメばっかかよ!」

「へへ……。まあ、陸上ができなくなったのは少し……。うん、すっごく悔しくて、すっごく寂しいけど、でも、私のやりたいこと他にもあると思うから。だから……。」

そこまで言って、私は言葉を切った。

だから、なんなのだろう? 大丈夫?

いや、大丈夫じゃない。

陸上をしていない私は、どうなっているのだろう。

昔ならそんなこと考えもしなかった。

私が陸上を始めたのはなんとなくだ。たまたまクラブ見学で最初に見たところが陸上部だった。特にやりたいことなどなかった。だから陸上部に入った。

でも、いまは違う。陸上が楽しいと思える。いや、昔もそう思っていたはずだ。ただそれに気付くことができなかっただけだ。

他のやりたい事って何? 分からない。

私の周りの楽しいこと。それは、友達と遊ぶこと、話すこと、一緒に何かを食べに行くこと。アニメを見ること。妹に付き合ってゲームをすること。他にもいっぱいある。

陸上もその中のひとつで、それがなくなっただけ。なんの変りも無い。100ある内の1がなくなっただけ。確かに変化は起こっているけど、それはたいしたことではないのだ。

でも、そうは思えなかった。その一つはとても小さいのに、抜け落ちることですの小さなものは大きな穴をあける。

「ど、どうしたの?」

いつの間にか、目からは涙がこぼれ落ちていた。

「え? あ……。わ、私……。」

楽しいことと、やりたい事は違う。

私のやりたい事は今も昔もずっと一つだけだった。
ギョツとこぶしを握る。

声は少し震えていた。

「私、陸上を続けたい、続けたいよ。やめるなんて嫌だ！ねえ、どうしたらいいの・・・わかんないよ・・・わたし、どうしたら・・・」

そんなことを聞いても、答えなんて返ってくるはずはなかった。
その答えを持っているのは私自身である。他人に聞いても意味は無い。しかし、いまその答えを導き出すことはできないでいる。

「・・・ごめん。私たちが、その質問に答えられない。でも、私たち頑張るから。柊さんに負けなくらい頑張るから。だから、大丈夫だよ・・・なんて言えないよね・・・ごめんね。」

「・・・私も、ごめんね。こんなこと聞いても、意味ないのにね。」
カチカチカチと時計の針が進む音が、しんとした病室に響く。

「へへ、私のせいで変な空気になっちゃったね。うん、わたしは大丈夫。」

「柊さん・・・。」

「強がってるの見え見えだと思うけど、私のせいでみんなが暗くなるのは嫌だから。だからみんなも私の強がりに付き合って。」

そう言って、私はニイッと笑った。

「ほら、みんなも笑って。ほらほら。」

みんなを無理やり笑顔にさせた。

「やっぱり笑顔が一番だよお、ふふふ。・・・私、どうしたらいいかわかんないけど、その答えが見つかるように頑張るから。」

「・・・うん。私たちも頑張る。」

私も皆も頑張るとしか言えなかった。答えの見つからない今、そう言うしかなかった。

そう言うことで、みんなは安心する。

それは偽物の安心感だけど、今はその安心感が必要な時である。い

つか本当の安心感が得られるように。

「それじゃあ、ね。」

「うん、ばいばい。」

そう言って、みんなは病室から出て行った。

みんなが出て行ったあと、私はそれまで我慢していた涙を流した。今はまだ答えが見つからない。いや、捜そうとしてもしていない。捜したくないのだ。陸上を捨てるのが嫌だから。

答えが見つかるのはまだまだ先である。だから、今のうちに泣いておこう。みんなが来たときに笑顔でいられるように。

その後、退院したのは春休みに入ってからであった。そして退院してすぐに引っ越しの準備に取り掛かった。

みんなには引っ越しのことは伝えずにおいた。最後までいつもどおりに過ごしたかったから。

妹も同じこと思ったようで、引っ越しのを知っているのは教師だけであった。

知らせるのは新しい学期が始まってから。みんなからは激しいブーイングが来そうだが、やっぱり知らせない方がいいと思った。なんだか申し訳ないことをした。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「ん？」

部屋の片づけをしていると、ふいに妹が話しかけてきた。

「……………」

話しかけてきたのに黙り込んでしまった。

「どうしたの？」

「……………うん、何でもない。」

「……………そう？」

片づけが忙しかったので、気にしなかったが、その時の妹の顔は真剣だった。それなのに、その真剣な顔つきの中に少し迷いがあるように見えた。

「だいたい終わりね。」

「うん。」

引っ越し屋に運んでもらう荷物は全てまとめた。

片づけた後の部屋を見るともの凄く殺風景だった。でも、この部屋には匂いが残っていた。私たち姉妹がここで過ごしていたという匂いが。

|||||

数日後

私たち柊家は新しい土地へとやってきた。今日から私たちはここに住む。

その日はいろいろ大変だった。大抵のことは引っ越し屋さんがやってくれたが、生活用品などの配置は私たちですることになった。

この春休みは、なんだかんだで引っ越しの片づけや学校への手続きなどがあり、あって無いようなものだった。

そして新学期

クラス替えの時期に転向すると言っても、同じ学年の子なら結構みんな仲がいいし、少し入りづらい雰囲気はあった。

「えー、今日からこの学校に転向してきた、柊彩音さんだ。」

「えっとお、柊彩音です。えー、皆さん、よろしく願いします。」

と普通にあいさつをした。

「それじゃあ、この列の一番後ろの席に座ってくれ。」

あっけなく自己紹介は終わった。

まあ、実際こんなものなのだろう、と思いながら席に着いた。

窓側から2番目の一番後ろ、そこが私の席だった。左には男の子、右には女の子がいた。

「よろしくね。」

右側の女の子があいさつをした。

「うん、よろしく。」

左にいる男の子にも挨拶をしようとしたが、その子はぼーっと窓の外を眺めていた。

「あのお、よろしくね。」

男の子は振り向いて

「ん、ああ、よろしく。」

と言ってまた窓の外を眺めた。

この人の第一印象は変な人だった。

しかし、実際そう思ったのは最初だけで、話していると普通すぎるくらい普通だった。

さて、これは恒例の行事とでもいうのだろうか。

新学期（1学期）の体育は必ずつとていいほど陸上競技をする。陸上競技はどんなスポーツにおいても基礎となる動きが多い。だからこそ、初めにやるのだろうが、今の私にとっては酷なことだ。

「よし、これから50m走を行う。出席順に2列に並べ！」

先生の合図と同時にバババつと移動をする。

私の順番は12番目だった。一組また一組と少しずつ順番が回ってくる。

今はもう普通に歩けるようになった。でも、走ることはできない。いや、まだ試していないから分からないが、たぶん走れない。医者もそう言っていた。もう、走ることはできない、と。

それでも走れるような気がした。私の頭の中では、走るイメージができている。そのイメージ通りに走ることができる。

「つぎ、柊、平井。準備！」

私の順番が回ってきた。

あの時のイメージを思い起こす。

いつも通りだ。なにもかも。怪我をしていたことすら忘れそうなくらい、いつも通りだ。

「位置について。」

神経を研ぎ澄ます。

雑音をすべてシャットアウトする。

聞き入れるのは先生の声とピストルの音のみ。

「よい……。」

スツと腰をあげる。

『バアン』という轟砲とともに、後ろの右足を押し出す。

次に前の左足で、スタブロをグツと押す。

しかし、思うように力が入らない。

「……！」

そのせいで左右のバランスが崩れる。

3歩目の右足の着地で、何とか持ち直す。だが……。

「きゃ……！」

4歩目の左足。設置することはできた。しかし、そのまま左足は崩れ落ちる。

力が入らない。どんなに踏ん張っても、力が抜けていく。

私はバランスがとれずに、そのままの勢いで左肩からくるっと一回転して、ドスッと尻もちをついた。

「柊、大丈夫か！」

先生が駆け寄ってきて、どこか怪我をしていないか確かめていた。周りではみんながザワザワとしている。

「あ、えっとお……えへへ、失敗失敗い。」

と笑ってみんなに見せた。

「柊さん、ホントに大丈夫？」

「うん、ヘーキヘーキ！私の体、結構丈夫にできてるんだからあ。」

「本当に？」

「うん。」

「そっか、よかった。」

みんなはほっとした様子で元の場所に戻った。

「へへ、今度から気を付けるよお。」

とりあえず、みんなを安心させて私も元の場所に戻った。

実際にけがはしていないし、大丈夫なのは本当のことだ。しかし、それ以上に私には気になることがあった。

あの感覚。本当にあれは私の足なのか。今はどう見ても、私の足として機能している。だが、あの一瞬だけ、これは足として機能しなかった。

その時、わたしは初めて実感した。本当に走れなくなったのだと。

昼休み

前の学校では給食だったが、ここの昼食はお弁当を持参で食べるのが主流らしい。購買にはパンも売っているが、量はかなり少ない。クラスには6つの班がある。一つの班はだいたい6、7人くらいで成っている。クラスを真上から見ると、ちょうど真ん中に真横に線を引き、そして2列ずつ縦に切ると班が出来上がる。

昼食中は、この班で机をくっ付けあって食べる、という形をとる。ここの部分は前の学校と同じであった。

机をくっつけると、目の前に来るのは、あの窓の外見ていた子。普通すぎる普通な男の子だが、今はどこか遠くを見ている気がする。

「なあ、柊さん。」

その男の子が声をかけてきた。

「ん、どしたの？」

「陸上、やってるのか？」

「・・・！」

その言葉に、食べかけていたご飯を吹き出しそうになった。

「ど、どうして分かったの？」

「いや、スタブロ合わせるときに、ちゃんとしていたから。」
なるほど。たしかにスタブロの合わせ方はちゃんと習うけど、覚えている人は少ない。私はいつも通りに合わせていたので、それで分かったのかもしれない。

「でも、それだけじゃ陸上やってる、なんて分からないんじゃない？」

「んゝ、それ以外にも、動きが陸上部っぽい感じだった。特に・・・」

「特に？」

「最初の1歩目。あの動きは凄いと思った。たぶん、俺以上だよ。」

「転んだのに？」

「ああ、転んだのに、だ。転んだのに、あの1歩が凄いと思ったんだよ。」

この人はあの一瞬の出来事をそんな風にとらえていたのか。

「あ、でも、私はもう陸上やってないよ。」

「そうなのか？なんでやめたんだ？」

それは、あまり聞かれなくなかった。

「んゝ、まあ、色々あったんだよお。」

「色々か。まあ言いたくないこともあるんだろうし、これ以上は聞かなでおくよ。」

「そうしてくれると助かります。」

この人も何かを察してくれたようだ。とりあえず何とかごまかしてその場をやり過ごした。

放課後、私はグラウンドに来ていた。理由はあの男の子の言葉が少し気になったからである。

たぶん彼の言葉からして、彼は陸上をやっているのだろう。だから何なのだ、という話なのだが。別に彼の走っている姿を見たい訳ではない。もしそうだとしたら、もしかして・・・。

顔がカーッと熱くなる。

「な、な、何を考えているのだ私は。」

と、つい心の声を声に出して言ってしまった。

幸い周りに人はいなかった。

ともかく理由は他にある。たぶん・・・。

くるっとグラウンド見わたす。そこではたくさんのクラブが活動を

していた。

グラウンドの真ん中にサッカー部。その周りを陸上部。そして陸上部のトラックの南側に野球部。反対側にソフトボール部。

東側にはプールがありそこには水泳部が。結構丸見えだ。けしからん。

そしてプールの横にはハンドボール部とバスケット部のコートが。体育館が使えない日はここで練習するらしい。

この学校の校舎はコの字になっていて、西側が教室棟。東側が職員室や実験室、音楽室などがある棟になっている。コの字の縦の部分は、1階が昇降口で、2階は棟を繋ぐ渡り廊下となっている。1階の昇降口からも、隣の棟に行くことは可能である。その棟と棟の間、コの字の真ん中にテニスコートがある。コの字の空いているところは、その入口となっているのだ。ちなみに、この入口の部分も棟と棟を繋ぐ渡り廊下となっている。

なぜこんな場所にテニスコートがあるのかは謎だが、よくボールが教室に飛んできたりする。なので結構危険だったりする。しかし、何故かガラス窓が割れたことは一度もないとか。謎だ……。こう見ると、この学校は結構大きいということがわかる。

さて当初の目的の、窓の外を眺める彼だが……。って当初の目的じゃないって！と自分にツツコミを入れる。

「ラスト一本！」

『はい！』

グラウンドに響いた大きな声。その主が彼だった。

他のクラブも声を出して頑張っているが、彼の声はその中でも一際目立っていた。

ラスト一本。彼らが今までに何本走ったかは分からないが、見ただけで相当疲れていることが分かった。

「ラストいきます。よいい、ゴー！」

マネージャーの合図と同時に、一斉に走り出す。

人数で言えば5人。その集団の中から1人飛び出した。彼だ。彼はそのままスピードを維持して、トラックを回っていく。

速い。彼の走りを見た率直な感想だ。皆、彼の走りに追いつけずにいる。これまでの疲労が溜まっているからなのか、それとも彼自身が単純に速いのか。おそらく両方とも正解だ。持久力も、加速力もある。だからこそ、見た瞬間に速いと思ったのだ。

彼がゴールした時、彼らはまだ遙か後ろを走っていた。

彼は速かった。でも、何かが足りないと感じた。彼の走りは全国でも通用する。しかし、それは通用するだけであって、勝てる訳ではない。私があるとき感じた雰囲気、彼は持っていなかった。

「何やってるんだ？」

「へ？うわ！」

いつの間にか彼が私の目の前にいた。

「そんなに驚かなくてもいいだろう。」

「あはは、ごめん、ごめん。」

「で、何やってたんだ？」

「えーっとお、何って言われるとお・・・。」

あなたをずっと見ていました。つてもうそれはいい！まあ実際見たわけだが。

「・・・？」

「ああと、ごめん、ごめん。また一人で妄想しちゃったあ。」

「また？妄想？」

「わあ！わあ！いやいや、気にしないで気にしないで！」

慌てて誤魔化す。

「・・・で？」

「あー、えっとねえ・・・。」

ここは正直に言うでしょう。

「あなたの走りを見てたの。」

「俺の？なんで？」

「んー、なんでだろお？」

「俺に聞くなよ・・・。」

そりゃそうだ。私も分からないのに、彼が分かるはずがない。

「・・・陸上、やめたんだったよな。」

突然、またあの話を持ち出してきた。

「なんで辞めたのか、っていうのは聞かないでおくよ。聞かletく
なさそうだったしな。」

彼はなにか考えているようだった。そして・・・。

「よし、マネージャーになれ。」

「へ!？」

それは想像もしない言葉だった。

「お前が走れないなら、いや走らないなら、俺がかわりに走ってや
る。」

「な!？」

「よし、ついてこい。」

といって、腕を引っ張られる。

「みんな、今日からマネージャーとして陸上部に入ることになった、
柊彩音さんだ。」

「ちょ!え!？なんで!？」

勝手に話を進めないでくれー。

「柊さん、よろしく。」

と手を出された。

「あ、よろしくお願いします・・・じゃなくて!」

「よし、じゃあ今日の練習はここまで。お疲れ様でした。」

『お疲れ様でしたー!』

みんなが散り散りに去っていく。

「あ、ああ!ちよつと、あのお・・・。」

すでに話を聞いてくれるような状態ではなくなっていた。

「・・・なんで?なんでこんなことしたの!？私は・・・。」

そのあとの言葉は出なかった。

「ごめん、最初に謝っておくよ。でも明日から、ちゃんと毎日来て

くれよ。最初は見てるだけでもいいから。」

正直ムカついた。わけがわからなかった。何がしたいのか。

みんなに言ってしまった以上は部活動に参加しなくてはならない。私は渋々グラウンドに顔を出すことにした。

グラウンドにいるとき、私は本当に見ているだけだった。

陸上部に所属している以上帰るわけにはいかない。しかし、マネージャーとしてここにいるのに、何もしていない。

最初はよかったが、日が経つにつれて、仕事をしない私をみんなはよろしく思っていなかったようだ。それもそうだ。何もしない奴なんてただ邪魔なだけだ。

それでも嫌だったのに、みんなが走っている姿をずっと見ていなければならぬ。私にとってはこっちの方が苦痛だった。

本当に彼は何がしたかったのか、苛立ち以上に疑問に思った。

何日かの後、練習後に彼が話しかけてきた。

「柊、ごめんな。」

「なによ、いきなり。」

本当にいきなりだった。

なにに対して謝ったのか。だいたいの想像はついた。でも、謝るくらいなら、こんなことやめてほしかった。

「やっぱり辛いよな。」

その言葉に私は少しイラッときた。

「分かっているなら、最初からこんなことしないでよ!」

そんな言葉を見無視して、彼は話し続けた。

「お前の顔を見ると、ホントに陸上が好きだったんだって分かるよ。」

「だったら、なんで!? なんでこんなことしたの! 走れないの分かっているのに、なんで!」

私は声を荒げた。

「・・・俺は、お前がホントに陸上が好きだって分かったから、だからやめてほしくなかった。どんな立場でもいいから、陸上を続けてほしかった。・・・でも、それは間違ってた。それはお前を苦しめているだけだった。ただの、俺の自己満足だった。陸上と繋がってるだけでいい、っていう俺の勝手な解釈だった。・・・ごめん。」最後にそう加えて彼は言った。

「もう、無理して来なくていいよ。皆にはちゃんとっておくから。ごめん。」

また彼は謝った。そして私の前から去っていった。

「・・・・・・・・」

次の日、来なくてもいいと言われたのに、私はここに立っていた。何故ここにいるのか分からなかった。

なぜ私はずっとここにいたのだろうか。

見ていることが辛いのに、走れないことが辛いのに、私はずっとここにいた。

なんで？

辛いなら、ここから逃げ出せばよかった。来なければよかった。彼と話をしなければよかった。なのに私はここにいた。

なんで？

分からない。あの時から何も変わっていない。ずっと分からないでいる。どうしたらいいのか。

それでも私はここにいます。

それは答えなのか。

半分正解、半分間違い。

私はここが嫌いなのに、ここにいたい。

ここにいたいのは、陸上が好きだから。
ここが嫌いなのは、陸上が嫌いだから。

ならば私の取るべき道は一つ。

答えなんて必要ではなかった。答えは永遠に導き出されることは無い。常に矛盾が生じているなら、それは答えではないのだ。

私は道を選ぶだけで良かったのだ。矛盾した答えに辿り着くまでの、二つの道のどちらかに。

ならば私の取るべき道は一つ。

最初からそれしかなかったではないか。

「わたし・・・マネージャーやります!」

みんなの前ではっきりと言った。

「だ、だいじょうぶ?」

一人が心配そうな顔をして聞いてきた。

「む、私は頭なんか打ってませんよお。」

「そんなこと言ってないって。」

「へへへ、でも、ちゃんとやっておきたかったから。」

「・・・?」

みんなは不思議そうな顔をしていた。

そして彼は聞いた。

「・・・どうして?」

「そんなの、決まってるよ。」

そう、決まっている。ずっと前から。

迷いはあったかもしれない。

後悔していたかもしれない。

間違っているかもしれない。

それでも私の声は、はっきりと進むべき道を示していた。
「私、陸上が好きだから！」

柊姉妹の過去 後

「今でもこの道は間違いなんじゃないかって思う。でも、それでも、たとえ間違っていたとしても、私はこの道を選び続ける。それが、私の決めたことだから。」

柊の話が終わった時には、すでに空が黒く染まっていた。競技場には俺たち以外、ほとんど残っていなかった。

「そう。だったら、あなたはもう後悔したらダメよ。妹さんのためにもね。」

「・・・？」

柊は木嶋さんの言っていることが、半分理解できていないようだった。

「あれ？彩音の意思を妹さんが継いだのだと、私は思ったんだけど。」

「私の・・・？そうなの？」

と柊は彩夏ちゃんに聞いた。

「えーっと、一応そのつもり？」

「なんで、そこで疑問形になるのよ。」

「私は姉との約束がどうとかって聞いたけど？」

「約束？」

また、柊は彩夏ちゃんに聞いた。

「あーっと、アタシの中での約束？」

またまた疑問形で返す柊妹さん。

「ごめん、話が見えないんだけど。どういうこと？」

それまで黙っていた佐藤先輩も、しびれを切らしたのか彩夏ちゃんに聞いた。

「えっと、簡単に説明すると・・・。」

姉の代わりに全国で優勝することで、姉を喜ばせようとした。

ただそれだけだった。姉の苦しんでいる姿を見て、いてもたってもいられなくなった。

姉の代わりに私が走る。姉の代わりに私が勝つ。そう思って陸上部に入った。

・・・ということらしい。

「そ、そうだったの。初耳よ。」

「うん、言っただけよ。」

それは約束とは言わないんじゃないだろうか。

「ま、でもいいじゃないの。彩音の代わりにこの子が相手してくれるでしょ。ふふふ、さあて、どうやって料理しようかな。」

木嶋さんが不気味な声をあげながら彩夏ちゃんに近寄る。

彩夏ちゃんはあわあわしている。

「それはさておき。」

木嶋さんの驚くべき変わりよう。これが木嶋世界^{ワールド}か。

「何で連絡のひとつもくれなかったのよ。そんな大変なことになってるなら、少しは相談してくれてもいいのに。」

「ん、それには深いわけがあつてねえ。じつは・・・。」

とある日（全国大会から帰ってきた日）の終家にて

「おねえちゃん。ここにある服、全部洗っていいの？」

妹の声が階下から聞こえてきた。

「いいよ、全部ササッと洗っちゃってえ。」

しばらくしてガタガタという洗濯機の音が聞こえてきた。

なぜかは分からないが、この洗濯機の音は私にとって心地よく聞こえる。不思議だ。

「そうだ、疾風先輩にメール送っておつと。」

ガサゴソとポケットを捜すがケータイは見当たらなかった。

そう言えば、着替えたときにポケットから出した気がする。

ということまで辺りを捜してみた。が、結局見つかることはなかった。

「ま、いつか。あとで彩夏にケータイ鳴らしてもらおう。お休み・・。」

その日の夜

「んゝ聞こえないなあ。なんでだろお？」

「さあ、なんでだろ？・・ねえ、お姉ちゃん、まさかと思うけど・・。」

彩夏の言いたい事はなんとなくわかる。

「いやあゝ、さすがにそれはないでしょう。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

ダダッと階段を下り、洗濯物を取り出してある籠を確認する。
バババッと服を取り出す。

今日はやけに洗濯物が多い。まあ、私のものばかりだが。

「あ、あつた・・・。」

妹がそれを発見した。

どう見ても大丈夫そうではない。

「あ、ああゝ、私のケータイがあゝゝゝ。」

「つていうわけ。」

「あ、浅い・・・。」

「ああ、浅いな。」

「ええ、浅いわね。」

全員同じ感想だった。

「まあ、彩音らしいと言えば彩音らしいけど。」

「えへへ、というわけで、もう一回アドレス交換しよ。」

二人はピッと携帯を向けあってアドレスを交換した。

「でも、安心したわ。けっこう元気そうで。」

「ホントはかなり怖かったけどね。」

「とてもそういう風には見えないわよ。」

二人は笑っている。それはお互いがお互いのことを理解しているか

らであろう。

柊は本当に怖かったはずだ。

柊が木嶋さんを見たときの表情。あれは確実に怯えていた。木嶋さんは気付いていなかったとしても、少なくとも柊は木嶋さんが走っていることに気付いていたはずだ。木嶋さんは常にトップで走り続けていたのだ。知らない人はいない。マネージャーである柊なら、すぐに気付いたはずだ。

知っていたにも関わらず、会いに行かなかったのは、それだけ怖かったということだ。

そして、木嶋さんは柊が怯えていたことが分かっていたはずだ。だからこそ木嶋さんは笑ってみせたのだ。お互い、あの頃に戻るように。

「じゃあね、みんな。こんど試合があるときは、ちゃんと会いに来てよ。」

「うん！」

「私はあんまり会いたくないんだが。」

と佐藤先輩の冷たい一言。

「なにい。どの口がそんなこと言うかあ。」

勢い良く迫ってきた木嶋さんをヒラリとかわす。

「あんたと絡むのは面倒なんだよ。」

「もう、そんなこと言っちゃって。このこの。」

「あー、はいはい、会いに行つてやるから、さっさと帰った帰った。」

なんだかんだ言つて、佐藤先輩もこの人たちのノリについていっているという……。

「いやあ、疲れた疲れた。」

「全くだな、あいつの相手ほど疲れることは無い。」

柊と佐藤先輩が滅茶苦茶なことを言っている。

あまり聞かないでおこう。

「—————じゃあな、私はこっちだから。」

佐藤先輩は、俺たちとは反対に進んで帰っていった。

「ふう、今日はホントに疲れたねえ。思わぬ告白もしちゃったしい。」

「そうだな。」

「—————ねえ、藤井君・・・ありがとう。」

それは突然だった。

「あの時のお礼。まだ言っていなかったから。」

「あの時？」

何のことかは想像が付いた。でも、礼を言われるようなことはしていない。

「あのとき藤井君が無理やりにでも陸上部に入れてくれなかったら、たぶん今の私は無かったと思う。」

「それは違う。俺のしたことは、結果的に柊を苦しめてしまっただけだ。」

「うん、でも結果的には陸上を続けることができた。でしょ。」

「・・・それは、お前自身が選んだことだ。俺は関係ないよ。」

「ううん。あのままだったら、私は考えることさえしなかった。でも、藤井君のおかげで考えることができた。苦しむことができた。

今のこの道を選ぶことができた。—————だから、ありがとう、だよ。」

柊はニコツと笑った。その笑顔は、もう強がりなんかではなかった。
「・・・そっか。それじゃ、その『ありがとう』は、もらうことにするよ。」

「へへ、ありがと。・・・ふふふ、なんか変だったね。」

そのありがとがあまりにも不自然だったので、2人でクスクスと笑ってしまった。

「あのー、アタシ、空気になってる？」

そのとき、後ろにいた彩夏ちゃんの、さりげない一言が発せられた。

「へ!?! あ、いや!」

柊は驚きとともに、慌てふためいた。

「だ、大丈夫、大丈夫う。忘れてないよお。」
確実に忘れていたな・・・。

「それじゃあね。」

「おつかれさまでーす。」

二人の姉妹は仲良く帰っていった。

「さて、明日も頑張るか。」

こうして今日も、いつもの1日として終わりを告げた。

不思議な出会い

学校の帰り道。

今日は試合の次の日、ということで部活動は休みだ。

そしていま、俺はある場所へと向かって走っている。

とある場所とはズバリゲームショップだ。今日発売になるゲームを
買うのである！

え？予約はしていないのかって？もちろんしてある。

ではなぜ急いでいるのか。少しでも早くゲームをプレイするためさ。
たった数分、数時間の先に行く。それがゲーマーというものなので
ある。

とある妹さんや教師さんには敵わないが。

言っておくがフラゲは邪道である。むしろ禁止。

||||||||||||||||||||

商店街の入り口。この時間は学生やら主婦やらがたくさんいる。

普段ならこの道は避けて通る。しかし今の目的はいかに早くゲーム
ショップへとたどり着くかだ。快適に道があるこう、などとは考え
ない。常に最短の道に行く。

実は商店街にはいくつもの細い道が脇に作られている。商店街の住
民やその近くに住む人たちが通るための道である。

そこを通ることによって目的地への到達時間が遥かに縮まるのだ。
大通りの隅にある細道へと進む。

その時、いかにも俺たちワルですよ的な集団が目の前に現れた。

「よお、ねえちゃん。俺たちにちよつと付き合わないか？」

そしてその集団の中に一人の女の子がいた。色んな意味でまずい光
景だ。

囲まれている女の子の制服。それは見たことのないものだった。少
なくともこのあたりの生徒ではないだろう。

髪は少しぼさぼさしている。身長は女の子にしては大きめだ。柊と同じくらいであろうか。

・・・っていうか、これ、あれだよな。「現実ではありえない、よくあるシーンBEST10」っていうのがあれば、必ず入りそうなの状況だよな。

ホントにこんなのあるんだな。とか言っている状況ではなく、あの女の子を助けなくては。

・・・助けられるのか？一応作戦的なものはあるが大丈夫だろうか。まずは当たり前だが女の子を逃がす。そして俺も逃げる。作戦終了。とりあえず、喧嘩なんかしたことのない俺が、果敢に挑んでも返り討ちにされるだけだ。俺も女の子もあの集団も傷つかない方法。それは逃げることだ。

女の子さえ逃げ出すことができれば、あとは俺が逃げるだけ。これでも県で2番目に速い男だ。一般人に負けるなんてことはないだろう。

よし、いくぞ！と気合を入れる。

「はあ、ホント、ついてないわよね。それが最後の言葉になるなんて。」

女の子はぼそつと言った。

言い終わった直後、目にもとまらぬ速さで1人を捉えた。

あまりにも速さに男たちは反応することさえできなかった。

「え？」

その1人が崩れ落ちる。そうして初めて、なにが起こったのか理解する。

「これ、正当防衛になるわよね。男が集団で女の子を囲んでる、っていう状況で、もうアウトみたいなものだけど。」

そしてまた、言い終わった瞬間1人が崩れる。

「あ、これは忠告。こんなことしていると、ただの噛ませ犬になるわよ。」

1人また1人と沈んでいく。

「私みたいな奴のね。」

言い終わる前に男たちは全員地に伏せっていた。

「……………」

啞然とした。その出来事は一瞬だった。俺の入る余地などなかった。俺の出番なし……………」

「あんた、こいつらの仲間？」

少女はこちらに振り向いて言った。もちろん話しかけているのは俺だ。

「へ？ い、いや、違うけど。」

「…………あやしいわね。こういう状況でのあんたの立場って、高確率でアウトよね。」

ものすごい疑り深い声で、俺を問い詰める。

「いや、だから違うって……………」

「言い訳は見苦しいわよ…………っ！」

少女は一気に間合いを詰め、右ストレートをくりだした。

「い！ ちよっ…………！」

こういう状況の俺の立場って、普通無関係じゃないのか！？ っていう実際無関係だし！

彼女のこぶしは左顔面を狙っている。紙一重でかわす…………ことなどできるはずもない。腕を内側に入れ、軌道をずらす。そして後ろへ飛び退き、間合いを取る。

「…………ちっ。避けんじゃないわよ！」

「いや、避けるだろ普通！」

その時、彼女の構えが変わった。いや、初めて構えをとった。今まで彼女は構えらしい構えをとっていなかった。それはつまり、本気を出していなかったということだ。

って、どう見ても本職の人の構えだろ！ いいのか人を殴って！

「…………っふ！」

彼女の息がもれる。

は、速い！

腕で防ぐこともできず、胸へと一撃が入る。

「くっ！」

存外痛くはなかった。

「っは！」

彼女の攻撃は止まることなく、次がくりだされる。

その一撃は、再び胸のあたりを狙っていた。連続での胸への攻撃。

同じ場所を狙うのであるならば。防ぐことは容易だった、が・・・。

曰く、雨のよう。上手く言ったものだ。それは避けることのできない連打。雨を避けることなど不可能である。

だが、全ての攻撃にたいした威力を感じない。ダメージを蓄積させる、というわけでもなさそうだ。

避けられない攻撃。いや、避けさせない攻撃だ。

彼女ほどの力なら、顔を狙うのが一番だ。当たれば一発でKOできる。

しかし、それをしたのは最初の一撃のみ。それをかわされたのだ。

安易に顔を狙うはずもない。

顔を狙い、外した時には反撃が待ち構えている。そう考えるのが普通だろう。顔面への攻撃を避けるには、顔を軌道からずらせば良いだけのこと。片手しか使えない相手に攻撃を加えるのは容易いことだ。かわす可能性のある者に、いきなり一撃を狙うのは無謀すぎる。ならば、胴体は？面積が広く、ガードするには2本の腕では足りない。かわすには、後ろに下がるか、大きく横に避けなければいけない。

後ろに下がってもすぐに間合いを詰められる。横にかわしても次の攻撃が待っている。どのみち彼女が有利である。

「うぐっ！」

いくら小粒の雨でも当たり続ければびしょ濡れになる。どんなに威力が小さくても、やはりダメージは蓄積している。

これが彼女の狙い？いや、そんなはずはない。どこかで必ず来るはずだ。最初の一撃以上のものが。

「はあ、はあ。」

腕に力が入らなくなってきた。体力もかなり削られた。そのとき・

「っはあ！」

右腕を大きく後ろに振りかぶる。

きた！

サッと顔を右に傾ける。しかし、拳は視界から消えた。

「・・・なっ！」

視界から消える、なんてことは無いはずだ。まっすぐに拳を打ち出せば、たとえばかわしたとしてもその寸前までは目に見えるはずだ。

「・・・しまっ！」

そう、それはまっすぐには打ち出されなかった。視界から消えたのであれば、それは真横からの攻撃。

とつさに後ろに顔を下げる。

ブンッ！という音が目の前を通り過ぎる。

「はっ！かわ・・・した？」

当たっていないのだから、かわしたのは当然である。だが、気づいたのは、それが通り過ぎた数秒後だった。

「・・・！！」

彼女は驚いた顔をしている。

「ホンっとムカつくわね！・・・もう、いいわ。」

彼女の目が変わった。

「あんた・・・死になさい・・・。」

「なっ・・・！」

彼女の周りにオーラのようなものが見えた。

それは錯覚だ。それでも見えてしまった。彼女の言葉と雰囲気がいわゆる殺気というものを見せてしまった。

肌で感じる事ができるこの寒気。まるで肉食獣に狙われる草食動物だ。

鋭い目つきで狙われ、狩られる瞬間を待つ。目を付けられた以上、

逃げることはできない。

「・・・終わりよ・・・。」

言葉は静かだった。それだけは覚えている。

「がっ！」

見えなかった。なにも。何が起きたのかもわからなかった。分かったことは、彼女の拳が腹にねじ込まれている、という事実のみ。

「あ・・・ぐ。」

意識が遠のく。膝から体が崩れ落ちる。

だめだ！このまま倒れば、殺られる・・・！

それはもう、気合いでしかなかった。倒れないことだけを考え、そして踏みとどまった。

「・・・！————— あんた、何者？あんたみたいに、咄嗟に後ろに下がってダメージを減らす奴は、今までにもいたけど。倒れなかったのはあんたが初めてよ・・・。」

咄嗟に下がる？彼女の言っていることが理解できなかった。むしろそんなことを考えたなら、今にもぶっ倒れそうだ。

「・・・は・・・つく。」

「・・・だ、大丈夫？」

大丈夫ではない。自分がやったのだから、分かってほしい。

「・・・お、お前は・・・な・・・。」

だめだ、立っていること自体に力を使いすぎて話せない。ドサツと仰向けに倒れる。

「ちょ、ちよつと・・・！」

「と、とりあえず・・・もう、襲ってこない、よな・・・？」

若干の不安はあったが、もう限界であった。立っているより、やられた方がましだった。（おい！）

「え、ええ。よ、よく考えたらあんた制服着てるし、違うかなあゝとか・・・。」

「・・・。」

なんか色々言いたい事があったが、とりあえず誤解が解けたので良

しとしておこう。ホントは良くないが……。

「————— はあはあ……で、何が……あつたんだ？」

息絶え絶えに聞く。

腹はまだ痛い。みぞおちに綺麗に入った拳。痛みより吐き気を誘う。

「み、見ての通りよ。なんていうの、たまたま通りかかった道にあいつらがいて。で、囲まれたからちよつと……。」

ちよつとぶっ飛ばしたってわけか。まあ、その一部始終を見ていたので、大体なにがあつたのかは分かっているのだが。

「あ、あんたは？ あんなどこでなにしてたの？」

「俺も、たまたま……通りかかった……だけだよ。で、君が……
・ 囲まれていたから……助けよう、とか思ってしまった……。」

「な、なんか後悔しているような言い方ね。」

「そりゃそうだ。無視していれば……こんなことには……ならなかったからな。」

「ご、ごめんなさい。」

予想に反して、素直に謝ってくれた。

見た感じ、と性格からして、もっとツンケンしているかと思つたが、案外素直な子である。……ツンデレか。

「まあ、分かってくれたなら、もういいけどさ。」

「……あ、ありがとう。」

なんだか恥ずかしそうにしながら言い放った。

「そ、その、助けてくれようとしたんでしょ。だ、だから、ありがとう……。」

「……やっぱり、ツンデレか……。」

「な、な、だ、誰がツンデレよ！ べ、べつにあんたなんかデレてないわよ！」

「思いつきりツンデレ要素満載なんだが。」

「……！ やっぱ死ねー！」

「あ、いや、嘘です！ ごめんなさい！ うわあああああ！」

「ってことがあったんだが。」

翌日のホームルーム前、昨日あった出来事をみんなに話してみた。

「おお、それは色々貴重な体験だったねえ。」

それが柁の第一声であった。

「確かに貴重ではあったが、俺は死にそうだった……。」

「おつかれ……。」

小野坂、そんな一言で終わらせないでくれ。

「センパイ、ゲームしてもしかして、8年ぶりの新作のあれですか！？」

「そうそう、昔ハマってたやつだから、もう嬉しくて嬉しくて……って。」

「……なんで彩夏がここにいるの？」

俺の言いたい事を柁が言ってくれた。

「はいこれ。」

と言って姉に渡したものは、弁当箱らしきものであった。

「お姉ちゃん、アタシの分は入れてたのに、自分の分は忘れてたから。」

「え！？あ、ホントだ。いやあ助かったわあ。ありがとね。」

「うん。じゃあ、失礼しまーす。」

彩夏ちゃんはお辞儀をして、教室から出て行った。

「家を出る前に言ってくれたら良かったのにな。」

「私が家を出るとき、あの子、まだ寝てた……。」

「な、なるほど。」

そういえば、今日も朝連に遅刻してたな。

しかし、この話でゲームの方を持つてくるとは。さすが柁妹。

「—————ところでさ、その女の子の名前とか聞かなかったの
お？」

「あ、そういえば聞いてないな。」

「えー、だめじゃん。そういうのはちゃんと聞いておかないとお。」

と言われても、とてもそんな状況ではなかった。

「そういう場合って、また、どこかで再会、ってパターンだよな？」
小野坂もパターンとか分かってきてしまったのか。

「おお、そうだそうだ。こういうのは、次の日の学校で転校生として再会ってパターンだね。」

「転校生ねえ、この時期に？」

もう1学期も終わろうとしているのに、本当に転校生なんかくるのだろうか。

そのときガラガラとちょうどよく先生が入ってきた。

「センセー、今日って転校生とかいないですかあ？」

「ずいぶんいきなりだな・・・転校生がこんな時期に来るわけないだろ。」

ですよねー。

一瞬で玉砕した柊であつた。

「うーん、でも、絶対なにかあるよねえ。」

「そうじゃないと、面白くないもんね。」

なんだろう。最近、小野坂もこっちの世界に来てしまったのだろうか。

色んな意味で、不安を覚えながら、一日を過ごすのであつた。

不思議な再会

筋肉は主に筋繊維というもので構成されている。

筋繊維には大きく分けて2種類がある。

1つは縮む速度が速い「速筋」。もう1つは縮む速度が遅い「遅筋」。
この2つである。

速筋は名の通り、瞬発力を引き出す時に使う。無酸素運動のときによく使われる筋肉で、陸上では短距離選手がよく鍛える。

対して遅筋は持久力を引き出す時に使う。有酸素運動のときによくつかわれる筋肉で、長距離を走る場合に必要である。

俺は短距離選手だ。もちろん、速筋を鍛える練習を毎日している。というか、先生がそういう風に練習メニューを考えてくれている。

しかし、今のままで本当に良いのだろうか？最近、いや、あの時そう思った。

最後まであの人に追いつくことはできなかった。このままではあの人に勝てない。

敗因は何だ？スピード？

違う。走力ならあの人にだって負けていない。距離を100mに縮めたとしたら、少なくとも同時にゴールすることはできると思っている。

ならば持久力か？

400mという距離を走るには、最初から最後まで全力というわけにはいかない。どんな選手だって100m選手のように、ただ速く走るために全精力を注ぐことはできない。本気を出さずに本気で走る。これが理想である。正直よく分からないが・・・。

最初だけならあの人に付いていくことはできる。しかし、それは自滅行為だ。確実に動けなくなる。でもそうしなければ勝てない。

速筋は疲れやすい筋肉である。短距離選手には必要な筋肉だが、4

00mという距離を走りきるには少々無理がある。

ならば、どうやって動いているのか。それは、使う筋肉を入れ替えているのだ。ヒトは、速筋が使えなくなったら、遅筋を使って走ろうとする。

遅筋は長距離選手だけが使うものではない。短距離選手も使うのだ。400mの後半は速筋よりも遅筋を使う。もしそこで差が生まれるとするなら話は早い。

遅筋を鍛える方法。それは、もちろん長い距離を走ること。普段の練習でそれを鍛えることができないのであれば、練習以外で鍛えればよい。

||||||||||||||||||||

という結論を導き出した俺は、今こんな所にいる。

場所は樽坂山公園。樽坂山とは名の通り山である。俺の家やその他もろもろ、このあたり一帯の山が樽坂山と呼ばれている。

昔々この山で、どこかの商人が大量の樽を転がし落としてしまった。というのが名前の由来らしい。

色々とツツコミどころ満載だが、俺も聞いた話だ。あまり責めないでくれ。

そして、公園というくらいなのだから、多くの人が想像するようなものがたくさんある。

例えば、滑り台とか、ブランコとか、鉄棒とか・・・と色々ある。そして、謎に面積がでかい。先ほどあげた遊具がある敷地は、この公園のほんの一部である。他には何があるというでもなく、芝生の広場が広がっているだけである。

元々ここは、山をそのまま人が過ごせるようにと作った場所で、皆が想像する公園を作ろうとして出来上がったものではない。だから、芝生しかなかったりする。一応ちゃんとした道はある。

この公園にはハイキングコースというものがある。山と名が付くだけあって急な坂が多かったり、本当に山の中に入っただけで、

なめてかかると結構ひどい目にあう。

全体の面積はおよそ18・5ha。よく分かりません。とりあえず、ものすごく広いということである。

数年前までは多くの、とまでは言わないが、それなりに人でにぎわっていた。今では健康作りのために、という人が数人利用しているくらいである。

それでも、小学校の遠足の地にされていたりするので、そこまで寂れている訳ではない。ところどころにある休息所などの施設は、ちゃんと管理されている。

そのハイキングコースをジョギングしているわけだが・・・。

「さ、さみしい・・・。」

夜の8時ということもあって辺りには誰もいない。今はもう夏だ、と言ってもこの時間は普通に暗い。

「こんな時間に森の中に入るんじゃないかった・・・。」

と後悔してももう遅い。来るところまで来てしまったのだ。折り返しても進んでも同じである。

「は、早く出よう。」

ゆるゆるスピードから1段階上げる。

暗くてよく見えないが、自然の中の道だ。時折、木の枝が顔にあたったりと若干うつとうしい。道中にも木の枝がたくさん散らばっている。

その枝をパキパキと音を鳴らしながら外へと出る。

「や、やっと出た。」

時間にしたらそれほど経ってはいないが、とても長く感じた。

「今度から、森の外を走ろう・・・。」

暗い中を走ってきたせいか、外が明るく感じた。

「やっぱり外のがいいよな・・・ん？」

ま、まさか、あれは。

「あ・・・。」

出会ってしまった。まさかの出会ってしまった。・・・大事なことなので2回言いました。

とっさに身構える。

「・・・なにやってんの？」

「え、いや、襲ってこないのか？」

「あんた、私をなんだと思ってんの？ あれは、あんたが余計なことを言ったからでしょ。」

「そんなこと・・・言ったな。最初は確実にそっちの勘違いだけど。」

最後にぼそぼそ聞こえないように言った。

「あん？ なんか言った!？」

「いえいえ、なにも・・・。」

危ない危ない、もう少しでこの間のようにやられるところだった。

「な、なにやってるんだこんな所で？」

彼女のいた場所は、だだっ広い広場の真ん中。そこには何もなくて彼女一人がぼつんと立っているだけだった。

「あんたには関係ない・・・。」

と無愛想にそっぽを向いた。

「そりゃ、関係ないけど。なんか気になるだろ。こんな所に一人でいたら。」

「あんたも一人だけだね。」

なんだか揚げ足を取られた気分だ。

彼女は遠くを見上げる。何を見ているかは分からなかった。その顔は、あの時の獣の顔ではなく、普通のよくいる少女の顔だった。

「・・・あと10分。」

「へ？」

「あと10分私に付き合ってくれたら、教えてあげる。」

ケータイの時計を見ながら言った。

「なんで10分なんだ？」

「そんなときになったら分かるよ。」

「……」

よく分からないが、とりあえず15分付き合ってみることにした。

「じゃあ、えっと、自己紹介から。俺は藤井友喜。よろしく。」

と手を出す。

「私は根岸^{ねぎし}星那。」

相変わずそっぽを向いている。

「……どこ見てんだ？」

「さあね。」

「まあいつか……えー、いきなりだけど、どこの学校の子？」

「ほんと、いきなりね。ってかナンパかよ。————— そうですね、

学校は今捜し中。」

「捜し中？ 引っ越してきた、ってことか？」

「そう、だから、捜し中。」

「そういうのって引っ越す前に決めるものじゃないのか？」

「私もそう思ってたけど、ここでは違うみたい。もっとも、ここ限定じゃないかもだけど。」

ということらしい。今度調べてみよう。

「じゃあ違う質問。えーっと聞きにくいんだけど、年齢って……？」

「17。」

それだけ答えた。

「そっか、同い年か。もしかしたら同じ学校で同じクラスになるかもな。」

と冗談交じりで言った。

「そう、じゃあ考えとくわ。」

返ってきた答えが意外だった。それは本気なのか冗談なのかは分からなかった。

間違はなく呆れられるか何か攻撃がくると思ったのだが。

「……じゃあもう1個。なにか格闘技やってるのか？」

これは一番聞いておきたかったことだ。

「ええ、ボクシングをね。正確には『やっている』じゃなくて『やってた』ね。」

「や、やっぱり……。っていうか人を殴っていいのか。」

「一般的にはダメでしょ。あんときは例外。れっきとした正当防衛よ。」

「いや、それでもあれは……。」

その時のことを思い浮かべる。

なにもできずに地面へと叩きつけられる男たち。傍から見ればどちらが襲われているのか分からない。

まあ、彼女の言うように、ちゃんとした正当防衛だったが。

「それじゃあ、あのまま連れられて、人様には顔向けできないようになれと。」

「いやいやそこまでは言っていない。ほら、こうなんていうか、もう少しやりようがあったというか……。それに、俺も巻き込まれたし。」

「あんときのことは謝ったでしょ。」

根岸は不満そうな顔をした。

「まだ根に持ってるの？　ったく心の狭い男ねー。」

「べ、別に根に持ってるわけじゃ……。ただ、もう少し手加減してほしかった。」

正直なところ、根岸にやられたところは未だに痛む。

「そ、それは、ごめんなさい。悪かったとは思ってるわよ。」

根岸はシュンと落ち込んだ。

根岸は意外な反応が多い。さっきまでツンツンしていたのに急におとなしくなった。

なんだかこっちが悪いことをしている気分になる。

「あーえっと、やってたってことは、もうやめたってことだよな。なんでやめたんだ？」

「……。1位になったから。」

「1位？」

「そ、全国で優勝したからやめたの。」

「ぜ、全国う!？」

全国というところの全国である。つまり日本一強い女性（高校生）である。

よく俺は生きていたものだ。

「優勝したのにやめたのか？」

「ええ。」

「どうして？」

「・・・そうね、1位になりたかったから。」

——— 私は今まで1位になったことはなかった。勉強も運動も身長も体重も・・・体重は1位になりたくないけど。とりあえず何でもいいから1位になりたかった。

ボクシングを始めたのはたまたま。近所にボクササイズをしている所があったの。元プロの人が経営していてね。その人と近所付き合いがあつて、それにちよつとだけ顔を出した。そしたら君には素質がある、とか言われて始めたの。

最初は乗り気じゃなかったわ。殴り合いなんて好き好んでするもんじゃないでしょ。そういう人もいるけど。でも、私はそっち側の人間じゃなかった。

そのうち試合とかもするようになって、そしたらすんなり勝てちゃつて。なんかいつの間にか超高校級とか言われるようになっていた。私は思った。これなら1位になれると。

そして、ホントに1位になってた。想像以上にあつさりしてた。頂点とはこういうものなのか、と。」

それで根岸の話は終わった。

結局理由がよく分からなかった。ボクシングを始めた理由は分かった。でも、やめた理由が分からなかった。頂点へと上りつめたからやめる、というのは理由になっているのか。そこまで辿り着いたのならばもっと続けようとは思わないのか。

「優勝したからやめたのか？」

「そうよ。もともと1位になることが目的だった。それ以外は何もない。1位になったのだから、それ以上ボクシングに求めるものはなかった。だからやめた。」

そう、根岸はボクシングに何かを求めていたわけじゃない。1位になることを求めていた。そしてそれが叶った。目的が達成された以上それを続ける理由など存在しなかった。

「でも、なんかもったいないよな。」

「・・・そうね、もったいないわね。これだけの力があれば、ボクシングで飯を食べていけたかもなのに。」

「そ、そっち!？」

「?じゃあ、なにがもったいないの。」

「いや、そこまで続けられたのは1位を目指していた、ってのもあると思うけど。やっぱりボクシングが好きなんじゃないかって。好きなものをそんなにあっさりやめるなんてもったいないなーって思っただけだよ。」

「ボクシングが好き?私?・・・そう、かもね。じゃなければ、あんな殴り合いやりたくないもんね。そうか、私もそっち側の人間だったか。」

「・・・また、始めようとは思わないのか?」

「ええ、もうやらないわ。だって、そんな単純な動機で始めて、そんな単純な理由でやめたんだから、本気でやってるみんなに迷惑なだけよ。それに、そんな気付かない『好き』なんて、ホントの『好き』のうちに入らないじゃない。今でも殴り合いは好きじゃないしね。だからもう、やらないわ。他のもっと、自分で気づけるような『好き』を見つけたいし。」

「そうか・・・。」

彼女のボクシングは、まるでクリアすることだけが目的のロールプレイングゲームのようだ。クリアするまでのストーリーは関係ない。面白とか、つまらないとか、そういうことではなく、ただクリアするのみ。ロールプレイングをするのではなく、クリアというものの

みに意味を求める。

彼女はクリアしてしまった。目的を達成した。だから、そのゲームはもう起動させることはないだろう。

クリアすることだけではなく、その過程の全てを好きだと思えるもの。根岸はそれを搜したいのだろう。

「・・・そろそろ時間よ。」

根岸は再びケータイの時計を見て言った。

「なにか始まるのか？」

無言のまま空を見上げる根岸。

そのとき、どこからともなく女性の歌声が聴こえてきた。

「これは・・・？」

「どう、綺麗でしょ。」

根岸の言葉通り、それはとても綺麗だった。そして、懐かしくも感じた。

どれほどの時間だったかは分からないが、その歌声はすぐに消えた。

「これを聴きに？」

「ええ、そうよ。前にたまたまこの時間に通りがかったら、この歌声が聴こえてきてね。とても綺麗だったの。また聴きたい、って思ってた次の日も同じ時間に來たら、また聴こえてきて。それ以來これが日課になっちゃた。」

「そうなんだ・・・歌が好きなのか？」

「歌？・・・そうね、歌じゃなくて、この声が好きなのかな。」

あの女の人が歌っている曲が何なのかは分からない。それでも聴いていて綺麗だと思えるということは、この声が好きだということなのだろう。

「私、歌なんて普段聞かないからね。今まで、この歌手が好き、なんてことにもなかったから。」

「へー、じゃあ初めてファンになった歌手ってことか。」

「ファン・・・か。うん、これだけ聴き惚れる、ってことはファンってことよね。」

話をしている最中にまた歌声が聴こえてきた。

彼女が見上げる先を見ると、そこは展望台であった。根岸が見ていたのは空ではなく展望台の人影であった。

なるほど。あそこからならこの辺り一帯に声が届く。

「あの人プロかな？」

「さあ、どうだろう。」

プロがこんな所で練習をするのか、はたまたプロだからこんなところで練習をするのか。

「もしプロだったら穴場発見ね。」

「穴場って・・・でもなんか悪いよな。本当ならお金を払って聴くもののに。」

「練習なんだったら別にいいんじゃない。練習にまでお金を払って聴け、なんてがめついわよ。」

「がめ・・・？」

「・・・え？あれ、がめつい・・・って知らない？もしかして方言。」

「少なくとも俺は知らない。」

「あ、そうなんだ・・・。えーっと欲深いとかそういう意味よ。」

「ほう、なるほど。」

「で、なんだっけ・・・？」

「練習にお金がどうとかって・・・。」

「そうそう、そうだった。でも、相手がお金を払えっていうなら払うわよ。ちゃんと歌ってくれるならだけど。」

「確かにプロが1曲ちゃんと歌うなら、お金を払う価値はあるよな。生で聴けるわけだし。」

そうこうしているうちに、また曲が終わっていた。

しかし本当に綺麗な声だ。素人でも分かる綺麗な声。間違いなくプロ級（プロだったら申し訳ない）だ。

そしてこの懐かしさ。何なのだろうこの感じは。

「・・・いや、まさかな・・・。」

こういうときの予感というものは、だいたい当たっているものである。・・・というのを前にも言った気がする。

「どうしたの？」

「いや、知り合いの声に似てるかなって・・・。」

「・・・あんたの知り合いにプロでもいるの。」

ものすごい疑った目で見てくる。

「あー、プロはいないけど、それに近いやつならいる。・・・いやホントに。」

「ふーん。」

全く信じていない様子の根岸さん。

「ま、別にどっちでもいいけど。」

「うん、ホントにどっちでもいいんだけどな・・・でも・・・なんか気になるな。」

「なら、行けばいいじゃない。」

「へ？」

「へ？じゃなくて、気になるんでしょ。だったら行けば？」

「いや、でも・・・。」

「でもなに？もしかして、ずっと私といたいわけ。」

なんだかちよっぴり、というより思いつき含みのある言い方だ。

「そ、そんなわけないだろ！」

「・・・思いつき否定されるのも、なんか嫌ね。」

「じゃあ言うなよ・・・。」

「・・・ま、でも気になるんなら確かめておけば？じゃないと後悔するかもね。」

「後悔って・・・。」

いくらなんでも大げさではないか。

「何事もはつきりさせておくことが大事なのよ。確かめないとすつきりしないでしょ？」

「まあそうだけど・・・。」

「いつまでこんなやりとりしてるつもり？あんたがそんなこと言う

から、私も正体が気になってきちゃったじゃない。ほら、早く行きなさい。そして結果を私に教えなさい。」

ドンと背中を押す根岸。

「うわ！・・・っと。」

危うくこけそうになる。

「はあ、分かったよ。じゃあ行ってくるよ。結果が聞きたいならそこで待ってるよ。」

「あまりにも遅かったら帰るけどね。」

「・・・好きにしていいいよ。」

根岸の性格が少しずつ分かってきた気がした。とりあえずデレの少ないツンデレだ。いずれはツンツンデレからツンデレデレに変わるのだろうか・・・って何を考えているのだ俺は。こりゃゲームのやり過ぎだな。

とりあえず、気になる歌声の正体を確かめに行くことになった。

2人の時間

さわさわと音を立てる木々。青い葉は月夜に照らされ、深い光沢を得ていた。そんな木々の中にある一本の道。その道は右へ左へと山に沿うようにうねっていた。

先の頂上にあるのは展望台。ここはそこへいくための唯一の通り道。

そんな道をせっせと登っている俺なわけだが、これが結構きつい。普段から走りこんでいるスポーツマン（陸上選手）の俺でさえ、息を切らし必死になって登っている。

さて、何往復しただろうか。今まで登ってきたこの蛇のようにうねりにうねった道をみおろす。

見下ろした先にはうつそうとした木々が生い茂っている。道はその木々の中に吸い込まれるように途中で見えなくなっていた。

これではどれだけ登ってきたのかわからない。どれだけ登ったか、あとどのくらいあるのか、なんてことは考えないことにした。考えれば考えるほど疲れが増してくるからだ。

それからしばらくして、またあの歌声が聞こえてきた。そう肝心の目的とはこの歌声なのだが、その歌声は徐々に近くなっている。この感じだとあと少しで頂上に着くようだ。

そしてまた少し走ると、薄暗かった森が徐々に開けてゆき、月明かりも眩しいと思えるほど明るくなってきた。

「・・・・・・・・」

息を呑んだ。

その先にいたのは、想像した女の子がいた。月に照らされ遠くを見つめる少女。歌声は夜空に響き渡りやさしく包み込んだ。

そこにいた女の子をとて美しいと感じた。今までそんなこと思ったこともなかった。いや、それに近い感情は抱いていたのかもしれない。

れない。今感じるこの感覚と、いつもそばにいた彼女の感覚は似ているようだった。

ただ、今はそれを美しいと感じた。それだけだ。
いつ以来だろうか彼女の歌声を聞くのは。

放課後には彼女の歌がいつも聞こえてくるし、一緒にカラオケにも行った。だけど今の歌声は、そのどちらとも違っていた。なにが違うのか、なんてわからないがとにかく違うと感じた。

だからだろうか。今このときを、まるで子供のころのような感覚でいることを。そんな彼女の姿を見て、見惚れて、そして聞き惚れて。この時間がとても心地よい。

そして歌い終わった彼女は、月の光からフツと消えこちらを振り向いた。

「―――！」

一瞬、彼女はびっくりとしたが、目の前にいる正体がわかったのかホッと胸をなでおろした。

「・・・トモ・・・くん・・・だよね？」

わかっていて聞いたはずであろう言葉なのに、なぜか最後に確認の言葉が入っていた。

「お、おう」

と、こちらもなぜかきこちなく返事をする。

「ど、どうしたの、こんなところで？」

「えー、あーっと・・・散歩？」

って、なんでこんなところで嘘ついてるんだよ。いや、当初の目的はそれに近いものだったか。

いやいやだから、そんなことはどうでもいいって。

「・・・？ どうしたの」

「あ、いや、なんでもない」

そんな自分の一人突っ込みを聞かせるほどアホではない。

「・・・練習、してたのか？」

「うん・・・」

ぽつぽつとした話。たった一言だけで会話が途切れる。普段ならこの時間を気まずく感じるが、今は逆に、この間を必要なものと感じる。

横にあったベンチに二人で腰掛ける。ベンチはひんやりとしていて、ほんのり熱を帯びた体を冷やしてくれた。

「・・・すごいな。金賞を取れるような実力なんだろう？ それなのにこんなところで自主練もするなんて」

「ううん、すごくなかないよ。私はただ・・・」

と、そこで小野坂は言葉を切った。

「どうした？」

あまりにも沈黙が長かったので思わず聞き返した。

「えっ！？ あ、な、なんでもない！」

手をバサバサと横に振る小野坂。

月明かりに照らされた彼女の顔は、ほのかに赤みを帯びていた。

「ね、ねえ、ちょっと、き、聞きたいんだけど・・・」

彼女の顔がさらに赤くなる。

「ん？ どうした」

「あ、あ、あのね、とと、トモくんって、あの、その・・・」

うつむきながら言い淀む。

「すす、すすすす好きなここっていいのおお！？」

「は、はい！？」

声が裏返りまくりだった。とても小野坂の口から出た言葉とは思えない。

「ど、どうしたんだよいきなり」

「ああ、あの、ふ、深い意味はないんだけど・・・あ、彩音がいつもうるさいから、ちょ、ちょっと聞いてみようかな、って」

また柵の仕業か。今度はいったいなにを吹き込まれたんだ。

「彩音はトモくんが私のこと好きだって言うけど、そんなことないよね？ あ、好きじゃないってそういう意味じゃなくてこういう意味だから」

どういう意味だよ、と心の中でつつこむ。

「好きな人、か」

いるのだろうか。友人とかそういうのじゃなく、異性として好きな人が。

俺の周りにいる女性陣を思い浮かべるが、どれも皆『ともだち』というくくりに入っている。もしかしたらこの中に好きな人がいるかもしれないけど、今の時点で気付いていないのだったら、それはまだ好きということではないんだろう。

「……今のところいいかな」

自信なさげにボソリとつぶやいた。

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ私のこと好きじゃないんだよね？」
その聞き方はどうなんだ。

「まあ、ある意味ではそうだな」

「そっか……」

小野坂はほっとした顔をした後、残念そうに下をうつむいた。

「なんか、ごめんね。変なこと聞いちゃって」

いいや、と小さく答え、また沈黙が続いた。

その後も、会話はぽつぽつとしかしなかった。

毎度のごとく長い沈黙が何回も続き、普段ならこんな空気に耐えられなかっただろう。しかし、不思議なことに今日はなんともない。むしろ、この長い沈黙を心地よいとさえ思える。

「なあ、小野坂。俺、お前に謝らないと」

おもむろにそんな言葉を口にした。自分でもよく分からないが、なぜか謝らないといけない気がした。

「どうしたの急に……？」

そんな俺に小野坂は優しく聞きかえした。

「俺さ、たぶんお前のこと避けてたかもしれない。その、なんていうか、恥ずかしかったんだよ。お前と一緒にいるのが」

一緒にいるのが恥ずかしかった。そう、ただそれだけの理由で、

俺は小野坂を避けていた。

どうして恥ずかしいのか。そんなの今でもわからない。ただ、そんな理由で彼女を遠ざけていた自分が恥ずかしい。気付いていなかったわけでもないのに、知らないふりをしていた。それが彼女を傷付けていたのだとしたらと思うと、激しい自己嫌悪に陥る。

だから謝らないと。そう思った。いまさらだと言われるかもしれないけど。

「そうなんだ・・・よかった」

「・・・へ?・・・」

よかった? 俺をとがめるならまだしも、『よかった』だって? 一体どういうことなんだ。

「そっか、トモくんも恥ずかしいって思ってたんだ。私もね恥ずかしいって思ってたんだ、二人でいるの。」

「————ふふふ、私たち高校生だよ? それなのに恥ずかしい

なんて、なんか子供っぽいね」

彼女は軽く微笑んで

「昔はこんな気持ちにならなかったのに、何でだろう?」

と、俺に問いかけた。

「って、こんなこと聞いてもわかんないよね」

えへへ、と笑い小野坂はベンチから立ち上がった。彼女は展望台の端まで行くと手すりに手をかける。振り向いた彼女はこっちに來てと手招きした。

「どう? すごく綺麗でしょ」

「ああ」

彼女の隣まで行くと一言頷いた。

確かに、とても綺麗だ。目の前に広がる星空は、とても言葉では表せない美しさだ。

「あのさ、ちょっといいか?」

「ん、どうしたの?」

目線を星空から彼女に移し、二人は向かい合った。

「仲直り、じゃないけど、その、なんていうか、また昔みたいに戻れないかなって」

「昔みたいに？」

「そう」

彼女の問いに小さく頷いた。

だが、返ってきた言葉は少し意外なものだった。

「私たちって何か変わったのかな？」

「いや、だって、ほら、あんまり喋らなくなったし、今も、柊がないと会話が続かないし」

「・・・・・・」

小野坂はしばらく考えるようにして

「ねえ、今も昔もそんなに変わってないよ」と言った。

「それは確かに、二人とも部活があるし、一緒に遊んだりすることは減ったけどさ。でも、私たちって昔からこんな感じだったと思うよ。なんていうのかな、どう言い表したら良いのかわからないけど、この距離感が好きって言うのかな？　今もこうしている時間がすごい居心地がいいし、うん、たぶんそんな感じ。って全然説明になってないね」

えへへ、と彼女は笑った。その笑みには、また、ほんのりと赤みがかかっていた。

そう、俺たちはこれでよかった。無理に場を盛り上げたり、話を続けたりしなくてよかった。昔から俺たちはこうだった。なにも変わっていない。

「そう、そうだったな。俺、忘れてたかも」

「もう、ひどいよ、トモくん」

小野坂は笑っていた。それは、いつも彼女が見せる笑顔。昔から見慣れた笑顔。ずっと忘れていた笑顔。久しぶりに思い出したような、ずっと見ていたような、不思議な気持ち。それは自分のせいだと知っているけど、彼女の笑顔が思い出せて本当に良かったと、心

から思う。

「でも、たまに小野坂と話す時、気まずいなあ、って思うことがあるんだが、それは何なのだろう」

「ひっどーい、私、そんなこと思ったことないのに」

小野坂は柊のような声で言った。

「うふふ、冗談だよ」

なんだろう、だんだんと小野坂が柊化していくのは止めようが無いのだろうか。

そんなことを思いながら、小野坂との久しぶりの時間を過ごすのであった。

いつからか止まっていた2人の時間／いつからか止めてしまっていた2人の時間

いつでも動いていた2人の時間

再び動き出した2人の時間は、とうの昔に動いていた／再び動き出した2人の時間は、止まることなく動いていた

それに気付くのに時間はかかったけど、その時間も2人にとって
は大切な時間

「————遅い、遅すぎる！」

公園の広場に一人佇む少女。少年が去ってからどれほど時間がたったのだろうか。考えれば考えるほど、少女には少年への怒りがこみ上げてくる。

「どんだけ待たせんのよ、まったく。早く帰って来いっての」
イライラしながらも少年の帰りを律儀に待つ少女だった。

雨

「雨ってなんかワクワクするよねえ」

いきなりである。ずいぶんいきなりである。

時期は7月末。そして期末試験の真っ最中である。一学期の山場だ。これを持ち切れば夏休みが待っている。とは言え、陸上部の俺に、夏休みはあってないようなものだが。

まあ、それはいいとして今日は雨が降っている。

教室の外を見ようと窓に目を向けると、かなりの勢いで窓ガラスに雨粒がぶつかっている。そのせいで、窓はモザイクがかかったように外の景色を遮断していた。ホームルーム前に外を眺めることが日課になりつつある今日この頃。そのひと時を邪魔された気分である。

そんなときにかけられた一声。

「藤井君はどお？」

「え、あー、さあ？」

あまりにも突然だったので、質問された意味すら考えずに、適当に答えた。

「さあ、って……藤井君、ちゃんとこっちの世界にいるう？」

そんな言葉に、窓の外にいていた意識を自分に戻す。

「ああ、悪い悪い。————で、雨がなんだっけ？」

「もお、ちゃんと聞いててよお。ワクワクするよねえ、って話」

「うん、私はわかるよ」

と言ったのは小野坂優希。

どこから出てきた。

「だよねえ、さすが私の親友」

2人は何故か手を取り合っていた。

「そうだな、家にいるときと学校で感じ方が違うかな」

とりあえず学校がある日は降ってくれるなど言いたい。部活ができないというのもあるが、何より登下校がものすごい憂鬱になる。傘を差してもズボンの裾は濡れるし、靴はグチョグチョで気持ち悪い。

反して、家の中にいると妙な安らぎを感じることができる。締め切った雨戸に当たると雨音がなんとも心地よい。

「私も似たような感じかなあ。特に台風の日ワクワク感が尋常じゃないね。あの心の昂ぶり一体何なのだろうか!？」

「知らん」

「ええ、酷いよお、分かってくれよお」

と言われても分からんもんは分かんのである。

「にしても、今日は一段と大降りだな」

「今年は梅雨明けが遅いんだって」

「へえ、そうなんだ。よく知ってるな小野坂」

「ニュースでやってたから」

と、小さな声で小野坂は答えた。

「そういえば、ここ数ヶ月雨の日が多かったかも」

「確かにそうだな。練習も中であることが多かったし、大会も雨が降ってることがあったな」

雨の日の大会ほど嫌になるものは無いだろう。

「帰りまでに止んでくれると良いんだが……ん?」

再び窓の外を眺めていると、ポケットの携帯電話が唸りをあげているのに気付いた。

「誰だ、こんな時間に」

とケータイの名前の表示を見てみると

「根岸星那」

何故に? いや、何故に?

「あ、私にも電話が来てた」

と、小野坂。

確かに、あの夜に二人とも彼女と電話番号の交換はしたが、なぜ

このタイミングでかかってきたのだ。しかし、出ないわけにもいかない。

「はい、もしもし」

『ああ、やっと繋がった。あんた、どんだけ待たせるのよ』
電話口からはけだるそうな彼女の声が聞こえてきた。

「一応、今学校にいるわけだし、ケータイは暗黙の了解でおおっぴらに使うことはできないんだ」

『ふうん、そうなんだ。それよりも今度の休みって空いてる？ 空いてるなら駅前の、あのくなんていったけ、まあいいや。とりあえずそこに来てくれる？』

「別に何も予定は無いからいいけど」

『そう、じゃあ決まりね。朝の十時に集合で。小野坂さんにもよろしく。じゃあ』

と一方的に切られしまった。

「何の用だったの？」

「今度の休みに駅前に来てくれって。小野坂も一緒に」
「なにになに、どうゆこと？」

興味津々な柊である。

その柊にこの間の出来事や他諸々を説明する。

「も、もしかして、三角な関係!？」

「ちげえよ! っていうかどっちとも直線にすらなってねえよ」

「え!？」 私、トモ君のこと、信じてたのに————ッ!」

いやいやいやいや、何言い出すんだよこの人は。

「てへっ」

てへっ、じゃねえよ。

「それじゃ遊びの誘いかなあ？」

「たぶんそうだと思うけど、肝心の内容を言ってくれなかったからな」

「それじゃあ、行くしかないな」

どこから出てきたのか西山晃。いや、ほんとどこから出てきたん

だよ。

「俺はずっとここにいて気配を隠していたのさ」

「ふうん」

「興味ゼロかよ」

「お前に興味を持ったことは無い」

「ガァァン！」

と、まあ西山晃は置いといて。

「小野坂って今度の休み空いてるのか？」

「うん、特に用事は無いよ」

「私も無いよお」

いや、柊には聞いていないんだが。

「俺も無いぜ」

晃にはもっと聞いていないんだが。

「それじゃ、今度の休みは駅前に集合ってことで」

「おう」

何故か柊と晃の二人が仕切っている。

でもまあ、遊ぶなら人数が多いほうがいいし、これでいいか。

「————あ、傘忘れてきたんだったあ」

と、放課後の昇降口で、唐突に、そしてわざとらしい柊の一言。

「朝も雨降ってただろ」

「たまたま降ってなかったんだよお。だから、ね」

と言って、柊は小野坂の傘を奪い取った。

「あ、ちよつと」

「二人は一本あれば十分でしょ。家が隣なんだし」

いや、そう言う問題じゃない気がする。

「あれ、お姉ちゃん、折りたたみの傘もってきて………」

「ふんっ！」

「がぶるっ！」

「そうなんだよお、折りたたみの傘も忘れちゃったんだよお」
おい、妹が泡吹いてるぞ。

「それじゃねえ、二人とも仲良くゆっくり帰るんだよお」
風のように去っていく柊。妹を抱きかかえて。
そして残された二人。

「彩夏ちゃん大丈夫かな？」

心配するのそこなのか？ いや、確かに心配だが。
「どうしよう」

本当にどうしよう、な状況である。

「ほ、ほら、これ。俺は別に濡れても気にしないから」
と、押し付けるように小野坂に傘を渡した。

「え、でも、それだとトモ君が風邪ひいちゃう」

「いいって別に。お前が風邪ひくよりは」

「ダメ。ほら、ふ、二人で、い、一緒に入れば、その」

小野坂は顔を赤くして言った。

そんな風に言われるとこっちまで恥ずかしくなる。

「わ、わかったよ。い、一緒に、帰るか」

―――― 帰り道 ――――

相変わらず無言である。だが、今日の無言はいつもと違う。あの
気まづさは無い。だが、この間の心地よさも無い。初めての感覚。
「いてっ」

「あ、悪い」

小野坂が濡れないように傘を傾けていると、さっきから何度も中
軸を頭に当ててしまっている。

「ううん、ありがとう」

と、小野坂はそつと傘を真っ直ぐ戻した。

「私も、濡れるから、それでおあいこ」

「あ、ああ」

気付いていたのか、ってそりゃあれだけ頭にぶつけていれば気付くか。

「な、なんか、ちょっと」

「ん？」

「恥ずかしいね」

言うまいと我慢してたが、口にしてしまったか。
言われると恥ずかしさ倍増である。

「でも、嫌じゃない」

そして顔を真っ赤にして言った。

「お、おう」

それは俺も同じだ。

心地よくも気まずくも無い。

ただただ、恥ずかしい。

でも、嫌じゃない。

この気持ちは何なのか今の俺にはわからない。

ボウリングに行こう

「よ、久しぶり」

ビルの前に立つ大きな時計の下で、携帯電話を弄くる少女に声をかける。

まだ日は昇りきっていないが、初夏の日差しはいつに無く強い。

先日の大雨が嘘の様だ。

こんな日であるのに、少女は日差しを遮るものを何一つ持っていない。それどころか半袖のTシャツにショートパンツと、全身日を浴びまくりである。

女の子なのにそういうのは気にしないのだろうか。

「あ、おはよう。元気してた？」

「まあ、ぼちぼちかな」

などと他愛ない会話を続けていると、二人の姉妹がやってきた。

「やあやあ、お待たせし申した。むむ、あなたが優希の恋のライブですかい」

初めて会って早々によく分からない挨拶をする柊。そんな柊に若干ひいている根岸。

「こ、この人があんたの言ってた友達？」

根岸は柊には聞こえないように耳打ちした。

「なんていうか、その、ちょっと無理」

「大丈夫、そのうち慣れる」

不安げな根岸の肩をぽんと叩いた。

「うわ、慣れたくないな」

「それよりも、ほら、一応自己紹介を」

なかなか話が進まなそうな雰囲気なので、とりあえず自己紹介を促す。

「うん、そうだね。私は柊彩音。で、こっちが妹の」

「柊彩夏です。よろしくお願いします」

二人は揃って頭を下げた。

「あ、えっと、私は根岸星那。よ、よろしく」

柊の態度の変わりように少し驚いてるようだった。二人とも運動部だから、そういうところはしっかりしているのである。

「おっと、噂をすればなんとやら。おーい、優希ー！」

と柊は、道の向こう側に手を振る。そこには小野坂の姿が見えた。
「ごめん、ちょっと遅れちゃったかな」

「いや、俺たちも今来たところだよ」

小走りにやってきた小野坂は息を整え、全員に軽く挨拶を済ませた。

「コレで全員？」

と聞く根岸だが、生憎もう一人いるのだ。ものすごく面倒なやつが。

「呼んだか？」

「呼んでねえよ。ってどこから出てきたんだよ」
相変わらずどこにでも現れるやつだ。

「この人は？」

根岸は聞くので、適当に答えた。

「西山晃。とりあえずテキストにあしらっておけば大丈夫だ」

「おい、その扱いは酷いだろ！」

「いつものことだろ？」

「ああ、そういえばそうだな」

と、いつも通りのやり取りを済ませる。

「それでいいの・・・？」

「これでいいんだ」

ということで、互いに自己紹介が済んだ訳で、どこに行くかを決めることになったのだが

「ここに来てちょっとしか経ってないから、色々遊ぶトコとか教えてほしいんだけど」

という根岸のリクエストに答えることになった。

「遊ぶところ、って言われても俺が行く場所はゲーセンぐらいだな」

それにうんうんと頷く柊妹。

「あとはカラオケぐらいかなあ。私もそんなに遊びに来るわけじゃないし」

「そうだよな。食べ物屋ならいくつか知ってるけど、遊ぶ場所ってそんなに無いよね」

と言う柊と小野坂。

「ちょっと外れにプールがあるけど、行くならもうちょい後だな。

あと、あのビルの二階にボウリング場があるぞ」

と西山晃。流石に地元だけあって、それなりには知っているようだ。

「他に行くところってあるか？」

「・・・・・・」

全員特に無いらしい。ほんとにみんな高校生かよ。自分もだけど。

「じゃあ、ボウリングでも行くか」

ってなわけで、ボウリング場へ向かうことになった。

こんなところにボウリング場なんてあったんだな、と心の中で呟く。生まれてこの方十余年、何度も来た筈の駅前にボウリング場があることを初めて知った。

「こんなところにボウリング場なんてあったんだね」

「ね、知らなかった」

「ですよな」

柊姉妹と小野坂も同じかよ。

「何を隠そう、ここは地元民にしか知られていないボウリング場だ

からな」

晃は胸を張っていった。

それって自慢するものなのか？

「私、ボーリングは小学生の時以来かも」

根岸は珍しいものを見るようにボーリング場の中を見ていた。

「へえ、いまどき珍しいな」

と言いつつ、自分もボーリングは数えるほどしか行ったことが無い。

「おーい、友喜。適当に登録しといたから早く行こうぜ」

「おう、サンキュウ。ほら、行こうぜ根岸」

と呼びかけたが返事が無かった。

「根岸？」

彼女はカウンターの横に並ぶオリジナルマイボウルとやらを見ていた。

その横には、月間ランキングというものが表示されていた。

「へえ、このランキングで一位になるとマイボウルを作ってくれるのか」

だが、そのランキング一位の点数は300点である。

「満点かよ」

しかも、毎月同じ人が一位で満点を取っている。

いいのかコレ。客を呼ぶための捏造じゃないのか。いやしかし、本当に毎月満点を取っている人なのかもしれない。

「ふっ、上等！ 腕がなるわ」

「もしかして、満点取るつもりか？」

「当たり前よ。一位なんて言われたらやるしかないじゃない」
マジかよ。

根岸は相当やる気のようにだ。

「どうでもいいけど、早く行こうぜ。みんな待ってるぞ」
「あ、うん」

ボウリング大会

———西山晃———

「ということで、これより始球式を行います」

シーーーーーー

「っておい、無視かよ」

「ああ、悪い。ちよつとジュース買いに行ってた」

「まあいい、俺の華麗な美技に酔いな」

奇妙なポーズをとる晃。

『ガコン!』

『ガコン!』

「ま、こんなもんだな」

2連続ガターでなに言ってるんだよ。

———柊彩音———

「ふっふっふ、この程度の球遊び、どうと言うことは無い!」

妙に自信たっぷりな柊だが、投げたボールは見事にガターに吸い込まれた。

「ふ、私のボールに恐れをなしたか」

「……………」

「なにか言つてよう!」

「いや、さっきも同じ光景を見たし……………」

———柊彩夏———

「いきます!」

何の前触れも無く、柊妹はボールを投げた。しかし、それは見事にガターに落ちていった。

あれ、もしかして三回連続で同じオチ?

「右に8cm、角度1度修正。リリース地点3cm奥へ」

なんか眩きでしたぞ。

「アタシが投げる、アタシが壊す、全てを無に、全てを有に。十の悪を善とす。十の悪を壊し壊し壊し壊し壊し壊し壊し壊し壊し壊し壊す。ハアアアアア！」

脱兎のごとく駆ける。

唸りを上げる四肢。

放たれた球は轟音を纏う。

『スコーン！』

快音を鳴らしたそれは弾ける様に飛び、全てを薙ぎ払った。

「よし！」

柊妹は小さくガッツポーズをした。

うん、何も言うまい。

————小野坂優希————

「私、あんまり自信が無いんだけど」

「大丈夫だって、なんとかなるよお」

ダブルガターの柊に言われても困ると思うんだが。

「うん、なんとか頑張ってみる」

と言って、勢い良く……いや、勢い悪くボールが投げられた。

ゆっくりと転がって行くそれは、更に勢いを失い

「あ、あれ？」

ピンの手前で止まってしまった。いや、ピンには当たっている。と言うことはピンの耐久が球速を上回っていたと言うことかッ！

「ドンマイっ！ 次はいけるよお！」

「うん」

しかし、結果は無情にも同じであった。

———藤井友喜———

「久しぶりだからな、ちゃんと投げられたらいいけど」
ボールを持ちレーンへと入る。

「よし、いくぞ」

一呼吸置いてレーンを駆ける。投げられたボールはレーンの左側を通り

「あゝ、ちょっと左に寄ったか」
倒した本数は僅か3本だった。

「今度は狙いを定めて……」

2投目。ボールは少し右によっている。だがしかし、コレは計算どおり。このボールは左へ曲がる！

『スコーン！』

予想通り。全てのピンが倒れていた。

「よし！ スペアゲットだぜ」

「……」

ってあれ、なんかみんなの視線が冷たいんだけど。

「藤井君、そこは空気読もうよ」

と柊彩音。

「見損なっただぜ」

と西山晃。

「センパイ、あの、すみません！」

と柊彩夏。

「……」

と小野坂優希。

「えっと、まあ、次があるさ」

と根岸星那。

「……………え？……………」

―――根岸星那―――

「・・・すう・・・はあ・・・」

深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「ど、どうしたんだ」

「話しかけないで」

「はい・・・」

目が怖いよ根岸さん。

「・・・」

ゆっくりと、だが、しっかりとした投球フォーム。

投げられたボールは確実にピンのど真ん中を貫き、全てのピンを倒した。

「ま、こんなもんね」

「すごいな、なんかプロみたいだったぞ」

「え、ああ、あれを真似しただけよ」

と言って彼女が指差したのは、プロボウラーの投球が連続した写真になっているポスターだった。

あれを見ただけで完璧に真似するとは末恐ろしい。

―――結局、昼飯も食べずにボウリングだけで一日を過ごしてしまった。

「くうー、疲れたー！こりゃ明日は腕が筋肉痛だな」

駅前の夕日に照らされたショッピングモールを六人で歩く。みんなとは少し離れて根岸と二人で話をしていた。

「たるんでるわね、もっと身体を鍛えなさい」

と言う根岸はオリジナルボウルを抱え満足そうにしていた。

まさか本当に全部ストライクを出すとは思わなかった。

「なんていうか、お前ってホントにすごいよ」

「ありがと、そう言ってくれるのは素直に嬉しい」

と根岸は微笑みを見せた。それは、まるで無邪気な子供のよう。

「どうだった、今日一日は？」

「うん、楽しかった。みんな面白いし、こんな感じに遊ぶのは久しぶりかも」

「お前の言う「自分で気付ける好き」ってやつは見つかりそうか？」

「あんた、そんなこと覚えてたの？」

根岸は驚くようにした。

「そりゃ、覚えてるさ」

根岸との出会いは驚きの連続だったから、彼女のいった言葉はすごく印象に残っている。

「そうね、たぶん、すぐ見つかると思う」

「そっか、そりゃ良かった」

「あんたの友達って、すごい変わってるし、意味わかんないけど、すごい言われようだぞみんな。」

「でも、一緒にいるとすごい楽しくて面白い」

「だろ、俺もそう思うよ」

「よし決めた！」

そして突然、根岸は叫んだ。

「ど、どうしたんだ？」

「私、あんたたちの学校行くから、よろしく。あ、みんなには内緒ね」

と言うと根岸はみんなの輪に走っていった。

「ほら、早く行きましょ。私もうお腹ぺこぺこなんだから」

彼女の笑顔は夕日に照らされ、とても眩しかった。初めて出会ったときは全く印象の違う、すごく楽しそうな笑顔。こんなに短い時間で人は変わるのだろうか。いや、たぶんこれが本当の根岸星那なのだろう。

案外、彼女の言う「自分で気付ける好き」ってやつは、もう手に入れているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3012i/>

あの坂道の上で

2011年12月3日23時02分発行